

時報

1957

甲南山岳部 甲南山岳会

目 次

1956年度部の歩みと方針	雨 官 宏 光	1
1957年度 " " "	田 辺 潤	3
高校山岳部最近の歩み	大 関 和 夫	3

報 告 大 学

才3回 剣西面合宿	冬 期	早 月 尾 根	6
才4回 " "	春 期	小 窓 尾 根	9

報 告 高 校

涸 沢 合 宿	夏 期	1 5	
山 岳 寮	随想、紀行	先輩、現役	1 7
研 究	雪崩に就いて	4 1	
	積雪期の劔西面	4 6	
詩	寒 山 行	5 5	
	登 攀 生	5 6	
年 報	1956年7月	1957年11月	5 7
小窓尾根事項報告		7 0	
搜 索 報 告		7 5	
事故反省会誌事録		7 9	
名 簿		8 1	
編 集 後 記		8 4	

部の歩みと方針

1956年度 経4 雨宮宏光

部も設立されて4年、初期の先輩達の労苦も実を結んで装備、部員共に充実し、ケルソの基礎も築かれた今、更に高く石を積み重ねていくべき年であつた。我々にとっては、1年その時々
の合宿に際してどの山をえらぶかという事は、すでに定まつた一つの事実であり——前年度リ
ーダー会に於て剣西面集中合宿が結論づけられていた。——それは剣西面であつた。しかし卒
直にいつて前年度リーダー会から我々への引継ぎの際に完全な意志の疎通がみられず、ために我
々は、何故に剣西面集中合宿が部の主題となつたかについては、はつきり知らなかつた。夏をむ
かえて合宿は意外にも穂高に決定した。定まつた主題を何故見離すのか。この事は一口にいつて
リーダー会の不成熟を意味していた。もしリーダー会が完全な合宿の決定をなすならば、冬でも、いく
るに合宿してその状態を詳しく知ろうとしていたであろう。夏山は雪上では、別な世界、全員のレベル向上を
目指すというならそれは詭弁であつた。我々の如き弱伏の部にそんな余裕はなかつたはずだ。しか
るに穂高の主張者に対する主張者は、議論の果ては、沈黙を守り、沈黙は賛成とみなされて合宿穂高に決定した。チーフリーダーの
云う事は絶対だという誤れる認識が沈黙をみちびいたのだ。それと剣では昨春事故があつたから
今年はさけた方がいいという根拠薄弱な意見に失望を感じたからである。だが一度定まつた以上
合宿で大きな成果を期待するのは人情であり、奥又白、岳川、で上級合宿を行い、終つて酒沢で
新人合宿を行つた。合宿についていうなら成功であつた。縦走についていうなら完全な失敗であ
りむしろやらぬ方が良かった。不馴なリーダー達は、縦走の随所で若さを露呈し、それが部員の
不満をかい、遂に二年部員2名の途中下山により不満は爆発した。両者共に云分はあり、後の
反省会でも結局結論が出ずじまいであつたがこの2部員の処置をめぐるリーダー会は困惑し、
一応の案を発表した所それが4年部員の非難を受け、この頃になつて、部員もリーダー会自身も
その再編成を考え始めた。9月の終り新たに、三年2名でリーダー会が構成された。所で正直に
いつてその時迄部は剣をさけて穂高にいつたというにすぎず、方針のようなものは何もなかつた
それで直ちに何らかの方針を考える必要があつた。しかし我々は方針を考える前にとにかく剣西
面に登ろうと考えその考えの前に全ての雑音を彼方えとおしやつた。——誤つていたのだが
只我々は西面集中登山という事を次の様に考えていた。集中登山は部のレベル向上に最も有効で
ある。西面は少人数をもつて登攀可能なルートが必要だという我々の希望をかなり満足させてく
れる。・・・・・・である。今いつた事は我々が集中登山をかくかく解釈していたという事であ
り、最後に集中的登山とは、西面で考えられるすべてのルートを登り終えた時に完成されるもの
であると考えていた。そしてこの西面という主題を媒介にして今迄「上向き」一方であつた部の
行動を一步すすめて「横向きの登山」をなす部にもつていくのが我々の方針であつた。今少し余
裕をもつて稜線上に腰をすえ、HIGH、CAMPから再び出発しよう、つまり雪の山を夏の山
同様に広く愉快地歩けるような部にしようというのであつた。冬をむかえて合宿は早月尾根と決
定した。この合宿は意外の好天の連続に全てがスムーズに動いたが、合宿内容に大きな成果をあ
げた合宿であつた。入山から下山まで、全部員の志気は極めて旺盛であり、且チームワークも完
全であつた。加えて登頂出来たという事は一層意義があつた。春をむかえ、冬の余勢をかつて一
層の発展をなさんとしたが、参加人員の激減を見、一時は合宿する事さえ危ぶまれた。それは余
りにも部室での理論に終始しすぎて純率な登攀意欲が減退していたためである。昨年度のリーダ

一会は春山直前の人員急減に際して大天井から北穂のポーラをすてて合宿を剣に変更した。それは余りにも急であつて僕は戸惑つた。しかし人員急激はリーダーの余測外の事であり、それが急であつた事を考えると当然そうなされるべき決断であつた。ではどうしてそのような処置をとらなかつたか。それは昨年度の部の方針が全く一貫性を欠いており、度々の方針変更僕達についていく事が出来ずそれが部の発展を大きく阻害していた事から少々無理はあつても部の行動に一貫性をもたすべきだと考えたからであり、更にいうなら剣西面という主題を見離す事は、感情がもはや許さなかつたのである。春山参加人員の急減に動揺した我々は、もはや飛躍をもつてする他に部の発展は不可能だと考え、そんな考え方が功を焦つた小窓尾根の登はん計画となつて現れ、事故を引越して春山は、全面的に敗退し、失敗は固りかけていた部の基礎をもえぐり取つた。事故の原因は報告で記すとして、間接的原因の最大のものは私の誤つた考えにあつた。つまり部の発展を考える時、4年間という短期間では、登山技術を完全に取得するにはみじかすぎ、加えて上の部員が常に新人の養成に追はれていたならその悪循環の内に部の進歩していく余裕があるだろうか。現実には不可能のように思える。ここで次のように考えた。STEP BY STEPに依る進歩などというものは、単に理論の上での話であつてそれには、部のレベルが毎年進歩しているという前提がなければならない。だが現実にはその前提を望むべくもない。合宿参加人員の多少という事実だけで、部のレベルは激しく動揺するではないか。にもかかわらず進歩を求めるならそれは飛躍に依る他はないと結論づけたのだ。だが登山に於てある事柄を結論づけてしまう事には非常に危険がある。結論をだす前に今一つ別の方法を慎重に考えねばならない。春山の事故で我々は間違に気付いた。矛一に我々は進歩、進歩と二言目にはいうが一体何をもちて進歩というのか。部の根本方針に近づく事をもつて進歩と考えるなら、我々の根本方針は何であつたか。それは良き登山者の養成であつたはずだ。余りにも常識的すぎるこの事が考えられなかつたのは何故か。雪と氷の岩壁に攀じ、長大な稜線に於て一大ポーラを展開し、激しい長時間アルバイトでもつて一気に登攀し終える事をもつて進歩と考えていたのだ。勿論これが全部誤つていゝとはいわない。しかしこれだけでは、技術面のみ発展した変態的登山者に陥入る危険がある。根本的な考え違いをしていた。こう考えると先述の大学山岳部の進歩はいかにすれば可能かという事が自ずから永解した。僕達が一個の完成された登山者たらんとするに、四年の部生活は余りにもみじかい。そこでじたばたする必要はない。部生活では登山の基礎的技術と知識が習得されたらそれで充分である。登山者への道は果しなく長い。飛躍という旗を掲げて突進する事、それ自体が間違っている。極単な云い方が許されるならば、部が常に進歩を願う事が誤っている。表現が極単にすぎた。つまり、登山者の養成という目的を犠牲にして部の進歩を計つてはならないという事だ。虚栄の山行にキスリングを担いではならぬ。苦しみと経験は全て、マウンテニアの完成という目的にむけられるべきである。この考え方では部中心主義はすてねばならない。今迄僕は部という大義名分の前に部員という。個人を深く考えなかつた。自分についても同様であつた。しかしこれは間違っている。これでは、もはや運動部ではないといわれるかもしれない。しかし僕はそういう人の腕をつかんでいいたい。良き登山者たらんとする試みが、スポーツ、アルピニズムを生みだしたのであると。

1957年度の部の方針と歩み

田 辺 潤

春山に於てAccidentをおこした我々にとって今後の部が如何なる方針のもとに歩んで行かねばならぬかと云う問題は、非常に大きな、且重大な問題である。それは大学山岳部創設以来とられて来た部の方針と云う物が、現状に則し妥当であつたかどうか。又その方向が歪んでいなかったかどうか。と云う批判によりはじまり、そして今の我々の現状と考へ合せて、今後の方針が決定されねばならないものであると思う。

そこで、創設以来の部の歩みを振り返つて見ると、装備の充実、各人の技術のみを部の基礎と見なし、所謂、3年計画なる方針を打ち立て、3年たてば装備、技術共に充実し基礎が出来ると考へた。しかしこれは具体的な、力量の基礎であつて、本来の基礎即ち、組織の力とか、伝統の力を無視した偏視眼的な考へ方であつた。そしてその故に部は港聞の一流の山岳部たらんと登攀ばかりに氣をとられ、クライマー養成に偏重し、マウントニヤー養成に欠けていたと思われる。その極が今年の春山に於けるAccidentとなつて表われたのである。この間の批判、反省は前年度リーダーの雨宮の文と重なるのでさける。

そこで今の我々に課せられた使命は本来の基礎を作り様努力する事である。技術的、体力的に旧制高校山岳部の先輩達にさして劣つていとは思わないのに、あの様な優秀な登山が出来ないのは、福田泰三先輩も云われた様に、本来の基礎が出来上つていないからなのである。これは一朝一夕には出来る物でないのは勿論であるが、その様に出来るだけの努力はせねばならない。そこで今部の現状を見ると、上級部員が不足しており、いつそう活動に慎重を期さねばならず、これは今夏の劔岳二服合宿に於ても搜索と相俟つて大きな支障となつたが、飛躍を求めぬ我々は、充分の成功を得たのであつた。しかし問題となるのは積雪期の登山であつて、これは先程も云つた如く、部の基礎も出来て居ないのに、劔岳西面集中と云つた様に、どの様な状態の場合にもこの山に集中せねばならないと云う様な形式にとらわれた無理をせず、部の基礎即ち、組織、伝統の力が出るまではその場、その時に応じたレベルで山をえらび、そこでより完全な登山を行い、マウントニヤー達成を目指して心氣一転やりなおして行ふと思う。

高校山岳部最近の歩み

大 関 和 夫

再建以来、甲南高校山岳部は、新制高校山岳部として高いレベルを保ち、着実な歩みを続けて来たと思う。しかし、この一年の部の歩みをふり返つて見る時、我々はおずおずと伏目にならざるを得ないのである。56年度冬山合宿より、リーダーシップを取つて来た私にも充分責任があつた。夏には薬師、槍ヶ岳縦走を終え、二学期に入ると、当時のリーダーは夏山合宿前後の種々の問題から、部室にも顔を出さなくなつた。この辺の事情は入部もない私には理解出来ない事

であつたし、良くは知らない。十月半ばの部員総会で高三部員の方から、リーダーをする様、柏木、竹原、大関、の三人に申し渡された。竹原を中心に、三人で合義しながらこれから部を運営することになったが、障害はあまりに多かつた。だが我々はフアイトは充分であつた。中学の二三年の部員とも連絡をとり、ロックガーデンに道場に出かけた。その間に、中学にも部員が増え、冬山合宿を迎え、我々高口功歩の最期を語りながら、今中学部員を育成することの方針と関し、スキー合宿を行った。この合宿では、中学部員のスキー技術向上、そしてチームワークの面で大きな成果があつたと思う。部員今までにない明るさを取りもどし、フアイト燃えて再び一致団結して来るべき春山準備に、三学期が始まると備品の修理、購入、計画、研究会と早くから準備を進めていた。この年卒業の高三そして我々高一を中心に十二名の部員の参加で、遠見尾根合宿を計画した。だが、出発を目前に大学山岳部劔岳遭難の報を受け、春山合宿ははかなき夢と化し、学校側より中止を申し渡された。遭難対策本部の手つだいや救援隊の高校部員参加で、春山合宿は事実上不可能となつた。だが、早くから、取りそろえていた春山用装備が救援隊にすぐまわすことが出来たので、準備も無駄に終らなかつたわけだ。この遭難は、ただ単に、春山合宿が変更されたと言う昨年度（小窓尾根に於ける木全さんの事故）とは、意味が違つていた。初の犠牲者を出したことが、高校、中学の部員に与える精神的打撃は大きかつた。又その犠牲者が先輩の福永さんであつたことはなお一層であつた。弟の福永建治君が高校の部員であり、その兄さんであつた遭難者は、又一倍練習に熱心で山へ情熱にもえたたせ、皆尊敬していた先輩だつた。救援隊参加の高校部員が劔岳より帰ると、すぐ乗鞍岳へスキー合宿に出発したが、皆浮かぬ顔で、なんとなくフアイト喪失の形であつた。この合宿への参加者は六名と云う少人数で、計画もなしに急に変更された合宿の当然と云えるべき失敗に終つた。ただスキーがうまくなつたこと位で、一週間早々で乗鞍岳より帰つて来た。57年を迎え、高三となつたが、我々は部の一線から退くわけにはいかなかつた。しかし、竹原、柏木、大関の合議制も、大学受験勉強のため、事実上くずれ、柏木、大関しかもう高三で動ける部員が居らなくなつた。高三のリーダー会の他の部員は部から離れた形であつた。夏山合宿前までは、どうやら高校単独の活動を行つて来たが練習中大関と柏木がバットレスで、落ちると云う不覚を取り、我々も遂に部より退ぞかざるを得なくなり、夏山合宿、劔岳二服計画は学校の反対に合い、八方ふさがりの状態と落つてしまつた。しかし、大学そしてDBの方々の御援助により、どうやらこの難関を切りぬけ糖高酒沢で夏山合宿を無事終る事ができた事は感謝に堪えません。夏山合宿後は大学高校合同で大学が、今しばらくの間高校の指導をして下さることになり、一応部の前途に灯が見えたわけである。以上、最近の高校山岳部の歩みをふり返つてみたわけである。高校山岳部の歩みをふり返つてみたわけである。高校山岳部は戦後、部員不足を最大の悩みとして来た。部員の不足を云う問題は大きなものである。運動部と云うものは普通ピラミットの頂点に優秀な部員、そしてその底面に多くの部員を有していると云う事が、もつとも望ましいことかも知れない。だが山岳部特に高校では他の運動部の様に部員が集まらない状態である。私はいままで部員不足を理由に、高校山岳部が大学等の外部にたよりすぎたと思うのである。甲南では登山者や、スキーは他の学校に比し非常に多いが、山岳部に入る者は少ない。それは部に入つて苦しむのがいやだと云うのが大きな理由だと思う。少くとも、山岳部員たるものは、この様な風潮になびかず、山岳部員たることに誇りを持つていただきたいと思うのである。部員が少くて何もできないと云うことは理由にならない。今居る部員が一致協力したら、もつと立派な部になると思う。少い部員が、ガッチリ団結していくのが部員の不足を補うもつとも良き方法だと信じる。もちろん対外的な宣伝と云うべきものは必要と考える。又甲南高校山岳部の短所にリーダー問題がある。はつ

きり云うならば、高校山岳部が大学山岳部創立と共にこの悩みをかかえ込んだと断言したい。今まで高校リーダーで部を去った人がいる。こんなことは他校では考えられないことかも知れない数年前までは、あまり問題化されなかつた事だが、大学山岳部の高校指導と云う点で、高校リーダーは大学の先輩と高校現役部員の間にはさまり、苦しむのである。大学の方が高校の合宿に参加していただく場合、あく迄高校のリーダーの自主性を妨げぬ様にしていただきたい。この点高中山岳部が甲南学園山岳部の中の一部門と云う立場に立つた今、充分、大学のリーダー会で考慮していただきたいと思うのである。高校でも大学でも良き部員を育てると云うことが、山岳部を強くすることだが、私はこの過程で、一人の落伍者も出したくないし、又一人の犠牲者も決して出してはいけないと思う。大学山岳部は、近年、所謂運動部の形態と云おうか、そう云う組織が段々がつちり組まれて来たと思うが、こう云つた組織を高校山岳部にそのままあてはめるのは一考する余地が有ると思う。高校と大学と云う年令の違いがあるし、その事は又、山に対する考え方が阿方共に違つと云う意味であつて、その違を考へないで、大学の部組織をそのまま高校に受け入れるのは、色々障害があると思う。甲南高から育てて来る部員は大学までにすでに、六年の山の経験を期間的には得ることが出来る。つまり我々は非常にめぐまれているのだ。大学山岳部が高校山岳部員を指導する場合、今云つたような事をよく考慮していただきたいと希望するものである。

冬 山 行 動 表

		極楽寺	伊折	取入小舎	A.C.I 1200米	A.C.II 1950米	3003米
21	雪	8 →	雨宮、麻昌、柳沢、行友、田辺、	竹中、芦田、福永			
22	雪	5 →	3 → 雨宮、田辺、芦田				
23	雪		3 →				
			5 →				
24	雪		5 →	3 →	麻昌、田辺、福永		
25	雪			3 →	CI建設 田辺、芦田、福永		
				5 →			
26	雪			2 →	3 →	田辺、芦田、福永	
				3 →			
27	晴			1 →	3 →	CI建設	
				2 →	2 →		
28	晴後曇			2 →		3 →	
				2 →		才一回ATACK	
29	晴			2 →		才一回ATACK	
30	晴後曇	← 麻昌、行友、下山			2 →	3 →	登 頂
31	曇			3 →			
				3 →			
1	晴後曇	← 雨宮、福永、竹中、下山					
2	晴				早月1900米附近迄スキー		
3	晴						
4	晴						
5	曇	← 柳沢、田辺、芦田、下山					

才三回劔西面合宿早月尾根

目 的 早月尾根ヨリ劔登頂 冬期 雨 官 宏 光

期 間 12月20日ヨリ1月4日

人 員

雨 官 宏 光 (3)	麻 島 重 彦 (3)	柳 沢 正 (4)
行 友 利 安 (4)	田 辺 潤 (2)	竹 中 寛 (2)
福 永 隆 一 (1)	芦 田 匡 平 (1)	

全 荷 重 量	124貫(内20貫荷揚げ)	
個 人 装 備	1人6貫(スキー共)	計 48貫
共 同 装 備		24貫
食 糧		52貫

劔西面が部ノ主題トナツテ初メテノ冬ヲムカエ、部の合宿ハ早月尾根ト決定シタ。ソレハ現在ノ部ノレベルカラ考エテ西面デ我々ノ登 可能ナルートハ早月尾根ノ他ニ見当ラズ他ノイヅレノ尾根モソノ取付ニ至ル迄ノ雪崩ノ危険、徒渉ノ困難ヲ考エル時、春ハトモカク、冬ハ除外サレルベキダト考エタカラデアル。十一月ニ偵察ニ出掛テ早月尾根ノ2800迄登リ、昨春早月合宿ニ参加シタ二名ノ部員モ一応早月尾根ノ状態ヲ詳知シテイタノデ我々トシテハ登リ得ル自信ハアツタ。12月20日全員デ出発シ24日ノ日バンバ島ニ全荷物ノ集結ヲ完了シタ。入山当時ノ積雪状態ニ関シテイウナラ、12月初メカラ20日間程毎日雪が降り続キシカモソノ間風ノナイ日が多カツタメ、重イ雪ガフツワリト積ツテイル状態デアリ、コレガラツセルヲ非常ニ苦シイモノニスル事ガ予想サレタガ、果シテ24日偵察トラツセルノタメニ出発シタ麻島、田辺、福永ハ、空身デアツタニカカラズ、取入小舎カラ1200米附近ニ遡スルノニ、スキーデ腰迄ノラツセルニ悩ヤマサレ往復12時間ヲ要シシマツタ。ココデ最初ノ計画通り1900米附近ニ天幕ヲ設営シテ全員登頂スル事ハ、天幕ノ建設ニ多クノ日数ヲ要シソノ間滅多ニナイ晴天ヲ逃シシマウオソレガアツタ。タメニ天幕ヲ当初ノ計画通り1900米附近ニ設営スル事ハ不可能デハナカッタガ、ソレデハ日数ヲ無駄ニ費ヤス恐レガアル事、天幕設営後降雪ニ依ツテ小舎カラテント迄ノラツセルヲ消サレ両方ノ連絡ノ切レル事、人員ノ減少スルヲ集時ノ皆ノ負担ヲ出来ルダケ輕クスル事等カラ当初ノ計画ヲ変更シテ尾根ニ、二ツノ天幕ヲ設営シ、オニテントカラ、ラツシユニ依ツテ伸ビ悩ヤンダアブローチヤー一氣ニ挽回スルノガ最善ト考エラレタ。CIノ設営ニ関シテハソレガ大型ノカマボコデアルタメ斜面ヲ大キクズリトツテ、ズリ落チテクル雪ヲ出来ルダケサケルヨウニシ、入口ハ池ノ谷側ニ向ケタ。更ニ大キナ樹木ノ背後ヲ選ンダタメニ風ニ対シテノ条件ハマズマズデアツタ。ソノ後ノ降雪状態ニツイテイウナラ雪ハ毎日降ツタノデアルガ、一日ノ降雪量ガ少ク、一度ラツセルシタ道ヲ再ビ激シイラツセルデ苦シム事ハナカッタシ、除雪ニモ大シタ苦勞ヲ要シナカッタノハ幸デアツタ。即チ我々ヨリ遅レテ入山シタ他パーティーハCIヲ1400、1600附近ニ我々ヨリズット楽ニ建設シ得タノデアル。12月27日ノ日雨官、竹

中、田辺、芦田、福永ノ五名デCⅡ建設ニ向ツタノデアルガ、前日1800附近迄輪カンデ腰、時ニハ全身ヲ没スルラツセルニ耐エテ頑張ツタ、田辺、福永、芦田達ノラツセルガアツタメ予定通り1950附近ニ三人用ウインパーヲ設営スル事が出来タ。CⅡ設営ニ関シテハ日本海側カラノ強風ニ対抗スルタメニ出来ルダケ樹木ノ背後ヲ選ビ、ブロックハ積みヨウノナイ雪田、アエテツマナカツタ。コノ日ハ絶好ノ晴天デアリ、コンナ日ヲボツカニ費イヤシテシマウノハ何トモ残念デアツタ。テントヲ張り終エ食事モ終ツテ寝袋ニモグツタノハ10時近クデアツタガ、今日ノ好天ガ明日ノ曇天迄ハ持続スルデアロウト思イ、西面独特ノ悪天候ヲ考エル時、明日ノ天気ハ絶対逃シテハナラスト思ツタ。ソノタメニモ起床一時ヲコエテハナラスト考エ、ホトンド寝モヤラズ起床シタノハ12時30分デアツタ。

12月28日 晴後高曇後吹雪

疲レテイタノデ全然食欲ガナク紅茶トパンヲ少シ喰ツタダケデ出発シタ。出発ハ2時15分、気温ハ -12°C 。風ハナク、星ノ輝ヤク夜デアツタ。輪カン、アイゼンノ併用デ出発シタノデアルガ以前カラノ無風状態ガ災シテ相変ラズ腰迄ノラツセルノ連続デアツタ。ラツセルヲ更ニ苦シイモノニシタノハ行手ニ立チ防ガル雪ノ壁デアリ、コレヲ崩シ乗越スノハ非常ナ努力ヲ要シタ。雪底ハ全テ池ノ谷側ニ張り出シテイタガ、尾根ノ幅ガ狭イタメニ問題ニスル事ハナカツタ。テントヲ出テ直グノ富山平野、能登半島ノ冷エタ夜景ガサエタ印象トナツテ残ツテイル。2500ヲスギル頃カラ高曇リトナリコレカラノ天候ガ気遣カワレタガ、天気ガ悪クナレバ引返ス事トシテ、ラツセルヲ出来ルダケシテオク意味デ、イケル所迄イコウト思ツタ。2650附近デ夜明ヲ待ツタメ出発後始メテ休ンダノダガ寒クテジツトシテオレズ直グ出発シタ。ラツセルハヒザ位トナリ大変楽ニナツタ。2700ヲ過ギル頃ヤツトクラヌトシタ雪ニ出合シ快調ニピツチヲアゲル。コノ頃カラ懸念サレタ天候ハ完全ニ崩レ一面ガスニ包マレテ強風ガ我ヲアオツタ。2800ノ大隆起ヲスギ、池ノ谷側ノ斜面ノ状態ヲ見ヨウトシタノデアルガ視界ガ20米位シカキカズ、一貫シテ尾根通シスス事ニシタ。シンガシラ手前ノ岩峰デザイルラツケ、アンザイレシツツ進ム。ヤガテ20米程ノ雪ノ壁ニツキ当ツタガ、ソレヲ強引ニ登ツテシマツタ。コノ頃視界ハ全クキカズ、自分達ガドコニイルノカ全然見当ツカナカツタ。只僕達ハトンガツタ岩ノ丁度頭ニイルヨウデアリモウコレ以上進ンデハ危険ダト思ツタ。頂上迄下手スレバ岩稜ヲ伝ワネバナラス事ハ覚悟シテイタガ、一番恐レタノハ降りノラツセルヲ消サレル事デアツタ。9時45分引返ス事トシテント迄急イデ逃ゲテキタ。テント着ハ12時10分ワズカノアルバイトデハアツタガ、応ラツセルヲ2800迄ツケテキタノデ今後ノ好天ヲマツ事ニスル。夕方ノ4時頃カラ吹雪トナリ強風ガテントヲタタイタ。天気予報ハ明日ハ雪ト告ゲ全員疲労シテイタノデ馬鹿ノヨウニ眠ル

12月29日 晴

明クルー夜起キタノハ9時頃デアツタガ外ヲ見レバ晴天、シマツタト思ツタガカナリ降雪ガアリ今カラ、ラツセルシテイクノデハトモ間ニ合ワズ一瞬皆シュントシテシマウ。ソレニシテモ昨夜ノ吹雪ト天気予報カラ考エ合セテ今日ノ天気ハ全ク意外デアツタ。西面ノ天候変化ガ非常ニ急激デアリ事前ニソレヲ予知スルノガ全クムツカシイノヲ今更ノヨウニシツタ。

12月30日 晴強風後曇

午前1時起床、3時40分出発スル。2時現在ノ気温ハ -6°C デアツタ。二日続キノ晴天ノタメラツセルハモハヤナイデアロウト考エアイゼンノミデ出発スル。シカシコノ尾根ニ於テ注意スベ

キハ西風ヲ直角ニウケル部分ハタトエ降雪ガナクトモ風ノタメニラツセルヲ完全ニ消サレテシマ
ウ事デアル。モットモツレハ部分的デハアルガヤハ、輪カン、アイゼンノ併用ノ方が良イト思
ウ。2700ニカカル頃夜ハ白々ト明ケラストシタ雪ノ上ヲ快調ニススム。今日ハ視界ガ完全ニキ
イタタメシガシラ、エボシ岩共ニ池ノ谷側ノ急斜面ヲトラヴァーススル。雪ハカナリ深クヒザ
位迄モグツタガ、時々シユルンドニ出合シテ全身ボツソリハマツテシマウノエハ弱ツタ。300
米程トラヴァースシテ頂上直下ノホルンゼ目ガケテ60°近イ雪ノ斜面ヲ200米程直登シタノ
デアルガ、コノ部分ノ雪ハ固クシマツテオリ、ピツケルヲ前方ニ突キ刺シ、靴ヲケリコム事ニ依
ツテ足場ハ容易ニ得ラレ樂ニ登ル事ガデキタ。頂上直下ノホルンゼハ氷ト岩ノM1xシタヨウナ所
デ一枚岩ノ上ノアイゼンガズリ落ちソウデ氣持ガ悪ク急ノタメニザイルヲ出シタガ、ソレ程ノ事
モナカッタ。ホルンゼヲ登リ切り左ニ折レテ50米程ススムトソコガ頂上ダツタ。頂上附近ニハテ
ント場ハ多クアルガイズレモ風ニ対スル条件ガ極メテ悪イ。又アノ雪ノ固サデハ太イ針金ノベグ
ガ有効デラウト思ツタ。長次郎谷ハビツシリト雪デウズマツテオリ、デブリハ全然見ラレナカ
ッタ。源次郎尾根ハ両側ニ複雑ナ雪庇ヲ構成シテオリ、例ノ二峯ノ懸垂場ノ所ハ岩ガ露出シテイ
テ直登ハ不可能ニ見エタガ長次郎側カラ登レソウナ氣ガシタ。小窓尾根ハ下カラズツトカナリノ幅
ノスノーリッジガ続イテオリ、早月カラ見タ時行ケルノカト思ウアノM型ピーク附近モ案外樂
ソウニ見エタ。10時ニ頂上ニツキ、無風快晴トイウ好条件ノタメ、頂上デココアヲ飲ンダリ景色
ヲミタリシテ40分程坐ツテイタガ、全ク暖カク春ノヨウデアツタ。帰リ往路ト異ツテ右俣ノ
支沢ヲ一氣ニ250米程下リソコカラ2800目ガケテガムシヤラニトラヴァースシタガ、日射
デ雪ノ表面ガカナリユルンデオリ若干雪崩ノ危険ヲ感シヌデモナカッタノデ必死ニナツテ歩キ稜
ニ出タ時ハホツトシタ。トタンニ大日方面カラノ強風ニタタカレ、雪塵デ目ガアケラレズ時々立
止ツテ顔ヲオオツタ。テントニ着イタノハ1時デアツタ。

以上早月尾根ノ記録デアルガ、コノ尾根ハ下カラ上迄ダラダラトラツセルヲシタトイウ感ジデ
アリ、技術的ニハサシテ困難ハ感ジナカッタ。ザイルモ結局使ワナイモ同ジダツタシイササカ拍子
拔ケガシタ。モットモ天氣ガヨカッタカラソウ思ツタマデデアツテ、条件ガ悪ケレバカナリ手強
イ尾根ダト思フ。

宿合面西劍回四才

光 宏 宮 雨 期 春

- 目的 1 小窓尾根登攀
2 国境稜線に至る谷の研究
3 長時間アルバイトとそれに伴う計画的ヴィヴアークの研究。

人員

雨 宮 宏 光 (経3) 麻 島 重 彦 (経3)
竹 中 寛 (経2) 福 永 隆 一 (経1)
伊 丹 弘 忠 (経1)

出発時全荷重量 58貫
個人装備 28貫
食糧 26貫
装備 4貫 (大部分荷揚げ済)

3月10日 5名出発

3月11日 稜泉寺～伊折

3月12日 伊折～取入小舎 雨宮、麻島、竹中
伊折～稜泉寺～伊折 竹中、福永

3月13日 晴

取入小舎～伊折～取入小舎 三名

伊折～取入小舎 二名

3月14日 晴

取入小舎～S字峽左岸早月尾根 1900米よりくる支尾根下に荷物をデポする。

ブナクラ出合で徒渉に時間をくう。

3月15日 雪 沈澱

3月16日 晴

5名にて出発デポ地点にカマボコを張る。

夕方小窓尾根取附点を偵察する。尚テントの直ぐ下に20米NYLONザイルを固定する。

3月17日 小雪 沈澱

3月18日以後については事故報告に記載。

先に我々は、冬期早月尾根の登頂をなし、その余勢をかつて春一層の発展をなさんとしたが、春山参加人員の激減は、リーダー会に動揺を与え、飛躍をもつてする以外に部の発展は考えられぬと結論づけさすに至った。その様な考え方が当然計画となつて現れ五人にしては大きすぎる計画になつたと思う。

〔計画が事故の原因の最たるものであつた由多少詳述する。〕

小窓尾根計画

前年度阿部先輩等に依つて2000米迄登られ、三度登つた早月尾根を論外におく時、今年の春は小窓尾根を登るべき時であると考えた。かなり長大な小窓尾根登はんの際して前進天幕を設けなかつた理由を記す。

- 1 隊員の体力を出来るだけ温存しておきたい。(後述する計画のために)

- 2 剣西面独得の悪天候を考える時前進天幕を建設しておれば登攀の機会を逃す恐れがある。
- 3 計画的なヴィヴァークが前進天幕の意味をかなりはたしてくれるのではないか。
- 4 今迄の小窓尾根登攀記録を簡単に解釈して一日で登攀可能と盲信した。
(今迄の三つの登攀記録はいずれも池の谷出合附近から16時間から22時間のラッシュに依り完登していた。)
- 5 最後に先述した飛躍という意味の実践も小窓尾根登攀からまず開始すべきだと考えた。

以上でありアタックは前記3名とし帰路は小窓谷とした。それは西面の谷の状態を出来るだけ知りたかつたからであり、山を広く歩きたかつたからである。

(池の谷左俣計画)

将来の稜線上(HIGH CAMP)より出発する登山にそなえて、西面中国境稜線に至る最短コース左俣の通行を考えた。アタックを雨宮、伊丹の2名とし、残りの3名にはラツセルの少くなる二服附近迄サポートしてもらい、2名は三の窓に出て後、ジャンダルムかニードルのいずれかを登攀して、コルデヴィヴァーク後下山する予定であつた。

(乗鞍スキー合宿)

3月の後半には西面合宿に参加出来なかつた部員も多くひまになるため、できる限り全員の参加した山行をやるという意味でこの計画をなした。これには何の成果も期待せず、ただチームワークの強化が目的であつた。

小窓尾根一本に集中せず総花的な考え方になつてしまつた事に当然多くの問題があるが、それは後の反省報告を参照して下さい。

3月13日小舎に荷物を集結し終えた我々は14日オーカmpを建設すべく、雪の白萩川を遡つた。今迄かなり好天が続いていたため雪はすっかり落着き、スキーでヒザ止まりの軽いラツセルに、気分良く春の陽光を背に歩いて歩いた。S字峽附近に達して更に進もうとしたが何分時間が遅く雪崩の危険があつたので、S字峽の右岸に荷物をデポして引返した。デポ地点は雪崩には絶対安全な場所で最初のCAMP予定地から余り離れていないのでそこにテントを張る事にしてしまつた。

3月15日 晴後薄曇

五人で天幕設営に出发し予定通りの場所に大型カマボコを張つた。暖かい日であり五人で嫌になる程雪面をふみ固め、枝をしきつめて完全なCAMPを設営したため、設営に二時間以上費いやした。長い居住の際見られる床の沈没を防ぐため、テントの下部と雪面の間に1米四方のベニア板を引きつめたが結果は極めて良好であり、下からの寒気がほとんど伝わらず、寝ていても全く暖かであつた。(ベニア板の代りにスダレを使うのもいい)。

夕方小窓尾根の取付きを偵察するため出発しテントの直ぐ下に20米NYLONザイルをフイックした。この部分は、無雪期は20米程の一枚岩のトラヴァースが重要な場所であるが、雪のついたトラヴァースは簡単に滑り落ちてしまうのを防ぐためである。小窓尾根は去年登つたのに比べて竹が、自分より下がる方が多いので、いずれにしるどのルンゼをつめても尾根に出

る事に変更はないのでそこを取付き点として赤旗をつけて帰ってきた。

3月16日 小雪 沈澱 積雪20㎝

3月17日 曇 沈澱

3月18日

17日の夕方から雲は完全にきれ好天の続く事が予想された。21時に雨宮、伊丹の2名で、炊事にかかり、23時全員を起して食事にした。18日午前0時20分テントの外にでてみると星がきらめき、気温は-6℃であつた。0時40分全員で出発した。輪カンアイゼンの併用で出発したのであるがラッセルはさして無かつた。オ2ルンゼの中え入ると、急にもぐり出し、始めは太モモ位上では胸迄もぐつた。ストックで雪をかくとバサツと2米四方位一辺にくずれ、余程朝早い内にこのルンゼを降らないと恐ろしい事になるように思えた。2時10分尾根に出たが、ラッセルはいく分軽くなり、ヒザ位となつた。もつともこれは朝早くて雪が緊つているためであり、陽が昇ればもう少しもぐるだろうと思つた。そこで余りもぐらぬ内に、ピッチをあげて稼ぐべきだと思つた。2時間程歩いた時左下方に白萩川がぼんやりみえた。それから30分歩いて僕達はアタック隊と別れた。地点は、はつきり分らなかつたが1800の小ピークの少し手前であつた。帰路オ2ルンゼを下つたのだがずり落ちそうな急斜面であり、ひやひやした。少し段になつた所を降つて後を見ると僕の作つたステップが崩れており、後からくる伊丹がスリップしそうな気がした。段から少し下つて構えていると伊丹が段の所で前向に倒れ宙がえりして僕の方へこるがつてきた。夢中で彼のサブをつかんだがそれよりも早く彼はビッケルのシャフトを真直ぐに根元迄突き刺して完全に止まつており、実に見事な確保であつた。それからは、飛ぶようにテント迄帰り、朝飯を喰つた。夕方3時20分雪崩の危険も去つたので、2人で出発した。僕達は輪カンで出発したのだが、当然スキーでいくべき所であつた。そのためラッセルに悩まされ、直ぐ目の前に見える大窓^{小窓}に出合^{出合}て^て達しなかつた。19時40分出合につき20分程大声で叫んだが、一向下山の気配もないので、ヴィヴァークしたものと思い引返した。夜中と朝早く歩いただけであつたが、日中の白萩川は雪崩の危険が非常に大きいように見えた。上の方では、川は大きく開け雪崩の危険はなさそうにみえた。

尚参考までに、アタック隊の携行した装備、食糧を記しておく。

品 名	数 量	備 考	発 見 済
40m麻ザイル	1		断 片 発 見
ハ ー ケ ン	6		
アイスハーケン	4		
ハ ン マ ー	1		
捨 縄	2		
カ ラ ビ ナ	5		
百 匁 ロ ウ ソ ク	1		
携 帯 燃 料	2		

NYLONツェルト	1	2, 3人用	断片発見
マッチ	3		
カメラ	1	ライカMIII型	
ヘッドランプ	3		破損品発見
電池スベアー	9		6ヶ発見
細引	若干		
赤布	■		
薬品	■		

食糧	数量	個人装備	収得済○ 発見済△
パン	6ヶ	麻島	
クラッカー	6本	リック	
チーズ	1 1/2 P	レースシャツ	○
ヨウカン	6本	毛Yシャツ	○
ジュース	3本	ジャージ	○
ビーナツ	1袋	毛パッチ	○
アヲ	相当量	ズボン	○
チヨコレート	10枚	オーベシユーズ	○
肉カンズメ	1罐	靴下(4)	
ヒットB	■	手袋4(内毛皮1)	
紅茶	一升五合	ヤツケ	○
コーヒ	五合	セーター	
竹中		毛尻当	
シャツ	△	アイゼン	○
毛シャツ	△	ピッケル	○
毛チヨツキ	△	輪カン	
ジャージ	△	本(劔岳)	
パッチ(2)	△	山日記	
ズボン(2)	△	磁石	
靴下(4)	△	ストック	
手袋(5)内毛皮1			
ヤツケ			
セーター			
毛皮尻当			
山日記			
アイゼン			
オーベシユーズ			
ピッケル			
輪カン			
リック			
ストック			

福 永
 シ ヤ ツ
 毛 シ ヤ ッ
 ジ ヤ ー ジ
 ズ ボ ン (1)
 パ ッ チ (2)
 靴 下 (4)
 手 袋 (3)

ヤ ツ ケ
 セ ー タ
 ア イ ゼ ン
 ピ ッ ケ ル
 輪 カ ン
 リ ッ ク
 ス ト ッ ク

○

〔 3 2 年 度 夏 山 穂 高 湊 沢 合 宿 〕

楠 木 正 博

何回もめぐつて来る部員不足もことにひどくなり、高三の若干名の他高一3名中三3名計6名の現役部員と云う有様。しかし中三部員が体力的にも有望な為に特にその育成を目的とすることになった。今年の中三部員には一度も夏山の経験のない者ばかりで大学の数名の人達と奥田先輩につきそってもらい行うという心細いものであつた。

日程は大学の日程が終つてからこちらに廻つて来てもらう為に八月四日という日取りとしては遅すぎるくらいのある合宿でしたが、結果的には、雨に三日間内沈滞一日と天候には比較的恵まれた。

メンバー

石 渡 ・ 高 田 両 先 生 奥 田 先 輩
 大 学 部 員 : 田 辺 竹 中 美 田 鳥 居
 高 一 : 楠 木 (記 録 係)
 中 三 : 安 井 (装 備 係)
 竹 原 ・ 堀 田 (食 糧 係)
 以 上 計 11 名

8月4日 (曇一時雨)

大阪発 (18・10)

八時半に全員部室に集合、十時四十五分に出発した。名古屋経由で、松本に向う。

8月5日 (雨)

松本(4・50)―島々(6・00)―上高地着(9・00)―発(11・30)―徳沢(15・00)

大学部員との合流の為、木曾福島からの上高地入りを止め、松本経由とした。白樺荘で朝食をとり、パッキングをやり直して出発。荷が重く、雨が降り出したので奥又の押出にテントを張つた今日は少しばてた様であつた。

8月6日 (曇)

起床(4・00) 朝食(6・00)

出発(8・00)—横尾(9・05)—横尾本谷(10・10)—涸沢(1・20)

昨日よりも苦しいボツカであるが、25分に5分の休みのピッチづ進む。涸沢には四十位もテントが張られていた。

8月7日 (晴後雨)

東稜を経て北穂

テント(6・45)—北穂(10・30)—テント(15・05)

昨日の疲れも一夜の熟睡にほうむち去り、元気に出発。東稜のオーの取付き迄はしんどかったが雷鳥等を見ながら後はづつと楽しかった。東稜には少しも危険を感じさせる所もなく、遠近の山々の景を楽しんだ。帰りに禁制の焚木取りを行い、営林署の前を通らない様に、我々が呼んでいる密輸ルートなところを通り苦心して帰る。

8月8日 (雨) 沈澱

雨がこれほど恨めしく思われた時は生まれてこの方あないであろう。今日の沈澱の為に帰る二日で上高地へ下る予定を一日にして合宿を一日延長した。今日は全く退屈。

8月9日 (曇後雨)

テント(7・10)—奥穂沢オールンゼ直下の雲溪(8・20)—テント(14・30)

ガスで視界がきかぬ為適当な雲溪でアイゼンテクニック及びグリセードの練習。今日が後からふりかえると一番危険であつたに違いない。と云うのは、二回もセイビングしていた人と共に、念の為にと張つておいたザイルにつかまつてけがせずすんだり、ピツケルを折つたりしたからだ。しかしまあ全員曲がりなりにも滑つたり、止る様になつたのだからこの夏の合宿の大きな収穫の一つを得たわけだ。テントに帰つてからもこの話が出たのはもちろんのことである。

8月10日 (曇)

テント(6・35)—穂高小屋(8・05)—奥穂高岳(8・55)—ジャンダルム登り口(10・00)—頂上(12・20)—穂高小屋(14・45)—テント(17・00)

今日は雲の多い日であつたが気持の良い日であつた。穂高小屋迄は出発が遅れた為に一時間四十五分歩き通したので小屋でしばらく休憩して、奥穂迄五十分で着いた。楽ではあつたが荷物が軽いと良く歩けるのに感心した。ジャンの登り口で、ロック・クライミングに行く四人(美田さん 鳥居さん 堀田 安井)と田辺さん奥田さんが岩迄で行つたので残りの四人は登り口で待ち、田辺・奥田・さん達が戻ってから頂上に登つた。頂上では、ガスの切れ間にあたりを見ながら昼食をし、帰りも同じくザイテングラードを通つて帰つた。

8月11日 (快晴)

北尾根行き

テント(6・00)—五・六のゴル(7・15)—四峰(8・35)—三・四のゴル(9・40)—三峰(10・35)—二峰(10・37)—前穂頂上(9・50)昼食—奥穂(12・05)

一穂高小屋（12.50）—テント（14.40）

今日北尾根—つり尾根—奥穂—奥穂小屋と大変行程が長いので先生方と竹中さんにテントキーパーを御願した。今日の空は全くの快晴というのにふさわしい青空でキーパーの人達は、残念そだった。さていよいよ北尾根に入ると云う五、六のコーで休憩してから登りはじめたが、浮石が多く落石をさせぬ様にとひやひやしながら登つたので大変神経がつかれた。しかし前穂に登ってしまうと後は楽で、ゆつくりと最後の日を楽しみながらテントに帰った。

8月12日（曇後一時雨）

テント（7.00）—横尾本谷出合（9.20）—明神池（11.15）昼食—上高地（12.45）—バス発車（13.50）—松本着（5.00）解散

◎夏山装備反省

中 三 安 井 正

今年の夏山において装備係をしていた僕が、思つたままを書いて見る。

個 人 装 備

身体の上の方からいくと、帽子：出発前ボツカ用にみなムギワラ帽子をそろえた。日の照つてゐる時は、もちろん雨の中でもひさが大きくなかつかいもんだ、と思つた。だが行動中使う帽子を忘れた人がいたが、ムギワラ帽子では、無理なので、ハンチングなりベレーなり何か持つておくべきだと思つた。

靴：今度の夏山で半数以上がキャラバン・シューズを使用していたが（僕もそう）、やはり値は少しはるが、革靴の方がいい様に思つた。特にグリセードの時なんか、つくづく感じた。

キスリング：楠木さんのキスはちよつと小さいと思つた。あれでは、バックキングもしにくいし背負いにくいだろうと思う。

共 同 装 備

一番大きな忘れものは、ノコギリである。ノコギリについては、涸沢は、木を切つてはいけなゝい様になつていて小屋でマキを買う予定であつて、持つていかなかつたが、涸沢について見ると、そんなことは、お構いなくいくら木を切つても、パレなければ幸ひと云う調子だつたので結局一番大きな失敗？であつた。この他ロウソクを、たつた一週間の合宿に、20本も持つて行つたこと。安物のベツグを買つてテントを張る時に、ボキボキおれて能率が悪かつたこと。ザイルにワセセリンを塗るのを、忘れていたこと。この他、色々な失敗が、あつたがもう約束の枚数に近ずいたからもうやめた。！

◎夏山食糧反省

中 三 堀 田 竹 原

合宿は始めてなので、食料については何もわからなかつたが、どうにか献立を作つて見た。

帰つてから考へてみると、キャベツ等の野菜が以外に早く腐つた事、パンについての献立の事、等等がもう少し研究する余地があつたと思う。キャベツ等腐ると云う事は聞いていたが、そんなに早く腐るとは思はず、前半に廻したが失敗だつた。パンは一個で足りると思つていたが足らず、パンの二日分の予備が役に立つた。献立は、少し多種類の物を入れすぎた。もう少し栄養、量、その他の事も考えられた献立を作るべきだと考えた。



稜線でふと私は立止まり
昔の山行の句を

h.k.

ケルンの石の一つ、一つに
懐かしくかぐのであつた。

—— ジャベルより ——

目 次

「山岳寮炉辺譚」	香 月 慶 太	1 8
「雑 感」	西 村 格 也	1 9
「近 況」	福 田 泰 次	2 1
「田口一郎さんの墓」	開 暢 四	2 3
「僕 と 山」	雨 宮 宏 光	2 5
「捜索本部の出来事」	鈴 木 頼 正	2 8
「夏山の下らん想ひ出」	越 田 和 男	3 0
「世界一あほらしいトラブル」	藤 安 賢 一	3 1
「山は私の一部であり 私は山の一部である」	中 馬 宗 武	3 2
「テントキーパ」	牧 野 宏	3 4
「ゲートロックに登る日」	竹 原 洋 爾	3 4
「北尾根登攀」		3 5
「ジャングルム」	堀 田 美 昭	3 5
「紅 葉」	阿 河 徹 三	3 6

山 岳 炉 辺 譚

香 月 慶 太

今宵も山小舎の窓から夕映えの影が消えるとランプの灯がひとしお明るく炉辺の人達を照し出す。壁や室隅に置かれた登山装備が年々新しくなるに連れ、山岳寮の炉を囲む仲間の顔ぶれも新人を加えて行くが、小舎の主は昔ながらの胴衣をつけて霜の増えた髪をかきあげながら、ほた火を守るのに余念がない。自在に吊るされた茶釜の黒艶が三十年のこの舎の歴史を秘めていて、集る人にはほのかな郷愁に似た想いを起させてゐる。

× × × × ×

「想えば本当に惜しい仲間を亡くしたものだ。」と主はさも感概に耐え兼ねたように話した。伊藤匠が去年の十一月、一年余りの闘病にも拘らず、とうとう逝くなくなったんだ。俺には勿論、山岳寮の仲間にとつてもかけがえのない存在だった彼。思い出は余りにも多過ぎて何から話していいのかわかる程なんだが、若い人達には願を知つてゐる人が無いたらうから、断片的にでも彼の在りし日のことを話してその俤を偲んで貰はう。

匠が居なかつたら、甲南山岳部はあれ程急速に発展しなかつたらうと云つて過言ではない。同志社中学から高等科に入学して間もなく何の経験も持たずに山岳部へ飛び込んで来た彼だったが、芦屋川のキャンプやロックガーデンの岩登りに俄然興味を覚えたのか、その後は物凄い迄に山に凝り出して、まるで山霊に魅入られたかの様に山と取組みを始めた。大正十五年夏のアルプス行きが願の魂を奪つたのか、次の年は当時としては珍しい穂高の単独行を試み、その経験から Ohne Fuhrer を主張して Alleingehen を讃美した。Alleingehen そのものはその頃の有名な Alleingehnger だった神戸の加藤氏が遭難死したために考えを変えた様だが Ohne Fuhrer の主張は近代登山形式の急潮に甲南山岳部を滑り込ませる大きな原動力になったことを忘れてはならないと思う。1927年の山岳部報告創刊号に掲げたアルピニズムは山岳部の黎明期に願があげた斗の声だと言えよう。

エクスペディションに対する匠の執着も大したものだった。京大に進んだ彼はヒマラヤに憑

かれたかのように見えた。昭和六年にはパウ・バウアーの「ヒマラヤに挑戦して」を翻訳出版してその志の一端を世に見せ、十一年には単独渡印してヒマラヤの麓を歩いてゐる。戦争が勃発して正面から行けなくなつたと思つたら、「俺は裏から入るんだ」と真面目に語つて中国へ渡つて行つた。チベット側から取付くつもりだつたのだらう、その執念には全く驚ろかされたものだ。戦局は彼の壮志を拒んでしまつたが、遂に終戦まで北支に頑張つてヒマラヤを睨んでゐたの心意気には頭が下がる思いがする。昨年京大を中心としたマナスル隊が成功した時は病床でどんな気持でそのニュースを聞いただろうか、心境を想像して何か眼頭が熱くなる感じがするんだ。

ポーラー・メソツドと言へば今では常識になつてゐるが、これを日本の山岳界に普及させたのも愿に負うところ勘くない。富士山の積雪期登攀にこれを試みて岳界に提唱し、大きな反響を呼んだのが記録に残っている。彼の研究が、甲南、京大の山岳部の向上に資した功績は勿論のこと、広く日本の山岳界の発展に裨益するところ真に大きなものがあつたのは、愿の偉大さを物語るものだ。その仲間を持つたことに誇りを感じてゐた丈けに、その逝去は何としても残念でならない。然し愿の山岳部に対する愛情は永劫のものだ。部内雑誌にも、時報にも呼べば必ず応えて原稿を送つてくれた愿、恐らく愿としては山登りに自分を始めて導いてくれた甲南山岳部に対する愛着が一番大きかつたに違いない。魂は永遠の褥を求めて氷雪の彼方へ消え去つても、書き遺した数多くの記録や論叢の中に愿の情熱は何時までも燃え続けて後輩の指標ともなり熱源ともなつてゐよう。みんなも目先の足場に取付く前に、翻つてこの偉大な先輩の築いた基磐を遺された書物の中に見直して登高精進を新にしてほしいものだ。

最後に愿の作詞した山岳部歌を歌つて彼の瞑福を祈ろうじやないか。この歌の中に愿の山に対する厳肅な気持が、そのまま祈り込まれてゐるのを噛みしめながら、サア

×

×

×

×

静かに話に聞き入つてゐた一同は、主の声に和して敬虔な面持ちで歌い出す。

黎明の御空に 聳ゆる峰は

瓔珞纏う 久遠の姿……………

漸くそとは夜の帷りが下りて満天星が美しく輝き出して居る。その中に一きわ明るくまたゝいてゐる星、恰も愿の愛情の瞳の様に輝いてゐる星が、この歌声に応えてゐるのか、澄み切つた光を慈しみを以つてこの山小舎へ投げかけてゐる。

(1957年11月)

雑

感

西村格也

最近山登りやスキーが大変盛りになつて来ました。特に若い人達の間で著しいようです。僕の勤務している会社でも山岳部やスキー部があり、よく出掛けます。今年のお正月の休には細野に合宿し、三十人程の人が参加し、その半数は若い女性でした。今度のお正月は蔵玉に行くと言つてゐます。僕も萬難を排して同行したいと思つてゐます。このような風潮は各所に見られ、一種

のブームを為していますが、洵に結構なことと思います。近代生活が複雑化し煩瑣になつて来るにつれて、清純な山への憧れは益々強くなりましょう。そして山を解し山を愛する人が多くなつて来ることは結構なことです。特に若い人の間にそれが強いことは一層嬉しいことです。山登りは楽しいものです。去る五月東京永楽ビルで甲南同窓会があつた時、伊藤理事長が三十年程も前に六甲山頂で、山岳部の部員卒業生並先生方を含めた大キャンプをやり、翌日有馬に大挙して抜けた時の愉快的思出を話されましたが、僕もその際一緒にお伴致して居り、その時の楽しかつた数々がまざまざと思い出されました。山登りは実際楽しいものです。汗を流しブーフーフ息を切らしていること自体が楽しい思出の一駒となります。この楽しい山登りのブームですから結構な次才です。

処がそのブームに伴つて色々と山での事故が多くなつて来ているようです。之はよくよく戒心すべきことです。この春或る会社の山岳部の人達がゴールデン・ウィークを利用して、立山に登りました。立山の春は御承知のようにすばらしいものです。それにケーブルカーも出来あの憂鬱な登りがなくなつて、随分と有り難いわけです。処がバスの都合が悪かつた為に予定が狂つてしまつて、一行がフラフラになつて地獄谷にたどりついたのは、晩の八時を遙に過ぎていたと言います。こんなことはあり勝のことですが、事故の原因となりかねません。山登りは注意の上にも注意が肝腎です。いくら注意してもし過ぎるということはありません。

何事に依らずそうでしょうが、裏まで考えて行動することが必要です。あと三十分もあれば豫定の頂上に立つことが出来る。パーティーの全員がそれを欲している。三十分の遅れは何でもない誰もがそう判断している。そんな時に、その裏を考えて、登るのは止めよう、三十分の遅れは危険を孕む、何でもないとは断言出来ない、と反対を考えることが必要ではないでしょうか。が進め進めと言つて居る。そんな時にはやはり退くことを考える必要があります。万人が皆そうだと考える時こそその反対を考えることが必要なのです。貴兄等はやがて社会の各方面に於て、夫々のグループの中心となつて活動される方々です。その方々は常に一般の人の考える裏の裏を考える必要があります。と言つて裏ばかり見、之を主張するのは勿論いけません。人が優ばかりゴロリと揃えるのがいいと言うのではないにしても、そして又成績は悪いより良い方がいいでしょうが、優の数が多いから優れた学生だと言うことでもないでしょう。人間の価値は優の数で決まるものではありません。大学は四年で卒業出来るのですが、八年迄いてもいいのです。四年で卒業した人よりも五年六年かかつて卒業した人—それを落才生と言うようですが、その落才生の方が優れていることがよくあるようです。それから学校時代には基礎を充分にやつて置くことです。基礎がしつかりして居れば応用は何時如何様にでも出来るものです。即将来の発展に備えてその土台をしつかりと築くのです。土台がグラグラでは立派な建築はできません。基礎を飽く迄も強固に作つておくことが肝要です。僕は仕事の関係で会社の入社試験によく出ますが、同一校からの受験者で、学校の成績の上の人が落ちて下の人が合格すると言ふことがままあります。之は入社試験ですからどちらが会社右と言へば必ず左、前と言へば必ず後と言ふ主張の人を見受けます。然してこれはアマノジャクです。裏も見裏も考えて、然る処に表は表、裏は裏と主張するのです。物の半面のみをみてはいけないということです。泥棒にも三分の理と言いますから一面的に物を見、行動してはいけません。

処で学生の登山と言うものには自ら行動の枠と言つたものがあるのではないのでしょうか。之は学生に限らず、会社員員の登山には会社員としての、銀行員の登山には銀行員としての夫々の制約があるのではないのでしょうか。山に登つてさえ居ればよいと言ふ学生も居るかも知れませんが、

登山学校の学生ではないのですし、尤もそれにしても学生としての制約があると思います。大学生には大学生としての、高校生には高校生としての、生活があるわけです。登山が絵ではないでしょう。山の知識は広くその技術は優れていても、学問は全々いけないと言うのでは載けませんと言つて為になる会社の求める人物であるかと言う観点から採否が決まるわけですが、人間として優れているのはどちらかと言う場合がよくあります。それにしても人が人を評価すると言うことは何と難しいことでしょうか。殆どそれは不可能に近いことでしょう。然し敢てそれを為さねばならぬのです。恐ろしい次才です。そんな時僕はいつも、あの厳冬の山頂に輝く澄みきつた寒月を思い出します。あの一点の穢もない澄みきつた月、あの清浄そのものの心で人に対さんと努力しています。

若い人はどんどん伸びて行きます。伸びる言うことが青年の特色でしょうか。青年がもし伸びなかつたら如何でしょう。全く畸型児で御話になりません。それで青年は伸びる為に自由で発刺としています。少々欠点があつてもまず所があつても先づ長所を伸ばさねばなりません。欠点はあとで社会に出てからいやと言う程たたかれ、自ら直されもします。伸びんとする際には、欠点をいためることに苦心するのは当を得ていません。それよりも自由に発刺として己の長所を伸ばすのです。人を植木にたとえることは甚だ失礼ですが、植木は先づ伸ばして然る後に刈り込みます。伸ばさぬ先に刈り込んで植木は枯れてしまいます。先づ伸ばすことが先決です。学生時代はこの伸ばす努力をするのが第一です。欠点をため、刈り込みをするのはその後です。思う存分伸びて下さい。自分の特色を個性をいかして下さい。天の配材はよくしたもので、どんな人にも夫々の特色があり、何等かの欠点もあるかわり、何等かの長所も必ずあります。各々その長所を存分に伸ばして下さい。

近 況

福 田 泰 次

不意と云う年を目前に控え、山への情熱熱し難く本年は大分山に惹かれると云ふ始末になりました。

昨年秋の西穂高行きにて山岳病は再発、本年五月には現役と共に遭難捜索隊として剣西面へ、八月には涸沢、奥穂、前穂、九月には白山、十一月には涸沢、ジャン、北尾根、そして最後の前穂北尾根登攀にしてはいささかドラマティックな結果とは相成りました。即ち新雪の穂高を8mmカラーにと柄にもなく芸術的意欲とか云う奴に駆立てられ、会社の若い連中と涸沢入り、オ一日は奥穂、ジャンと一応目標を達し、オ二日目即ち1957年11月2日猛然と新雪の北尾根にアタック三、四、のコルよりチムニーまでは事なく過ぎたがチムニー直上にて凹角フェースに取付いてしまい雪とも氷とも岩ともつかぬ変てこな壁の状況になやまされ、オーバーハング気味のトラバースで遂に奥又側にスリップ、小川君に借用のザイルの御蔭でセコンドのビレーにて、確実にストップ、一時失神、正気着いた時には、サブザックごとカメラは奥又の谷へハイサヨウナラ、時計ピツケルは岩角に引つかゝりどうやら我が手へ、時、正に午後一時三十分、それからが正に午後一時三十分、それからが正にナンガパルバットに於けるメルクルの退却ではないがピツ

ケルを杖にザイルにすがり、三、四、のゴルへの四苦八苦の下降、涸沢小屋に無事生還したのは午後十時三十分、翌三日、何れにしても上高地へと痛む体に鞭打つて横尾の谷へ、夕刻横尾岩小屋通過に際し誠に以て偶然の劇的邂逅と云おうか、雨宮、伊丹、鳥井、の現役三君、正にラディユウスにて夕食の準備中「先輩どうしました」と驚き飛び出して来てくれたのも道理、小生の顔面は繃帯に包まれ、両手のピッケルを頼りにトボトボと歩む姿「痛ましや」の一語に尽きた事であろう。抱く様に岩小屋に入れられ先ずは元気を付けてと、リンゴ、サラダ、スープ等、まさかそんなには食ふまいと思ひし負傷者がパクリ、パクリ、（あれでは滅多に死によるまいと恐らくは、現役仲間て後で悪口をたゝがれた事であろう）。ともかくそれからは云うに云われぬ後輩の親切身にしてみても、涙あふるるばかり、予定の山行も取りやめ小生の為に上高地へ引き上げと一決夜道を徳沢へ徳沢へと雨宮、伊丹、鳥井、の三君に手を引かれる様にし、又は肩に負はれて。苦しみをこらへ私を負ってくれる若い後輩の熱い体温を負傷に痛む胸に、冷へ行く体感じた時何云うとなく目頭の熱くなるのを覚えた。徳沢にてリヤカーを借用し、前引の現役2名後押しの会社後輩2名、「いざり勝五郎」よろしく夜道を一路、上高地へ、上高地へ。車が揺れる度に負傷した胸に足に顎に痛みがこたえる。ぐつと歯を食いしばり空をながむれば、白樺の林を越して凄絶な星の光を望む。「あゝ星の光のもるる岩屋」若かりし頃の山への情熱が走馬燈の様に甦る午後八時三十分、上高地着、丸西のおかみさん（例のイワナのメサチエン）に「福田さんどうしたと一方ならぬ御世話になる。思ひ起せば小生丸西にゴロゴロしていたのは十六、七才の少年時代彼女も恐らくは同年輩位ではなかつたろうか、今は堂々たる白樺荘のおかみ、熱い葛湯に元氣を取り戻し、自動車の人となる。信大医学部午後十時三十分着。早急応急手当、顎は二針縫いクロマイ注入、胸は肋骨二本骨折（後レントゲン検査にて骨折なしと判明）にてバンソコ固定、左足膝は内出血にて、プンクティオンの要あれど、とりあえず湿布、許可を得午前十二時四十分の夜行にて京都へ翌四日、三菱病院へ入院、経過意外に良好で一週間にて退院と云う次第。いや全く年は争へぬもの、病院に来てくれた中村忠、奥田、両君曰ク「先輩ですぜ」正しく云われる通りで其後食ふ人、恐らくは百人は下らぬ人々に「年ですぜ」「年ですぜ」と云われつけ相当意志強固に持つていてもついつい、その気になつてしまふ、然し回復が早かつただけ未だ若いんだと負け惜しみを云っている次第。

以上の様な訳で後輩に文句を云わねばならぬ立場のものがアクシデントを起してしまい最近はいさい体を尚小さくしています。小窓尾根遭難の批判も小生執筆の予定の所を特に頼んで小川君に御願いした始末全く申し訳なく思つて居ります。

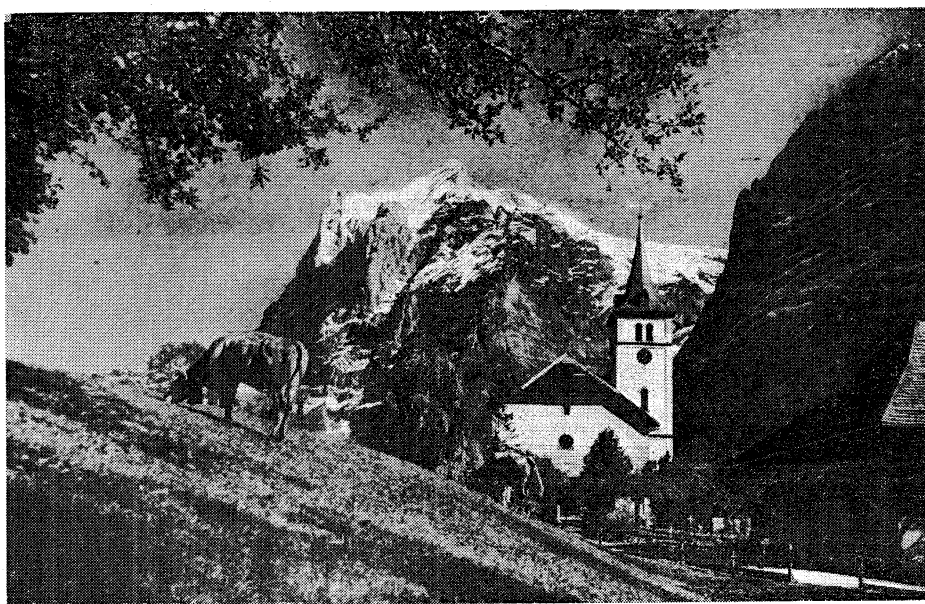
今度は本当に現役の方々に一方ならぬ御世話になり心から感謝しています。又、鈴木、田辺、両君には遠路京都までわざわざ見舞に来て頂き、恐縮の至りでした。

さてアクシデント後つくづく感じて居るのですが、今度現役の方々の温い気持に接しほんとに心温まる思ひにて、甲南山岳部健在の感を深くしました。山はただ登ると云ふ行為のみでなく、その事により人間性を再認識し、そして又それを高めるものと信じている私として、今度山仲間の友情を改めて身近に感じ、アクシデントによる苦しみより以上に人間としての喜びを味わつた次第です。

甲南山岳部も小窓尾根遭難以来、所謂、低い姿勢である現状ではありますがこの様な人々の集りである限り必ず再建出来得るものと深く信じて居ります。

小生未だ完全に健康を取りもどして居らぬ現状にて、これにて失礼させていただきます。

一九五七年十一月十七日



田口一郎さんのお墓

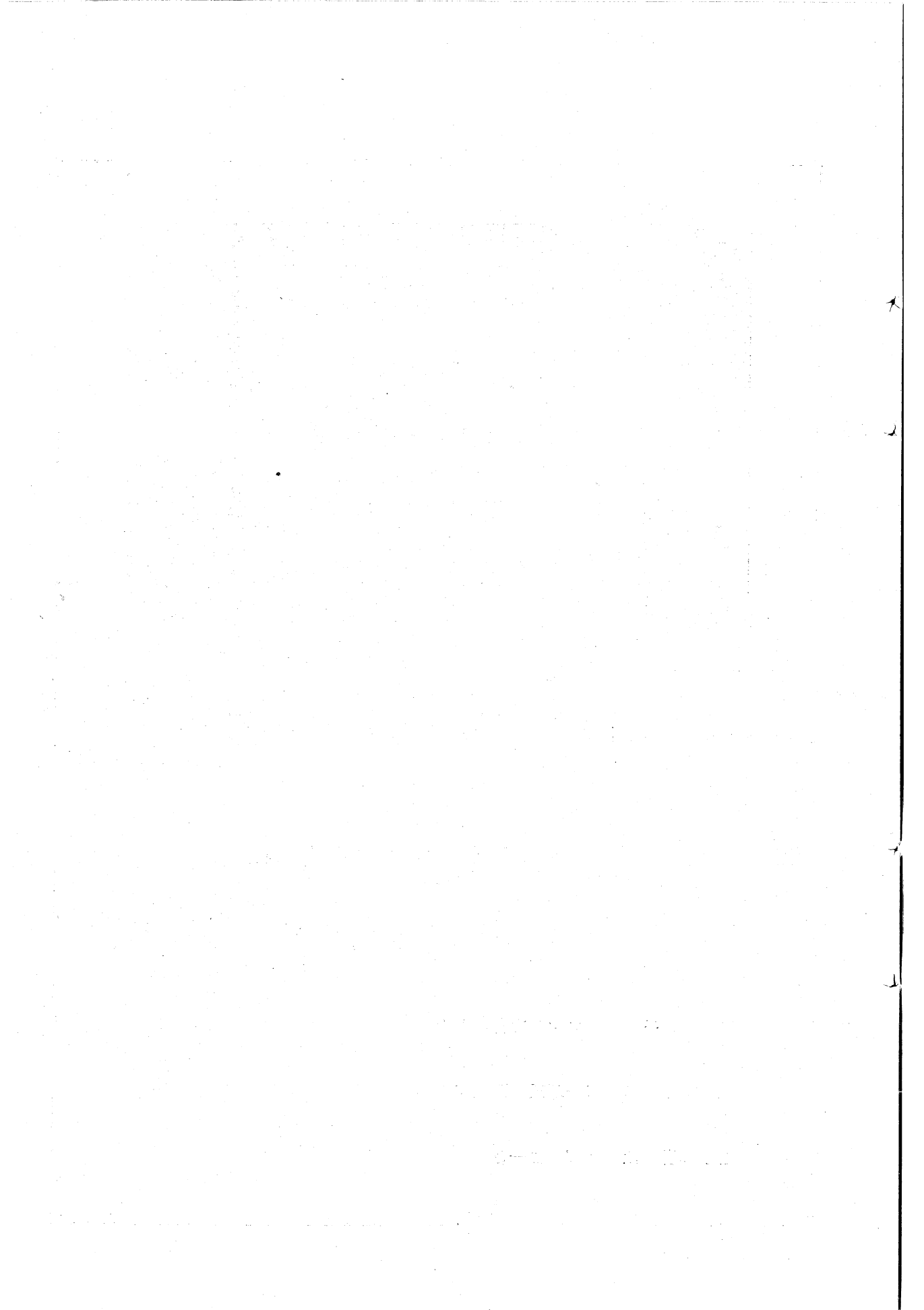
— 短いスイスの旅から —

開 場 四

写真のウェッターホルンを背にした

教会の墓地に田口一郎氏は眠つてゐる。

右手の岩壁はアイガーの一部



田 口 一 郎 さ ん の お 墓

— 短 かい ス イ ス の 旅 か ら —

関 暢 四

今年の夏、一年余りのアメリカ生活の帰途、ヨーロッパに立寄つたので、学生時代憧れの土地としていたスイスを旅する機会を得た。

パリからウィーンへ行く仕事の合間を見てスイスにとどまつたのは僅かに丸五日間だったが、幸い八月十、十一日の週末をはさんでいたのでユングフラウに登る事が出来た。

十日の朝チューリッヒを汽車で発ち、ルツェルンで途中下車して作曲家ワグナーの家を訪ねる等したので、ユングフラウ登山への基地インターレーケンに着いたのは午后の三時頃だった。旅行者で賑ふこの土地は、謂はば軽井沢化しているので、私は更に登って海拔1270米のウエンゲンに泊ることにした。登山電車でウエンゲンのホテルに着いたのは夕刻五時頃だったが、快晴に恵まれたその日のユングフラウの容姿は、凡そその名の示す意味とは異り、氷河の荒肌と岩壁の骨組は豪快な迫力に満ち、鮮明雄大な風響を展開していた。

ホテルで一風呂浴びてから散歩に出たところ、駅前の新聞売場に入だかりがして喋り合っている。何気なしに新聞を買つてみて驚いた。甚だ迂闊な話なのだが既に十日余りも前から（忙がしい旅で新聞も細かく読んでいなかったのだが）アイガー北壁に挑んだ独伊合同登山隊4人の遭難が確実となり、明十一日は、その中、生存確実な一名の救出の為最急的な作業が行なわれることになっているのである。言うまでもなくアイガーはユングフラウの隣山で翌日私の乗る登山電車はアイガーの中腹をくり抜いたトンネルを経てユングフラウに向ふ訳である。その北壁はアルプスきつての困難な岩場で既に十数回に亘つて犠牲者を出している。ざわめつた人々に交つてこの新聞記事を読んでいる中に私はアルプスで遭難された田口一郎さんのお墓がこの近くにあることを想い出してはつとしたのである。田口一郎さんは確か私の七年先輩、従つて甲南生活でお附合はない。けれども山岳部の会合や実弟六郎君が私の級友であつた関係上二三度お話をした事がある。いやそんな交際の深さよりも私達の山の先輩がこの異境に若い生涯をとじられ、永遠の眠りについて居られる場所の近くにやつて来たと云う事実そのものが私に衝撃を与へ、ぜひその土地を訪ねてみたいと云う強い願望をわき起させたのである。

翌日天気は少し下り坂となり、曇り気味だったが展望に差支える程ではない。早朝より出発、詩人バイロンを賛歎させたウエゲンアルプからの眺めや、アイガー山腹のトンネルの途中にあるアイガーヴァンド、或はアイスメールからの氷河の風景を楽しみつつユングフラウヨツホに着いたのは午前十一時頃だった。約三千五百メートルの高地より望む雪と氷河の景色は日本の春山を偲ばせる程の積雪風景で素晴らしいが、私の心は山麓のグリンデルワルトにある筈の田口さんのお墓へと逸るのだった。ヨツホで昼食を済ませてグリンデルワルトに下車したのが午後三時、その日の中にチューリッヒに戻らねばならないので時間の余裕は一時間しかない。墓所の番地もわからないが、駅員から聞いた村の教会墓地へと急いだ。駅から約十五分左にウエッターホルン、右にアイガーの岩壁に抱かれた様にして清楚な教会が建っている。入口の横手の事務室に人がないので、建物をぐるりと一廻りすると、ベンチに買物籠を下げた村のおかみさんと黒衣の老婦人が日向ボツコをしていた。七十を過ぎたと思われる老尼僧は如何にも気取りのない俗氣を捨てた静かな婦人である。日本人の田口さんのお墓がこの境内にあるかと云ふ私の質問に対し、無言の

まい立上つて私を導き、多くの墓石の中の一つの黒い石を指さした。ICHIRO TAGUTI AUSTOKYOと刻まれた墓石、私は黙つて尼僧にお礼をして、ひざまづきお祈りを捧げた。元来無宗教の私にも、此の比類のない風光明媚な異国の土地に鎮まる山の先人の魂の鼓動が伝はる様である。山を愛する人としてこれほど所を得た墓地はあるまいと思われる反面、一体何人の祖国の人々が此処を訪れたであらうかと思ふと深い感動が私の心をしめるのであつた。気がついてみると老尼僧は私の背後に立っていた。許しを得て墓石をカメラに収めてお礼を述べて立去る私に、尼僧は一言も発せず柔和なまなざしで答礼した。心残りを感じつつ振り返る私の眼に映る教会の尖塔とウェッターホルンの清らかな美しさは心にしみつくようである。私はアイガー遭難者救助作業に肩唾をのむ人々の間をただ黙々と駅へと急いだ。

まことに、私の歐洲の旅で最も忘れ難い一日であつた。

涸 沢 合 宿 に 参 加 し て

奥 田 宗 三

今夏久しぶりに現役の人々と共に10日間程の涸沢生活を楽しみました。中学、高校の参加人員は4名で、それに大学の応援4名、先生2名に私という、中高の合宿というには、いささか奇妙なメンバーでしたが、中高の人々に夏山を案内するという意味では一応成果があがつたものと思います。当初のプランは北穂南陵、奥穂、ジャンダルムまで縦走程度にしておこうという諸先輩の御意見でしたが、行つて見ると、折角来たのだからというので、ジャンダルム飛騨尾根、北尾根まで足をのばしてしまいました。この程度なれば、帰つてから批判会でつるし上げを喰う心配もないだろうという心積りでした。

この合宿で嬉しく思つたのは、上級生がよく下の者をいたわるという、甲南のよき伝統が受け継がれているのを窺つたことです。大学の人達がよく荷物を持つてくれたし、キャンプ生活でも率先して仕事をしてくれました。聞くところによれば、大学の合宿でもそうらしく、他所の大学のやうに新人に荷物をうんと持たし、上級生はムチをもつて後からついて行くといったやうなことは想像にも及ばないらしいです。

ただ注意したいと思うのは、個人装備が多過ぎると思われることや、共同装備にも要らぬものが大分多かつたやうに思われることです。これは経験のない中高の人ばかりでプランをたてたので無理もないかも知れませんが、今後は気をつけて下さい。火起し用のウチワが二十本近くあつたのには全く驚きました。食料の方は私等が山行きをした時などに比べれば質的にはものすごくよくなつて居り、栄養の点は満点で、かつてのやうに、脂肪に欠乏して、ブーツオイルまで食おうという気持は全然起りません。欲を言えば、もう少し内容をバリエーションに富まして欲しいと思いますし、重量のことも考えるべきだと思います。これなどは大学の部報等で研究すればよいと思います。

現役の人と一しよに行つて一番感ずるのは、自分が年をとつたということです。歩いたり、荷をかつぐ方は末だましなのですが、それよりも大変こわがりになつたということです。岩にしがみついてもたもたしている時に田辺君に「子供の顔がちらつきませんか」なんて、ひやかされた

程でさつぱりでした。尋常科2年の時、先輩に連れられて始めて北尾根を登つて以来、夏季にこの尾根でこわかつたという記憶は全然なかつたのですが、今度行つて見て、悪場が非常に多いと思われるのには驚きました。風化のために岩場が崩れたのかとも思われる程です。しかし考えて見るとこちらの体の方が風化しかゝつて居るのぢやないかと思われまゝ。

今後の山岳部の課題として心配なのはやはり、中高の部員が少ないということです。高校三年を除いて、5、6人というのは、なんとしても淋しいと思うのです。それに高二と中学二年以下が全然居らずブランクになるのは、今後の部の活動が中断することがあるので心配です。現役の人は凡ゆる機会をとらえて部員を獲得するやう努力して欲しいと思います。

僕 と 山

雨 宮 宏 光

自分ガ山ヘイキダシタノハイツゴロダツタロウ。小学時代裏山デターザンゴツコニ興ジ、チャチナ細明[デコンテイニニアスノ真似事ヲシテイタノハツイコノ間ノヨウナ気ガスル。始メテ山ヲシイ山エ登ツタノハ中二ノ夏ノ富士山デアツタ。小生イキリニイキツテ八合目ノ小舎到着ハ一番デアツタト記憶スルガ、明クル日ハ完全ニグロツキトナリ頂上エモイカズ小舎デゲエゲエヤカス始メデアツタ。コノ事ハ当節流行ソノ何トカ complexヲ僕ニ抱カセ、ヒ弱ナ僕ハ登山ハシテスル柄ジャナイト考エテシマツタ。ソレデモ山ノ美シサダケハ忘レラレズ、日曜毎ニ六甲山ハ歩イテイタ。高一ノ時会社ニイタ明大O.BノW氏ニ連レラレテ上高地カラ西穂、奥穂、槍、鳥帽子ト歩イタ。岩登リノ「イ」ノ字モ知ラス自分ハ西穂カラ槍迄ノ稜線ノ悪サニハ實際怖クテ怖クテ足ガ前エ出ヌ位デアツタ。ソレニ較ベテ他ノ人達ガ鼻唄デ稜線ヲ歩イティルヲ見テ、又モアノ劣等意識ガソノ度合ヲ強クシテシマツタ。ソレデ自分ハ山ナンカイカズニ、下界デ甲南ノボンヂラシク映画ヲ見タリオ茶飲ンデデクラスベキダト思ツタ。ソレデモ家ニ帰ツテクルト又山ガ無性ニ恋シクナツタ。ソナナ時ハイツデモ六甲ヲ歩イテ気ヲマギラシタ。ソノ頃ノ僕ハスポーツアルピニズムノ何タルカニツイテ考エル事ナンテサラニナカッタシ、人ハ何故山ニイクカトイウヨウナ深刻メイタ話ニモ一向無関心デアリ、タダ誇ワレタカラ行クトイウ極メテ淡々タルモノデアリスデニシテ彼ノ「ヒラリー」氏ト一脈相通ジルモノガアツタ。平蔵ノコルデ、一服ツケナガラ休ンデタ時(オット失言!!シカシモウ時効ダカラ、「サツサ」モ努鳴ランダロウ)岩登リヲシテイルPARTYヲ見ツケタ。平地ヲ歩クノデモ疲レルノニ縦ニ歩クトイウノハ一層シンドイ事ダロウト思ツタ。シカシ岩登リ出来ル人エノ憧レハソノ時ニ始マツタ。ソノ夏グリセードヲ教エテモライマスマス嬉シクナツタ。スキーヲ初メテシタノハ高一ノ冬デアツタガ、生来ノ鈍サノ由カナ日程ヤツテ結局十米ノ直湯降ガ精一杯トイウ有様、コノ方ハ一辺ニ嫌氣ガサシテシマツタ。高三ノ時ノ夏山デハモウ一人前ノ登山家面ヲシテ、一緒ニイッタ人ノ荷物ヲモツテヤツタリ、槍沢デグリセードヲオ目ニカケテ悦ニイツテイタリシタ。ソノ夏読ンダ加藤文太郎氏ノ「単独行」ナル本ニハイタク感激シ、夏休ミノ終リオコガマシクモ金峯山エノ単独行ヲ思イタツタ。所ガ清原先生ノ補習ニ出テコイノ一喝デソレハ取止メトナツタ。今ニシテ考エレバアノ頃ノ自分ハトモ単独行ヲヤラカス程ノ能力ガアツタ分デモナク、一時ノ感激ガコウジテ、無茶ヲ思イタツタノデ

アツタ。清原先生ニハ感謝スル。ソレデモオカシナモノデ秋法事デ田舎エイツタ時、案内ヲツケテ金峯山ニ登ル事ガデキタ。欲シカツタ山靴ハ梶本徳次郎氏カラ、中古ヲ譲リウケタモノデアツタガ、氏が岳界有数ノクライマーデアル事ヲ聞イテイタ自分ハ、マルデ天皇ヨリ授カツタ記念ノ品カ何カノヨウニ考エテイタ。モットモソレマデアルプスノ名ダタル岩壁ニフレテイタ靴モ、甲南ノ下ラナイボンチノベタ足ニハキマワサレル羽目ニナツテ、靴ノ裏ノ物々シイ鉄モナイト事デアロウ。高校時代山岳部ニ入ツテイナカツタ僕ガ割合ト山ニイケタノハW氏ノオ蔭デアリ、山ノ何タルカラ教エテクレタノモW氏デアツタ。ソノ頃ノ僕ハ山ハ現実トハ離レタ遠イ存在デアルト思ツテイタシ、山コソ我が逃避ノ場ナドト夢ノ様な事ヲ考エテイタ。思エバコレモ恋ヲ知ル年頃ノナセルワザデアツタ。(誰ダモット早熟ダツタナドトイウノハ)。大学ニ入ツテスグ山岳部ニ入ラウト思ハヌデモナカツタガ、W氏ニ新人ノ頃手荒ヲシゴカレタ話ヲキイテイタノデ、怖気ヅイテ入部ヲ見合シタ。ツマリ中学時代ノアノ劣等感ガ、僕ハトテモソナシゴキニハ耐エラレナイト考エサセテシマツタノデアル。ソレデモ部屋ニハ日参ソレトナク部ノ雰囲気ヲ偵察シテイタ。秋北岳ニイツタ時、一緒ニイツテイタ北沢藤太郎ナルガイドニ山ノ話ヲイロイロキカサレ、興奮シタ自分ハ帰ツタラ早速入部ダト思ツタ。所ガ部ハ冬乗鞍デスキー合宿トノ事デアリ、自分ハ冬W氏達ト根子岳、四阿山ニ登ル約束ヲシテシマイ(ドチラモ同ジスキーナラモウ一入部ヲ遅ラソウト考エタ)又々入部セズジマイニナツタ。ソノ冬初メテハツ爪ノアイゼンヲハメタ。モットモ高々2400位ノ低イ山デアツタタメ頂上迄スキーデ登リ、上デ雪ノ堅ツタ所ヲ探シテソコデアイゼンヲハクトイウオカシナモノデアツタ。雪山デハコノ爪ノオ化ガ絶対必要ダト聞カサレタ自分ハ帰ツテ好日山荘ニ買イニイツタ所4000円トキイテ腰ヲ抜カシタ。アノ鉄ノ爪ノドコニ4000円価値ガアルノカ、リカードノ労働価値説ヲモツテスルハ勿論、カノケインズ先生ノ限界効用説ヲモツテスルモ、全ク不可解デアツタ。勿論アイゼンハ買ワズ、ソノ代リ1600円ノ四ツ爪ヲ買ツテオ茶ヲニゴシタガソレモ帰りノ電車ノ中デ忘レテシマツタ。春部デ白馬エイクトキイテ自分モモウレツニイキタクナツタ。個人装備ハ一応ソロツテイルシ頼ンダラ連レテイツテ貰エルカモシレスト思ツタ。所ガ相変ラズシゴキガ恐クテ入部スル気ニナレナカツタ。全ク情ケナイ奴ダツタ。ダガ山ニイタニハ一番イトキカサレタ部員ハイキタシ、入部ハ嫌ダシノ板バサミデ弱リ、遂ニ春山出発ノ五日程前ダツタカ、リーダーノ砂川サンニ入部ハシナイガ、春山エヘ一緒ニ連レテイツテ下サイト頼ンダ。コンナ馬鹿気タ事ハ勿論許サレズ、一緒ニクルノハ歓迎スルガ部外者ノ参加ハ不都合ガ生ジル由、クルナラ入部シテクレトイワレタソレデ自分ハ目前ノ春山イキタサニ何モカモ忘レテ入部シテシマツタ。勿論入部シタ事ニ今デハ何ノ後悔モナイ。ソノ春山デハ寒ニ大事ニ扱ツテモラツタ。荷物モ軽カツタシ、上級生ノ下級生エノサービスハ満点デアリ、自分ノ考エテイタシゴキナドハ爪ノ垢程ニモ感ジラレズ、コレナラツイテイケルト思ツタ。ココニ至ツテヤツト劣等感ヨリ解放サレタノデアル。一緒ダツタ島津サントハ一辺ニ意気投合シテシマツタ。全ク無茶苦茶ナ話デアルガ、島津サンガキスノ奥深く焼酎ヲ一升シノバセテイタヲ幸イ、小日向ノ雪洞デ寒サニ耐エカネタ一夜、二人デチビチビヤツテル内ニ調子良クナリホトンド飲ンデシマツタ。リーダーニバレー一発ナグラレテモ自分ノ不徳ノ至ス所トショウチユシナケレバナラス所デアツタ。全ク申訳ナイ。飲ンダ翌日モシ沈殿シテイナカツタラ、酒豪ノ島津サンハトモカク、僕ハ二日酔デゴキバテニバテ、雪ノ上ニヒツクリカエツタ事デアロウ。事ノツイデニ白状スレバ飲ミナガラ明日ハ吹雪ニナレト祈ツタノハ僕ト行友サンデアツタ。全クノ非国民的ノ行為デアツタ。重ネテオ詫ビスル。夏阿部サンニツレラレテ初メテ本格的ナ岩登リヲシタ。チンネノ岩肌ニ触レタ時本当ニ嬉シカツタ。帰路三ノ窓ノ上デ物凄イ

リップフアツタ。アンナスリップ後ニモ先ニモ始メテアツタガ、不思議滑テイル最中何ハ笑談事ノ様ニシカ思エナ
カッタ。大学モ一、二年ノ内ハ夢中ダツタ。訳モ分ラズガムシヤラニ山エイツテイタヨウニ思ウ
ソノ頃ニナツテモ自分ハ登山ガスポーツダトハドウシテモ考エラレナカッタ。結局山岳部員トイ
ウモノハ登山ノスポーツ的ナ面以外ヲ考エルベキデナイトイウ事ニシテシマツタ。二年ノ春早月
ニイツタ時ハ一番ツラカッタ。出発前胃ヲコワシテイタノデイクノヲ止メヨウカト思ツテイタガ
参加人員ガ余リニモ減ッタタメユコデ参加シナイノハリダーニ済マナイヨウナ気がシテ何ト
ハナシニキテシマツタ。ダカラ山ヘ入ツテモ迷惑ノカケツバナシデアリ大層辛イ山行デアツタ。
ソノ山ガ終ツタ時困ツタ事が出来タ。ソレハ山エイクノガ自分ニハ馬鹿々々シク思エテキタ事デ
アル。ツマラン山エイクヒマニモツト他ノ事ヲスベキダト思ツタ。コンナ状態ハ誰デモ一度経験
スルノデハナйкаト思ウ。ソノ時自分ハ先輩ニ忠告サレテ再ビ山エイク気ニナツタ。アノ時輕ハ
ズミニ止メテイタラソレツ切りデアツタ。ゲン先輩ハ有難イモノデアアル。三年ニナツテ僕モイツ
カ部ノオー線ニタツヨウニナリイロイロ忙シクナツタ。ソノ頃ヤツトスポーツアルピニズムノ意
味ガ分リカケ、以前トハ違ツテカナリ腰ヲ落着ケテ山ソノモノヲジツクリ観察スルヨウニナツテ
キタ。又斗争的ナ山行ヲヤツテミタイト考エル事モヨクアツタ。春事故ガアツテカラ、自分ハ自
分ノ登山能力ニ大キナ疑問ヲモチ、特ニ精神的ナ自信ヲ全ク失ツタ。山エイク事が不安ダツタ。
自分ニ頼レナカッタ。コンナ時福田、中村、両先輩ト山行ヲ共ニシタ事ハ自分ニツツ大キナ意
味ガアツタ。別ニ手ヲ取ツテ何カ教エテモラツタ分デハナカッタガソレデモ精神的ニ得ル所大デ
アツタ。更ニ七月最悪ノ状態ヲ乗切ツテ、増水ノ白萩川ヲバンバ島エタドリ着イタ時、再ビマダ
ヤレルト感ジタ。搜索モ一段落ツイタ今自分ハ又マスマス山ニ行キタクナツタ。今年ハ一月カラ
十二月迄毎月ドコカヘ出テイク事がデキタ。幸福ナ自分デアツタ。山ニ対スル自分ノ気持ハ以前
トハカナリ変ツテシマツタ。何カ遠イ世界ノ様ニ考エテタ山ノ生活ガ、非常ニ身近カニ感ゼラレ
ルヨウニナツタ。山エイクト決ツテモ一向ニソナ気分ガ湧イテコナイ。家ノ布団デ寝ル代リニ
天幕ノ寝袋デ寝ル位ニシカ感ジナクナツタ。生活スル場所ヲ一少変エル位ニシカ感ジナクナツタ
ソノセイカドコノ山エイツテモイイナートハ思ウガ昔ノ様ナ感激ハサラニ味エナクナツタ。何故
山ニ登ルカナドトイウ事ハ考エル気がシナイ。ソナ事ヲ考エルヒマニ山デ寝タイ。ソウダ自分
ノ場合山エイクトイウ表現ヨリ、山デ寝ルトイウ表現ノ方が適切ナヨウナ気がスル。シカシ僕ハ
8000米モノ山デ人間能力ギリギリノ限界ヲ出シキルヨウナ山行ハゴメンダ。自分ヲ賭ケル程
山ニ価値ガアルトハ考エラレナイカラダ。ヒマラヤニ於ル登山ガスポーツアルトハドウシテモ考エラレ
イ。スポーツガソレ程ニキビシイモノデアルトハ考エラレヌカラダ。モットモスポーツ本来ノ逸
趣スルトイウ意味ガ死モツテ完全成就スルトイウナラ話ハ別デアアルガ、K2トカ、アコンカグア
ニテレタアノ凄サマジイ登山ハ僕ニツツ全ク遠イ世界ノヨウニ思エル。勿論僕ダツテヒマラ
ヤヘイキタイ。シカシモット楽ニノボリタイ。ツマリ家ノ生活ソノママノ中カラ脱ケ出スヨウナ
登山ガシタイノダ。自分ハ山エイクタメニ全テ犠牲ニスルナンテ気ニハナレナイ。人並ニ遊ビ
タイシ酒モ飲ミタイ。ケレド余リニモ不摂生シスギテモシ好キナ山ニイケナクナツテハ困ルカラ
摂生スルトイウコノ程度ノ事以上出来ナイ。僕ハ想イ出ス。星ノ冷タイ夜ハ、アタツクノ前ノオ
ノノキヲ、アイゼンヲツケル時ノ手ノ凍エヲ、空ガ青ク晴レタ日ハ、夏山ノ岩ノ向ウニ浮ンダ白
イ雲ヲ、舗道ノ照リカエシニウダル夏ノ物倦イ午後ハ、鋼ノ様ナ岩肌ニ身ヲモタセカケテ陥入ル
様ニ目ヲ閉ジタチンネデノ自分ヲ、ソシテ僕ワイツモ希ウノダ。布団デ寝ル夜ハ、早く山ニイツ
テテントノ中デ寝タイト。

僕ハ家ノ生活モ山デノ生活モ本質ハ全ク同ジダト考エテイル。ダカラ山ニ家ノ生活ヲ出来ル限

夏山のくだらん想い出

理一 越田 和 男

立山天狗平

夜半いよいよ降つて来た。猛烈な雨である。傾斜した草地に張つたテントは、みるみる水びたしになつた。大きな溝を掘つておいたのに。見るとあんな溝なぞものゝ役に立つてない。我々新兵さんがバツイチでピッケル握つて飛び出していく事。二度、三度。歯がガツチガチふるえて止まらない。あの時賀茶さんが沸してくれたカタクリのうまかつた事。それにしても翌朝嵐の中のキジウチは生きた心持がしなかつた。

二股（沈殿の日）

連日の雨でテントにくすぶっている。全く色気のない野郎ばかりごろごろと。話はきまつてワイ談か食い物の話。我々のテントはさつそく「ローソク喫茶ワイ談亭」と命名された。ひもじくなると特に食ひ物の話が興に乗つて来る。妙なものでとことんひもじくなると、とことんぜい沢な話ばかりする。皆んなそれぞれ食通のつもりで、何処そこの何がどうであるとか盛んにまくしたて、京都の料理屋の名前や、山本屋、山形屋の海苔、岡山のきびだんご、金沢の森八まで飛び出す。帰つたら全部食べてやろうと思つたのであるが、実行はほど遠いらしい。

劔の頂上

てつべんには大勢の人が空嚢や紙屑と一共にたむろしていた。「おい、皆んなデカの為に黙とうしようやないか。」我々はほこらの後で北を向いて黙とうした。「あれが小窓尾根や。」「あのピークを小窓の頭と間違えたんやなあ。ほんまにかわいそうな奴ちやなあ。」「おれなあ、あいつピースしか吸ひよらんよつてピークをさつそくとおいて来ん。」

劔の頂上

芦田はんが一生懸命になつて、ほこらの中やら石の間を何やら探し廻っている。十分位探してはたが何にも出て来ない。友達が一週間ほど前に此処へ来てトリスのポケットをおいてくれるはずであるそうな。「ええかげんにやめたらどうやねん。皆んな見てはるで。」一向にやめようともせず、根気よくやつていたら致々見付け出した。「あつ、えらいこつちや、誰か半分飲みやがつた。」まあとにかくあつてこちらもほつとした。このトリス、コンパの時ほんの一滴おしようにばんにあづかつた。

三の窓雪溪

「クレバスあるから気つけて来いよ!」「へい」おぼえたばかりのグリセード、嬉しくてたまらない。賀茶さんに続いて、えゝ調子になつて滑つていつた。ついスピードを出しすぎたらしい。賀茶はん何してのやろ、追ついてもたがな。ぬかしてもいかんしと思ひ勢い良く雪を飛ばして止まつたとたん。いけません、大目玉。「阿保! 気つけ云うたんわからへんのか! 前を見てみい落ちたら一巻の終りやぞ!」大きなクレバスがガバツと口を開けて待つていた。全くどうもいけません。

針之木岳頂上

快晴であつた。皆んな頂上へ出た途端「わあ、きれいな!」の連発。劔に居た時「あの蛙の頭みたいなのが針の木やで。」と云つていたその蛙の鼻の先に今立っているのである。昼食を食つた長次郎の右股や左股があんなに遠くそれでもはつきり見えている。「あかん、きれすぎて写真とられへん。」「こんなもん写真とる手ないで。じつくりながめる手やで。」「そうや、えい、あきらめた、ようしながめたれ。」必死になつてながめていたら、ヘリコプターが音ばかり大きい、まるで赤とんぼの様に工事場の方へ飛んで行つた。

大沢小屋から大出への長い道

「あんなあ、トラック来たらこないして手ふるんやで。」日はカンカンと照りつける。トンネル工事の爲の立派な道路が出来ている。歩けど歩けど道はつきない。皆んなクテンクテンにのびていた所へ致々トラックがやつて来た。皆んな嬉しくて笑ひが止まらない。トラックの上では、まるで子供の様にきやあきやあさわいでいた。

1957年3月乗鞍岳スキー合宿より 世界一アホラシイ・トラブル

経一 藤 安 賢 一

我輩が大学遭難救援隊の一員としての任務を終へて大阪へ無事帰郷し、体養を取つていたところが高校が乗鞍へ行くとの事、我輩も高三であつた関係上、これあ面を出さざるまいと思ひ、高校山岳部室へ行つてみた。ところが一人も高三の奴が行かないと云う、我輩は腹を立てて、ぐつと、考えた、そしておもむろに、「よし行つてやる。」と答へた。高校でも大学でもそうであるが、三と四とか云う数字が己につく様になると、必死である、ただその目的となる名前が入試と就職と云う様に違ひだけであつて、兩者共に前途に生存すべき手段である。故に我輩も、やる」と答へた、大體現在部に居りながら部のものと行動を共にしないと云う法があるか！ハジを知れ！恥を！とまあ我輩としては、最高級の考えを持つて、一諸に行に行つたわけである。ところが我輩、行く前から少々風邪氣味であつた、スチームのない汽車に乗せられ、極端にフソワカ、フソワカするバスに延々と乗せられて鈴蘭に着いた時には、もうフラフラ、先輩面して「やる」と云つた以上、弱根をはく事も出来ず、中学生の一番びりからえつちら、おつちら、冷泉の小屋へついた時には、ケロンゲロン、そのままだたりと物云う元氣もなく、小屋へはい上り部室を取つて、ひつくりかえつてしまつた。その明る日、頭はガンガン、腰は痛い、これじやいかん、と思ひながらも、身体の自由きかぬやるせなさ、我思へど身動かず。

さてその明る日我々は上の山荘へ引越す事になつた。楠木君が持つて来ていた、テラマイ三つぶ食べたお影で少し氣分も良くなつたが、まだ少し顔がほてつていた。熱ある体をひぎずつて、上へ行つてみると、山荘は客が一人もない、と思ひきや、居つた、バンスキークラブの野郎共さて我が甲南ルームへいそいそと思つていると、小屋のおやじが、パンが我等の部室へ入つていると云う。入つているとは何だ、追ひだしてこい（まさかそんな事は云わなかつたが）とまあ、ケツめくつた、おつさんすどすごと二階へ上つていつたが、再びすどすごと降りて来た。どないやと聞くと、あきませんと云う、何ぬかしてけつかんね！それ行け！と血氣さかんな小羊共、おもむろに靴をぬいで、どやどやと、二階の甲南室へ行き、戸をガラツと、失礼、戸は開いてましたつけ、中をのぞくと、大関羊はさつそく出てくれと交渉したが間に合はず、6羊入れかわり立ちかわりやつたがあかなんだ、しまい、目ガネをかけた相手方の老狼、他の部室が開いているのを幸いに、こんな事を云つた「他の部室がいつばいで、あんた達の入るところが無いと云うのなら、私達はこの部屋をゆずりましょう、しかし、他の部室が開いているんだから、他の部室へ入つたら良いでしょう」とぬかしやがつた。我輩はこの言葉、死ぬまで忘れることは出来なからう。解かりますかてこんな理窟がどこにある、我輩の頭はカーツとなつて、何か云つたらしいが、一こうに通じなかつたらしい、我輩も何を云つたか、さつぱり憶えていない、大體人間と云う奴はコウフンの極にたつとすると、何かさけびたくなるらしい、得てしてそう云う場合の言語は訳がわからず、記憶にも止まらないものである、とにかくまあ昔からの話通りに狼が羊に負ける事はなく、6匹の羊は十数匹の狼に抗するすべもなく、すぐさま冷泉へと引き返したのである。

我々にしてみれば位ヶ原山荘に止まらなかつたのが、せめてもの、ささやかなうつつばらしとなつていたのかも知れない。

「山は私の一部であり、私は山の一部である」

経 一 中 馬 宗 武

山に登る目的や、山の存在を理論的に云々するのでなく、生の具象的事実として文章の連なりを眺め、憧れる心や、憧がれるとなく見つめて動かぬ心の香気をそのままに文章にするなら、今の僕の山に対する考えを少しは明らかにすることが出来るはずだ。

或五月の山歩き

残雪は新雪のあの厳しさではなく、これから温かい季節を迎えようとする明るさの中に光っていた。どこまでも高く坐した頂の辺りと大きなゆるいカーブをなした岳沢に、そして小さな（そう見える）ひだの間に雪を残した穂高の豊麗な姿を新緑の間に見た瞬間、僕の山への思慕の情は又それまでの倍ほどにも深くなってしまう。以前はこの情を喜び悲しんだものだが、最近では増えるにまかせ深みゆくにまかせている。梓の清らかな流れ、木々の緑、岩の色、雪、何一つ裏切るものもない世界に入つて、喜びよりもありがたいと云う気持の方が強かつた。

単独行の楽しさは、僕の場合他人と話をしないですむと云う所にある。上高地に三日間居て話らしい話をしたのは、この九月三日に逝かれた北アルプスの父、西糸屋の奥原英男さんだけであつた。

上高地の良さについて今更述べようとは思はない。唯あの時僕が自分を包むものを総べて山として愛すると感じて、一日岳沢の道を登りながら作り上げた空想の世界は、それは少くとも僕の想い出の中での大きな良さと云えるだろう。

山日記より(一)

或種の人を呼ぶのに秋の人と云う呼び方がある。秋の人とは、落葉散る中にいて物思う心だろうか。そんな意味で少し沈んだ、口数の少ない人のことを秋の人と云うのだろうか。僕もそう呼ばれたことを覚えているし僕自身四季の中で秋は最も好きな季節だけれど、春の、もつと明るく高い空を飛びまわつたり、どこまでも走りつゞけて息切れがした時、草の中にねころんで世界中のその今の匂いを臭ぎ尽してゐたり、そうすることは楽しい。

山日記より(二)

学生の本分は学ぶことだ。だから学ぶことの意味を考えて見るのも又いいだろう。何から何を学ぶのか？。明るい春の日にこうして歩きながら何か学べるとしたら、それは意識していないものにせよ楽しい学び方だ。

山日記より(三)

僕の心の娘の名は琴路。琴路が、もうこゝらで休憩しようと云つたのは木々の間からガラ場を通して穂高の高みが見える林の出口であつた。琴路はその時、僕の好きなあの詩人のあの詩を口遊む。

あのそよぎ立つ荒夢の比類ない美しさ。

夕立過ぎた青風に身を研ぎほそる

八方の山々

人は或遙かなるものを白峯北岳とよび

いとも遠いひとつのものを乗鞍と指した

火山高原のどろどろ岩をいどつて咲け輪鉢菊

あゝ遂に吾々が沈黙した五千尺の曠野でやがて来る白い秋雨にちりちりには碎けるとも。

その淡い紫を岩が根に染めつけて死ね輪鋒菊

琴路の肩に手をおいた時。琴路の首の温かさは、もう寒い冬は去つたと云うのに悲しい程懐しかった。

山日記を書く楽しさを知つたのもあの五月の山歩きの時だ。

一日を岳沢で過した次の日は焼へ登つた。例年より多い雪は肩の小屋まで続いており、苦しい登りだったが休みたい時に休んで煙草を吸い、ゆつくりゆつくり登つて行つた。頂上には誰もいなかった。下りにかつて肩の小屋から二十分も歩いた時、急にもう一度頂上に立つて見たくなくてその気持がどうしようもなく、又々登つて行つたのである。こんなことは単独行でなければ出来ないことで、上高地に下りてからも一日全く衝動で歩いた快さで、うれしくてならなかった。

目的を持つて山へ行くのも、持たずに行くのも山登りだ。どんな人でも *Anticipation* を持つて山に登るだろう。しかしそれはあくまで期待であつて目的ではない。団体活動の場合は別として、目的を持つのも期待を抱くのも個人の勝手だ。目的のない山登りはどんな場合でもやめろと云う理論は、だから少くとも個人に対して云うべきではないだろう。

山登りをネタにしようとする文人や画家や、心のわだかまりをぬぐい去ろうとする人間の山登りは皆、目的を持つたものであつて期待を持つたものではない。そんな者には関係はない。僕は僕一人山に行く時、期待も目的も持たず、持つとすれば少しの期待だけの山登りを続けて行きたい。

文頭に僕は、山の登り方や山の存在を理論的に述べるようなことはしたくないと云つた。理論を否定すればそこには理論が成り立つ、と云われれば仕方がない。だから、今の部分は生の具象的表現とは云い難いが、あくまで理論とも理論らしきものとも思われたくない。

山の存在にしてもそうだ。山は土地の起伏だ。山を崇高なものと考えたくなる様な瞬間もある。しかし僕の山は木々があり谷があり幾らかの雪の降る山だ。厳かに聳え立つ山ではない。頂上を目指す為のものだけではない「山」と「Mountain」のニュアンスの違いは大きい。僕の山は山であつて、人を寄せつけ難い *Mountain* ではない。

梓の流れに手を浸そうと思えば好きな時にそう出来る明神池への裏道は忘れ得ぬ一筋だ。黄色いサブリュックを背負つた男も、彼を取りまくもの、中に入つてしまつていて気持が良かったが、今何時頃ですかと尋ねた男も別にその場にふさわしくないとはいえなかつた。梓河畔の美しさは白樺よりも化粧柳の美しさだ。

山は私の恋人であるとか、山なくして生きられない私、などと言つて山に負担をかけたくない彼 ● 言葉 にして見ても、「山は私の一部であり、私は山の一部である」と言つただけで良かったのだ。エネルギーを与へることを強要され、恩人それも人生を与えて呉れた恩人と云う名を付けられて、山はさぞ困っていることだろう。真の山登りがどのような形のものであるか（真の山登りと云う言葉は、何ら意味を持たないと云う人もあろうが）、それを知る人はいない。しかし、これが本当の山登りのあり方ではなからうかと思われる登山を行つたベルグハイルの六行の言葉を発見した時、その短い文章の中にせゝこましく入つてゐる、慰安、熱情、人生、恩人、などの言葉に目を輝かせたのである。やはり僕の好きな言葉の一つだ。

「テント・キーパー」

経一 牧 野 宏

シラフの中で腕時計をすかしてみると、青白い光を発した針は、既に四時をすつかりオーバーしている。これは寝すぎた、しくじったとうさぎとかめのうさぎの如くあわて、テントの外に出る。懐中電燈の光をたよりに岩屋の下にあるカマドに火をつける。こゝ、劔二股のキャンプ。テントも峰も谷もいまだ完全に夜の部でありこれから始まる昼の部のプログラムにそなえてぐつぐつとねむつて居る。ただ今しがたつけられたカマドの火にボツと浮び上つたこの岩屋の内の一部分だけが、そのねむりから起こされてしまった様だ。ふとうしろをみると岩屋の壁の私の影もこちらをふりむく。私は影が私に向つて「御苦労な事だなあ」と声を発した様な気がする。

山行きに対する「御苦労さん」と言う言葉には何と答えていいやら返事が実にむづかしい。それが本当に労をねぎらっているのやら、言外の意味を含んでいるのやらを判別せねばならないから。「いやあ、どうも」と答える。

私も一人でさびしいから影と話を始める。何んやかやと私が強そうな事を言っていると、影は、「そう峰峰とかたくならずとも峠へ返つて見ろ」。「峠には峠のいい所があるものだよ。」と言う。なるほど私は、困難なる登攀の哲学的に意義づけられた様な行為に食傷するには至っていない。然し一方「山に入ること」即ち谷から峠へ峠から谷へ、ある時には、村から谷、谷から村への道がキスリングの中にかくに重い物がつめこまれていようと。限りない喜びと感動とをしばしば与えてくれるのを知っている。峰のテツペンで味わう事の出来るあの喜びは、峠より上に於ける困難なクライミングがあつてのものであろうが、但し困難なクライミングの始まる以前の峠より、下における苦しさ（既に町から始まつている。）を経て来たと言う事も見のがせない。要するに峰ばかりでなく峠や谷においても、じつくりとその自然に抱かれて見給えと影は云うのだろう。・・・・・・

空が白らむにつれて、影も消えてしまった。飯盒もわき出した様だ。早くアタックメンバーを起こさなくてはと思つて岩屋から出た。木々の梢をもれた朝の光がテントに美しいシマ模様を写し出していた。

「ゲート・ロックに登る日」

中三 竹 原 洋 爾

その日は、確か合宿から帰つてしばらくした八月の二十六日だつたと思う。僕と兄はA県へ行く積りで出かけたが、余り暑いので沢を歩いて行く事にして、ゲート・ロックの前の所迄下つた。そして石を伝つてゲートの真下へ来た。僕は半分冗談で「ゲートで案外やな。」と云つた。「そやけどやばいで」「登れん事はない。」「そんなら登るか。」話は決つた。僕はザツクからザイルを出した。そして兄は登り始めた。「やばいな」と兄はいつたが僕は黙つてビレイした。兄は中間にあるテラスに達した。次に僕が登り始めた。テラスに着く迄は、ホールドを見つけて着実に行けばそれ程苦にはならなかつた。それから兄は直登すべきか、回り込むべきかで迷つた。下

から見ると上にオ二のテラスがある様に見えた。結局直登する事になった。しばらくして兄は行きづまってしまう。後の二米程が砂で登れないと云う。下から見えたテラスは見誤りだった。兄は僕に一応下におりて横の道から上に出てザイルを垂らしてくれと云った。だが、僕は下に降りる自信もないし、直登ではなしにテラスから回り込んで登るのは簡単だと思つたので、そうする事にした。兄はザイルを解いた。僕は登り始めた。その岩は逆層であつたが簡単に登れた。僕は兄の所へザイルを垂らした。兄は登つてきた。この様にたつた一言の冗談によつて行われたこの事は全く反省すべき事だと思う。この様な小さな事からどれだけ多くの犠牲者を出した事が良く考えねばならない。

「北 尾 根 登 攀」

中三 竹 原 洋 爾

我々は、朝早く出発した。酒沢小屋の附近から更に下に降りて雪溪をつめV、IVのコルに出た。雪溪の上りでは途中でアイゼンをつけたが雪溪をつめるのは大変じやまくさくしんどかつた。V峯の上りからIV峯迄は岩場の様な所で雪溪を登つたしんどさも吹つ飛んで、嬉しくなつてくる。尾根から酒沢を見ると、酒沢小屋、朋文堂ヒュツテ、多くのテントが小さく見える。北尾根全体も大変落石が多かつたが、とりわけIV峯のあたりから急に落石が多くなつてきた。この辺りは、大変気をつかつて石を手でのけてから行くと云う有様だった。石がカタカタと音をたて、落ちていくといない所に人がいる様な気がして仕方がなかつた。やがてI峯の下にきて上を見あげたら人が十人から二十人位いる様に見えた。もう少しで頂上という所で、挙大の落石をおこしてしまつたら怒鳴られた。こわくて忘れられない。さて上え上つてみると誰もいない。わずかに数人のパーティーがいただけだった。我々は、頂上で周りに見える山々の説明を聞いた。それから昼食にした。前穂からつり尾根を見ると普通の道の様な所なのでほつとした。

ジ ャ ン ダ ル ム

中三 堀 田 美 照

合宿の四日目は穂高小屋からジャンダルムへ行きロック・クライミングする予定だ。テントキーパーは竹中さんだ。朝五時に起き六時半に出発した。空は良く晴れていて良い天気であつた。

まっすぐ穂高小屋迄登つた。途中穂高小屋のすぐ下の所まで来た時グリセードをしていた人が僕等のすぐ下の所からひつくり返り、石ころの上をころがり石の影へ入ってしまった。声をかけると、返事があつたので大丈夫らしかつた。穂高小屋に着いて一休みした。登つて来た反対側もたいへん良かった。一休みした後、ジャンダルムへ向つた。途中あぶない所もあつたがどうにか通れた。着くと登るパーティーを決める事になった。登るのは合計四人である。そして二人は大学の人、あとの二人が中学である。僕等中学は三人居る一人半ばである。くじびきをした。そしてチクさんがあたらなかった。僕は、美田さんと、ヤツさんは、鳥居さんとパーティーを組んだ。

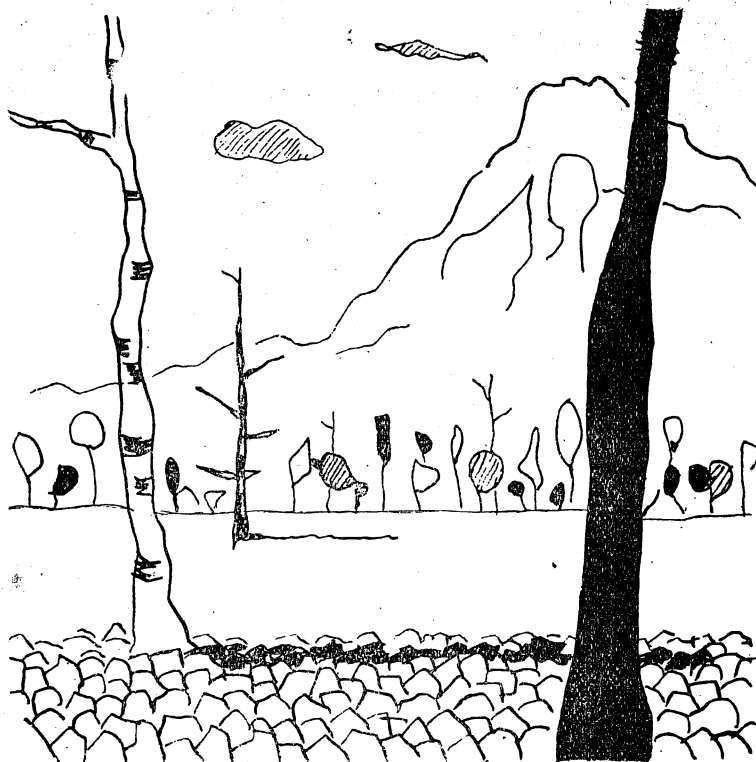
岩の下まで行くと案外やさしそうに見えた。まず美田さんがトツプで登り始めた。美田さんは、走る様に登って行く。僕は、余り速いのでザイルを延ばすのをもうちよつとで遅れそうになった。オ一のテラス迄着くと今度は僕の番だ。~~僕が美田さんの様に速く登ってやろうと急いだ。~~オ一のテラス迄は案外やすかった。あとからヤツさんと鳥居さんが登って来る。途中で一回休みあめを食べた。少し登ると両側が切り立つた処へ出た。右側は石ころでそして余り高くなかった。しかし左側は、霧がかゝつていて良く見えなかつたが、後で聞くと百米以上あるそうだ。あとは余りむづかしい所はなかつた。上に行くと、皆んなが待つていた。そして昼飯だ。僕は、腹がへつていたので腹いっぱい食べた。それから焚火を取りテントへ帰った。

紅 葉

経 二 阿 河 徹 三

紅葉の頃になると私はいつも昔友達で行った事のある湯原温泉の事を思い出すのであるが、幸に秋の合宿で御在所岳の紅葉と愛知川の川景を見る事が出来非常に懐かしく思つた。もう六年も前の事であるが、十月の中間試験が終つた時なんとなく旅行がしたくなり旅行に行くなら一度行きたいと思つていた湯原へ行こうと思ひ、級友のT君とH君とA君に話して見るとみんな行つて見たいと云う事で、お互に家には試験休みだと云う事にして出かける事にした。翌朝私達は三ノ宮から姫路まで行き、更に姫新線に乗り勝山駅で下車した。そこから今度はバスで一時間程旭川ぞいに行くと、湯原温泉と云う寂びれた小さな温泉町に着いた。この温泉町と云うのは旭川の上流、中国山脈の分水嶺に近い山郷で、いわゆる旭仙峽の景勝中に湧出している温泉であるが、この温泉と云うのが旭川の河中の岩根から湧く露天の砂吹温泉である。あとから宿屋の主人に聞いた所によると、この山郷は昔美作と伯耆とを結ぶ伯耆街道筋の宿場としてずいぶん開けていたそうだが、今ではその住時を忍ぶ面影がうかがわれた。さてこの温泉町に着いた私達一行は宿につくなり夕食を取り近所を散歩し、少し暗くなつてから露天おろへと足を向けた。秋の風は冷く身にしろたが、はじめて来た私達は寒さもわすれていきよいよふろの中に飛び込んだ。川の水音とカジカの鳴声がなんとなく哀愁をおびてる様に思へ、つくづく都会にいる私にとつてこの山郷は本当にいゝ所と思へた。そう思っている内にも、気の早い連中は川の中にはいつてさわいでいたが、しばらくすると元のしづけさにかへつた。そして私達お互は学校をさぼつてこの山郷に来た事を喜び会つた。次の日の朝私達は早く起きて旭川ぞいに歩くと対岸には鼓が岳の奇岩が屹立し、東に高く雨乞山が聳え、川の中には大小の色々な形をした石が非常に美しく思へた。だれとなく秋の川や山はいゝ所だなど云つて云たが、私にとつてはこの上もなく感激した。朝食ののち我々は弁当を持って紅葉を見る為近辺の山へ出かけた。まず宿屋を出た所にある吊橋を渡ると、山道がありこの道が鼓が岳の頂上へ出るだろうと思ひ上にのぼることにした少し行つた所からそろそろあたりに紅葉の美しさが目にはいり、そこですこし休憩したのちまた出かけた。ほとんど頂上まぎわの頃となると、あたりに名前は分らないが色々な山が見えて来た、多分これらの山を中国山脈と云うのだらうとは思ふが、我々にとつては山の名前などはどうでもよかつた。ただ山々が紅葉で美しく色どられているのを見るだけで満足した。頂上に出ると、そこであたりの景色を見ながら弁当をたべわいわい騒いだ。二時間ぐらいそこで遊んだのち山を下つた。翌朝私達は

この思い多き山郷に別れをつげ帰途についた。今ではこの思出もつい最近の出来事の様になれた所である。この間この山郷に行つて来た人に逢つて聞いた所この山の温泉の上にダムが出来ずいふん変つてしまつた様に聞いた。そして私達がかつて歩いた所も今は湖の湖底となつている様だつた。このころから私は秋になると紅葉と川のせゝらぎを聞きたいと思つていたが、秋の合宿でひさしぶりにそれを満喫する事が出来大変うれしく思えた。





先 輩 消 息

山崎鉄治

お端書を頂き甲南在職当時の事をあれこれとなつかしく思い出しております。

夏の上高地や冬の乗鞍、菅平や春秋の六甲など忘れ得ない楽しい追憶です。西田、松井、両先生や、武田、山口（雅）、赤松、中村、福井、伊藤、~~榎田、堀沢、中村、山田~~、~~山田~~、国府等の諸君の顔が今でもはつきり印象に残っております。但し小生の思い出す顔はもう二十年近くも前の在学当時のものですから今お合いましたらその変り様に驚く事でしょう。甲南はほんとに良い学校でした。小生は自分の母校以上に愛着を覚えております。今でも新聞のスポーツ欄などで甲南の名前を見ると我がことの様に誇らしく感じます。マナスル登山隊の中に甲南の出身者の名前を見出し甲南山岳部の技術の優秀さを再認識しましたが、それにも増して、先輩、後輩間の美しい団結と友情は他では見られないものと確信します。甲南関係の人で一番最近会ったのは、先生では秋山先生（金沢市~~聳~~台高校々長）、卒業生では執行君です。

新潟へ来られる機会がありましたら是非尋ねて来て下さい。

拜啟

西田 外彦

いつも山岳部関係の御通知や特報を御送り頂き厚く御礼申し上げます。大変なつかしく存じます。原稿御所望頂き何かと存じますがこの処一寸忙しく旅行を致しますので、欠礼致しますかも知れませんが、何卒お許し下さい。

皆様によろしく

敬 具

砂川彰雄

かなり寒くなつて来ました君等は分からだらうが、七時や八時頃は身がちぢむ様だ、日曜日原稿の請求するませんでした、氣にかゝつてはいるけれども何を書いて良いやら、福永君の追悼号では無いでしょうな、それにしても、馬鹿話を書く訳けにも行かず、記録が手元に無いので柳と二人でいつた山行の事も書けず（この記録は前日にあずけた山日記に書いてある、他の事も書いてあるので、ぜひ君でもあずかつておいてくれ、頼む）山岳部の事等書こうと思つても今の状態ではゆつくり考える事も出来ず、又それより小生十二月より本社勤務となつたので十一月末位に家に帰ります、それで今引継ぎの為、毎日いそがしいので、ゆつくりものを考えて書く事など出来そうもないので、一応ことわりの手紙を書いた次才です、もし十七日に帰れたら、一度電話しますが、この様な状態なので悪しからずお許し下さい。では又 失礼

阿 部 公 義

そちらの様子はいかがですか。もうそろそろ夏山も終つたと思いますので手紙を書きます。その後のプクの様子を知らせてほしいとゴミ先生に手紙を書いたが音さたない。それを知らせてくれ。他の人の動静もあわせて知らせてくれれば幸です。さすがに我輩も最近少々ホームシック気

味や。あまりシボラレすぎや。それでもキューバの女の子はすばらしいぞ。オニ的にやつても大丈夫。遠足なんかに行くバスの中なんか、日本では想像出来ん。PARTYなんかゆかいや。キューバの連中はともかく面白い。ナイヤガラにこの前行ったから絵葉書で出す。それから山岳部の連中によろしく。あんまり急がしくて手紙も書けんが、時々手紙くれ。 8月15日

この間は手紙ありがとう。こちらは相変らずです。NEW.Yorkにはスペイン系の女の子が多いから楽しいです。砂川でもくればよろこぶでしょうな。オニ的なことをしても大丈夫。教室の中もなごやかなもんや。僕の所12人のうち4人女の子で先生も女やし面白いぞ。こちらの先生はホトンドがMissできれいな人やな。この間ワシントンへ行つて来た。このはがきそこで買つて来た。良い所でうらやましいね。NEW.Yorkはつくづくいやになった。U.Y.U.なんて普通のビルト変らんし、うるさいし、しょちなしや。その上こきこきしぼられるのやからわりがあわん。ともかくもピンピンしているだけや。 10月5日

近 藤 実：前略 山岳会から申越しがあつたので、昭和八年に北尾根又白側で起つた小さなアクジデントの思い出でも書こうかと思つてゐたところ、最近、感冒の大流行で商稼大繁昌の為暇がなくこのような短信で済みます。東京の諸兄とは会うことがありますが阪神間の人達とは絶つて会はないので一度会合の機会があればと思つてゐます。では又諸兄の御健康を祈ります。

武 田 六 郎：此の秋は用客が来たり、風邪を引いたりしている間に何時の間にか後一ヶ月で新春と云うことに相成りました。如何も近頃は時間が少し早く経ち過ぎる様です。一日が48時間位になつて呉れぬかなあと思つています。 11月25日

木 全 実：大変御心配をおかけしましたが、目下自宅にて、時間をつぶすのに苦労しております。体の方は好調すぎて一寸も余しています。皆様会社にて御奮闘の事と思いますが、体に氣をつけて適当にあそんでください。小生もぼちぼち山へでもいこうかと思つています。誰にでも同伴を致します。皆様の御健康を祈つています。

阿 部 純 一：春山事故の批判をかく積りでいましたが、仕事におわれてつい失礼しました。時報オラ号にある私の考えを今一度読みかえしていただきたいと思います。皆様の御健康を祈ります。

塩 野 良之助：山岳会の諸兄に大変御無沙汰しておりますが皆様お变りないと思います。英国に来て一年丁度Pans で国際学会があるのでその前に大陸を走り廻りました。ベルギー、オランダ、ドイツを友人と車で廻つてスイスに入り、ジュネーブで一人別れて、Interlakenからユングラフ、ツエルマツト、からgornergratへ、それぞれ登山電車で登り、歩がよい登山をして、山の氣分を味はい最後に、フランスに入つて、シャモニーへ来て、mont Blancを見て、今朝はtelecfenequilで、Aiguille du midiの下の水河の所(2300米)迄登つてきました。来年には、Aiguille du midiの頂上迄いける様になれるので、すでに架線がかけてあり、これが出来ると、ヨーロッパ最高点迄ケーブルで行ける分です。ウイリツシュ、ベンド、シモンのピツケルは、約三千円上下といった所、来年は、ひまがあれば、山に登る積りです。

シャモニーにて

le 19 guillet 1956

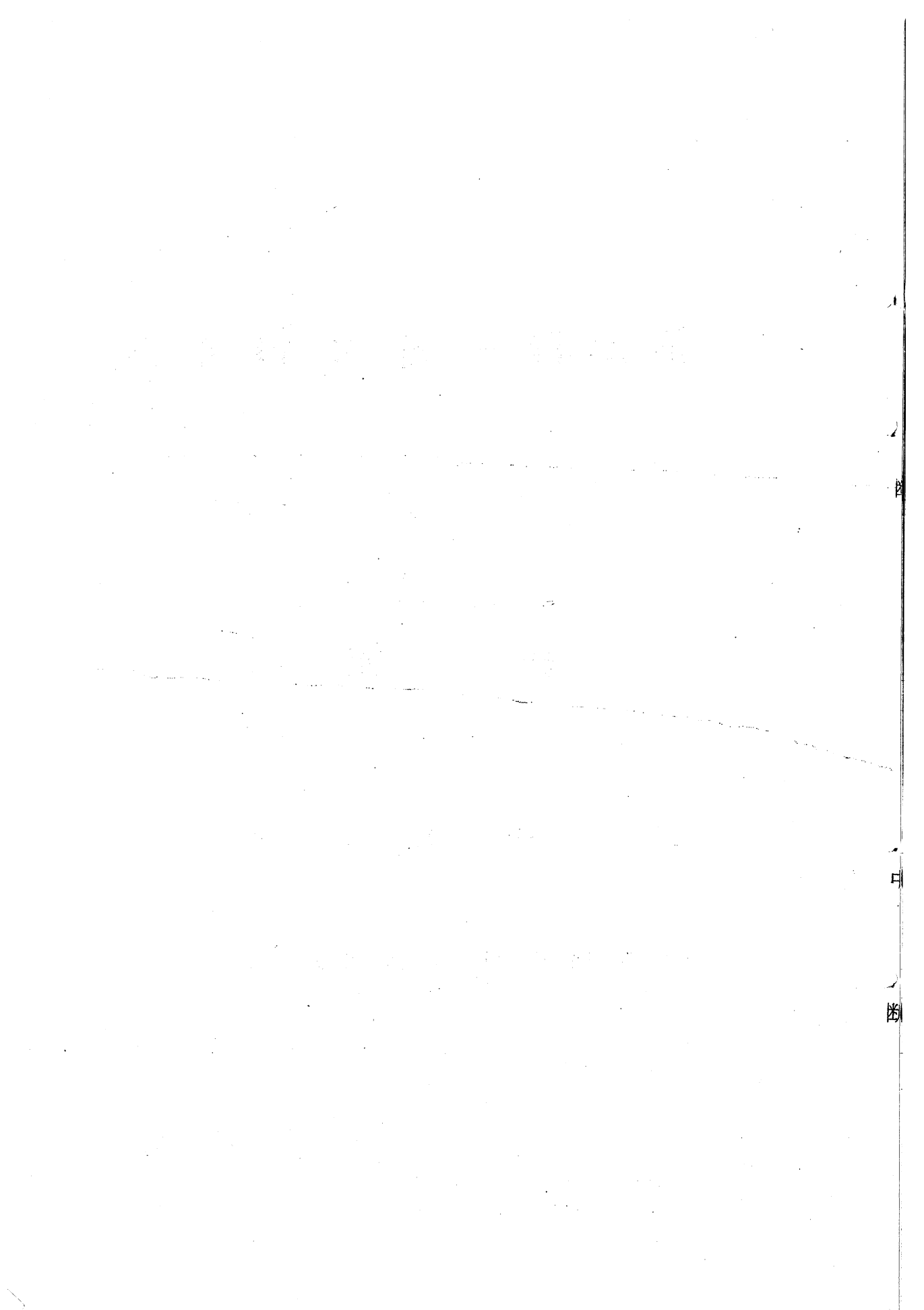
——福永隆一君に捧ぐ——

研 究

雪 崩 に 就 い て

積雪期の劔西面に就いて

雨 宮 宏 光



雪 崩 に 就 い て

(雪崩・・・ソノ危険ヲ中心トシテ・・・)

私ハ雪ニツイテハ、専門の知識が全く不足シテイテ。ソノタメ雪崩ニツイテノ所謂理論の考察トイッタモノニツイテハ述べル事が出来ナイ。タダ今迄ノ乏シイ経験ト諸先輩カラ教エラレタ事等ヲモトニシテドノヨウナ状態ノ時ニドノヨウナ雪崩ノ危険ガアルカトイウ事ヲ中心ニ書イテシタイト思イマス。

(雪崩ノ良ク発生シテイタ地形、地貌)

草地ノ斜面。特ニ笹ノ叢生シタ斜面デハ良ク雪崩ガ起ル。コノ現象ハ特ニ十二月ノ初メ頃ニハナハダシイト思ウ。ソレハ根雪ニナル前ノ雪ガ不安定ナ滑リ安イクツシヨソノ上ニフンワリト積ツテイルタメデアル。又総雪崩ノ良ク発生スル所デモアル。次ニ一枚岩ノルンゼ等ハ今迄最モ多ク雪崩ノ出テイタ所デアル。タダコ、デハ雪ガ積レバ直チニ雪崩レルタメニ大キナ雪崩ハ余リ出ナイ。ダカラモシコノ様ナ所デ当然起ルベキ雪崩ガ発生シテイナイ時。ソコニ於ル雪崩ノ危険ハ絶対的ナモノデアリ規模モ亦大キイ。

(雪崩ノ発生シニクイ地貌、地形)

樹々ノ密成地、段々畠状斜面、ガラ石ノ散在地、非常ニ急傾斜ナ岩壁、コレラノ所デハ雪崩ガ起リニクイトサレテイル。

地貌ト雪崩ノ関係ヲ考エルナラ当然無雪期ニ偵察ガナサレテイナケレバナラス。シカシコノ関係ハ冬ノ初メ、五月ノ雪崩ニ関シテノミイエル事デアリ、春トモナレバ多量ノ積雪ガ今イッタ地貌ヲオ、ツテシマウタメ今度ハ雪ト雪トノ関係ニツイテ考エネバナラナイ。

(雪ト雪トノ関係)

- A 粉雪ノ上ニ粉雪ガ積ツタ時
- B " 湿雪 "
- C 湿雪 " 粉雪 "
- D 湿雪 " 湿雪 "
- E クラストシタ雪ノ上ニ粉雪ノ積ツタ時
- F " 湿雪 "
- G " 最湿雪 "
- H 最湿雪ノ上ニ最湿雪ノ積ツタ時

モツトアルト思ウガ僕ハコレ位シカシラナイ。最初結論カライウナラ「A」ノ状態ノ場合ガ最モ危険デアリ又雪崩発生ノ余知ハ非常ニムツカシイ。逆ニ「D」ノ場合ガ最モ雪崩ガ発生シニクイ。「E、F、G、H」ノ時ニハ勿論雪崩ノ発生ハヨク見ラレルノdealガ、コレハ「E」ヲ除イテ余知ガ可能deal。

「A」 粉雪自体非常ニ不安定デアリソノ上ニ更ニ又粉雪ガ降ツタトスレバ雪崩ノ危険ハ非常ニ大キイ。デハコレハイツ頃ヨクシラレルノデアロウカ。ニツノ雪ノ接触面ガ粉雪ノ状態ノマ、デ

アル事ハ真冬ニ限ラレルト思フ。ソレハ日中日照ガアツテ雪ノ表面ガトケタ方頃表面ガクラストシテクルノハスキー場デモ見ラレル事デアルガ、コレカラ判断シテ、下層ノ雪ノ表面ガ粉雪ノ状態ノマ、デアルタメニ日中ハ勿論、夜モ非常ニ寒イ時デナイトナラナイ。逆ニイウナラモシ日中、日射ガアツタトシタラ（真冬デモ）、ソノ翌日粉雪ガフツテモ、モハヤ粉雪ノ上ニ粉雪ノ積ツタ状態ハ考エラレナイ。シカシコレハ低イ部分ニツイテノミイエル事デアル。高度ガ二千米ヲ越スト、日射ガアツテモ、低温ノタメ雪ノ表面ガトケズ從ツテ夜ニナツテ表面ガクラストスル事モナイ。ダカラ「A」ノコノ厄介ナ場合ハ次ノヨウナ時シカナイト自分ハ考エテイル。ツマリ高度ノ低イ所デハ、粉雪ノ降ツタ後、曇天、非常ニ低温（ -10°C 以下）ノ日ヲ間ニオイテ、粉雪ガ降ツタ（減多ニナイト思フ）時、高度ノ高イ所デハ粉雪ノ降ツタアト晴天、曇天ニカ、ワラズ粉雪ガフツタナライツデモ「A」デアルト。ソシテコノ場合上層ノ粉雪ノバランスノ崩壊ガ時トシテ下層ノ雪ノバランスオモ崩壊シテ両者一体ノ大雪崩ヲ発生サス事ガ考エラレル。所デ自分ハ下層ノ雪ガ上層ノ積雪ニ押エラレテ緊ツテイク事ニツイテハ全ク述ベナカッタ。ソレヲ考エルナラ上層ノ粉雪ノ降雪量ガ多ケレバ、下ノ雪ハ固クシマツテソレガ不安定ナ粉雪ノ状態ノマ、デアル事ハ考エラレナイ。逆ニ上層ノ粉雪ノ降雪量ガ少イ時ハ、上層ノ雪ノ崩シタル事ハ余リ考エナクテイハ、シカシ雪ハ雪自身ノ重ミデシマル事モ当然ニ考エラレル。コウ考エルト「A」ノヨウナ時ハ實際ニハ、ホトンドアリ得ナイ事ニナル。雪ガシマルノニカナリノ時間ガカ、ルトシタラ、「A」ノ場合ハ、降雪中カ、降雪直後シカナイト考エラレル、シカシコウ考エテシマウ事ハ余知ノムツカシイ新雪崩ヲ考エル時ニ危険ガアルノデ、考エ方ヲ少シ拡大シテ先程ノ様ニイツタ分ナノデス。

「B」 粉雪ガ粉雪ノ状態ノマ、何日モアル事ハ日本山岳デハ稀ダロウト思フ（高所ヲ除イテ）ダカラ「B」ノヨウナ状態モ割合ト少イト考エラレルノデハナイカ。コノ時単ニ表面ノミノ觀察ニ終ルナラバ上層ノ湿雪自身ガ雪崩レルノデナクシテ下層ノ粉雪ガ上層ノ雪ノタメニバランスノ崩壊ニヒシテイルノニ氣ツカナイカモシレヌ。コンナ事ハ勿論稀デアロウガ。

「C」 コノ時上ニツ積ツタ粉雪ノ量ガ多ケレバ雪崩ノ危険ハ大キク、ソノ規模モ大キイ。ソノ量少ケレバ一応安全デアル。

「D」 コノ時ハ一番雪崩ガ発生シニクイ。ソレハニツノ雪ノ結合状態ガイ、トイウ事ト湿雪自身カナリノ日射ヲウケルカ、高温ノ日デナイト限リ雪崩レルカラデアル。

「E, F, G」 日本デハコノ場合ガ最も多イノデハナイカト思ワレル。冬、春共ニミラレルノダガ、特ニ冬ニ多イ。コノ時ニツノ雪ノ結合状態ハ極メテ悪ク、謂ル「熱ナデ」トイウ雪崩ガヨク起ル。ソシテ雪崩ノ規模ハ、クラスト雪ノ上ニ積ツタ雪ノ量デ定マル。

「H」 コハデ最湿雪トイウノハ四、五月頃ニ見ラレル、ミゾレニ近イ雪ノ事デアル。コノ時ノ雪崩ノ危険ニ関シテハ阿部先輩ノ研究ヲ読マレタイ。

以上雪ト雪トノ関係ニツイテ極メテ簡単ニカイテシマツタガ、最も雪崩レヤスイ雪ハ粉雪（乾燥雪）ト最湿雪デアル。湿雪ハソレ自身雪崩レル事ガナク、日射、温度ノ影響ヲウケテ雪崩レルモノデアリ、余知ガ大体可能デアル。一次雪崩ニツイテホトンド何モカ、ナカッタ。ソレハ自分

モヨク分ラヌカラデアル。雪ノバランスガ崩レテ雪崩レルトスルナラ、積雪ガ50程以下マデ雪崩レナイトカ、ソレ以上ダトバランスガ崩レルトイウヨウニ約ニ定規ニ割切レヌ所ニコノ新雪雪崩ノムツカシサガアル。ドノ位ツモレバ雪崩レルノカサツパリ分ラン。タダ冬ノドカ雪ノ最中、直後等ハ最モ危険ナ事ハ分ル。所デ何が粉雪デ、何が湿雪カトイワレルト困ツテシマウ。ソレハソノ場ソノ場デノ判断ニタヨルシカナイ。スキーデラツセルシテイテ雪ガ重イトカ軽イトカイウガアノヨウナ感ジデ区別スルシカナイ。イズレニシロドンナ雪ノ上ニドノヨウナ雪ガ、ドンナ状態ノ元ニ積ツタカラ考エル事ハ雪崩ノ危険ヲサケルニ絶対必要ナ事デアリ、単ニ雪ノ表面ノミノ觀察ニトドラズ、ソノ断面ニワツツテ調ベル事ハ積雪期登山者ノ義務デアル。

〔日射、温度〕

コノ二ツガ二次雪崩ノ原因ノ最タルモノデアリ、又一次雪崩ノ発生オモ促進サセル大キナ原因デアルトサレテイル。ダカラ春山デハ日ノ当ラス、気温モ低イ夜中ニ行動スレバ雪崩ノ危険ハサケラレルトサレテキタ。シカシコノ公式ハ冬ノ新雪雪崩ノ時ニハホトンドアテハマラナイ。真冬夜中ニ雪崩ノ音ヲ聞イタ経験ハ誰シモアルト思ウ。タダ希望ノナ見方ヲモツテスレバ、勿論日中ノ方が夜ヨリヨク雪崩ガ起ルカラ、夜ノ方が安全トイウダケノ話デアル。国鉄高山線ニ於ル雪崩発生時刻ノ統計デハ、春ハ午后三時頃、冬ハ午前五時頃ニ最モ雪崩ガヨク起ルトノ事デアリコレハ考エサセラレル事実デアル。イズレニシロ新雪雪崩ノ予知ハ全クムツカシク戒シメニアルヨウ降雪中、降雪直後ハ雪崩ノ危険アル場所ニ近ヨラヌ事デアロウ。又コノ雪崩ハガツテ一度モ雪崩ノ出タ事ノナイ様ナ所ニデモ発生シ一応安全ト考エラレル場所ニイテモ遠カラオソツテクル事ガアルダケニ一層注意シナケレバナラナイ。話が脱線シタ。本筋ニ戻ル。デハ湿雪ノ降ル春デハ一次雪崩ノ危険ハドノヨウナ時ニアルカ。今春日萩側小窓谷デ朝ノ五時頃小窓尾根側壁（北向キ）ヨリ一次雪崩ノ発生ヲミタ。モツトモソノ日迄一週間以上モ雪ノ降り続イタ（カナリWETナ雪）後デアリ、又雪崩ノ発生シタ場所ガ、一枚岩ノ急傾斜デアル事ヲ考エテコノ事ハカナリ割引シテ考エネバナラナイ。タダコノヨウニ二重、三重ニ悪条件ノ重ナツタ時ハ春デモ一次雪崩ノ危険ガアル事ヲイイタカツタノデアル。（コノ時ノ雪崩ハ風、Shockデバランスガ崩サレタモノト思ハレル）

次ニ極ク一般のニツテ晴天低温ノ日ト曇天高温ノ日トデハドチラニ多ク雪崩ガ出テイタダロウ。コノ二ツヲ比較スル程多クノ経験ヲモタヌノデハツキリシタ事ハイエヌガ、高度ノ高い部分デハ曇天高温トイツタ状態ヲ考エナクテモイイト思ウ。三千米モノ所デハ余程ノ事ガナイ限り温度ガ十度以上ニナラナイカラダ。ダカラ高度ノ高い部分デハ日射ノミニツイテ考エルベキデアル。一般のニツテ高所デハ低所ヨリ日射ノ影響ヲ多クウケテイルト考エラレル。ソレハ照射時刻ハ高イ程早イト考エラレルカラダ。高度ノ低い所デハ日射モ温度モ雪崩発生ニ関係シテクル。春池ノ谷出合附近ニ張ツタ天幕ノ前方三本ノルンゼカラ毎日雪崩ガ起ツタガソノ状態ヲ記スト。

雪崩発生時刻 発生時温度

三月十五日（晴）	十時四十分	九度
三月十七日（曇）	十四時二十分	十一度
三月十八日（晴）	十時十分	六度

〔備考〕

三月十五日迄一週間程降雪ガアリ、三月十四日ノ日ニハ一尺程ノ降雪（湿ツタ雪）ガアツタ。

三月十六日ノ日ニハ夜ノ二時頃カラ十七日ノ朝ノ十時頃迄雪が降り続キ(湿雪)約五十糎積ツタ雪崩ノ起ツタルンゼハ無雪期ノ偵察デモ雪崩ノ通路ト分ル程ニ。木々ノ蜜生シタ急傾斜面ノ中ニソコダケ深クエダレテ木ハ全部折レテオリ。地貌ハ草地デアル。コノルンゼ(ルンゼトイウヨリムシロ水デ地面ガ堀リ下ゲラレタ程度ノモノ)ハ南向キデアリ傾斜ハ六十度位。長サハ百五十米程デアル。

コノ一事例ノミヲモツテ。曇天高温ノ日ハ(ソノ前日ニ相当ノ降雪ガアツタニカカワラズ)雪崩ノ発生ガ晴天低温ノ日ヨリ時間的ニズレガアルトスルノハ早計デアリ。雪崩ノ発生ヲ促進サスモノハ温度ヨリ日射ダトスルノモ亦早計デアル。シカシ極ク常識的ニイツテ。日射ノアル日ハ当然気温モ高イト考エラレルカラ。曇天高温(異常ナ高温デナイ限り)トイツタ状態ハソウ考エナクテイイト思フ。日射。温度ノドチラガドレダケ雪崩ノ発生ヲ促スモノナカ僕ニハ良ク分ラナイ。シカシ雲ガキレテ日ガ雪面ニ当ルト間モナク雪崩ガ起ツタトイウ事実ヤ。曇天ノ日ヨリ晴天ノ日ニ多ク雪崩ヲミタトイウ事カラ。温度ヨリ日射ノ方ガ雪崩ノ発生ニ大キナ意味ヲモツノデハナйкаト思ハレル。今春池ノ谷ノ天幕ハ二十日間程張りツバナシニシテイタノデアリモツト詳しく統計ヲトルノデアツタ。雪崩ノオコル場所ノ前ニ一月以上陣取ツテ。雪崩発生ノ時間。天候。気温。雪質。ETC。ニツイテ詳しくデータヲ集メタラ何ラカノ結論ヲ得ラレルト思フガ今迄ソノヨウナ機会ガナカツタ。雪崩ニ関スル机ノ上デノ理論的考察。研究ヲ百万辺繰返スヨリ。實際。雪崩ヲ見タ時ノデータヲ集メテソコカラ何カノ結論ヲ導キ出ス方ガ近道ノヨウナ気がするガ。

(風ト雪崩)

雪崩ヲ考エル時風ノ影響ヲ無視シテハナラナイ。一般的ニイツテ風下側ハ雪ガタマリ安クタメニ雪崩ノ危険モ大キイ。次ニ雪ニ風ガ吹キツケレバ。雪ハシマルノダガコノ事カライツテ。冬無風状態ガ続イテソノ間降雪ガアツタトシタラソレダケデモ雪崩ノ危険ハ大キイ。逆ニ極単ナ云方ヲスレバモシ五日間降雪ガナク。ソノ間猛烈ナ風ガ吹イタトスレバ。ソノ風ヲ直角ニウケタ斜面デハ雪崩ノ危険ハナイト考エラレル。次ニ風ガ一次雪崩ヲ引起ス事ガアル。今春小窓谷ノ雪崩ガソウデアツタ。降雪ガ止ンデ。バランスノ保持ガ飽和状態ニ達シテイル雪ハ一寸シタ Shock デバランスガ崩レテ雪崩ダス。コノ Shock ハ人体ニヨルモノ。風ニヨルモノシカ考エラレナイ。次ニ風上側。高度ノ高イ所デハ大体クラストシテイテ雪崩ノ危険ハ少イ。ダカラ稜線ヲ歩イテイテドチラカノ斜面ヲトラヴァース。スル必要ニセマラレタ時風上側ヲ横断スルノガ普通デアル。シカシモシ無風状態ノ日ガアリソノ日ニ降雪ガアツタトシタラ風上側安全ノ公式ハ逆ニ考エナケレバナラナイ。ソレハクラストシタ雪ノ上ニ降雪ガアレバ当然最モ雪崩レ安イ状態ニナルカラデアル。次ニ風ガ雪底ヲ崩シソレガ雪崩ヲ引起ス事モアリ得ルト思フ。最後ニ板状雪崩デアルガ今迄見タ事モ。聞イタ事モナイノデ。ソレニツイテハ何モカケナイ。

(雨ト雪崩)

日本ノ山デハ。三月カラ五月ニカケテ時トシテ雨ノ降ル事ガアル。コノ場合ノ雪崩ノ危険ニツイテハ阿部先輩ノ研究ヲ読マレタイ。タダコノ時間問題ナルノハ雨量ノ問題デアツテソレガ少量デアル時ハ大シタ影響ヲ与エナイガ。ソノ量ガ多ク雪ニシミコンデ。雪ノ湿度ヲマセバマス程雪崩ハ発生シヤスクナル。ツマリ最湿雪ハ雪崩レヤスイトイウ分ダ。雨が激シク降レバ雪ノ積ツテイル地面ヲ水ガ流れテ。地面ト雪トノ間ニ空間ヲ作ル事ガアル。コンナ時全層雪崩ノ起ル危険ガアル。五月ノ雪崩ニ関シテ重ネテイウナラ。モシ降雪ガナイニモカカワラズ。雪崩ガ起ルトシタ

ラツノ原因ノ最タルモノハ雨デアル。今年ノ五月池ノ谷ノルート図ヲカキニツタ帰り。池ノ谷
出合ノ直グ下白萩川左岸ノルンゼヨリ雪崩ノ発生スルヲミタ。ソノ日ハ明方迄雨がかなり降り
朝ニナツテ止ンデカラハ薄日ノサシテイル天気デアツタガ、朝ノ十時頃雪崩ガオコツタ。ソレ迄
晴天ノ日ガアツタノニ雪崩ガ起ラズ。雨ノ降ツタトタンニ雪崩ガ出タ。コノ事カラ雨が雪崩ヲ起
シタト考エラレル。ソノ時ノ感じデハ春ノ雪崩ニ較ベテ落下ノ速度ガ非常ニ遅イトイウ事デアリ。
雪煙ハ勿論ナカッタ。ダガコノ種ノ雪崩ハ落チル場所ガ大体定ツテオリ（ソレダケニ一層危険デ
モアル分ダガ）予知モ可能ナタメコレニヨリ遭難ハキカナイ。又芦畔ノガイドラシテイワシメレ
バ、五月ノ雪崩ナラ気付イテカラデモ逃ゲラレルトノ事デアツタ。

（雪ノ落着イタ状態）

ヨク人ハ雪ノ落着イタ状態デハ雪崩ノ危険ハナイトイウ。シカシー体何ヲモツテ雪ノ落着イタ
状態トスルノカ僕ニハ良ク分ラヌシ。分ツテイタトシテモ、一、一、文ニ現ス事ハ出来ソウニナ
イ。タダ一般的ニハ二、三日ノ晴天ガ続イタ後、雨が降ツテ後寒冷、襲来デ表面ガ凍結シタ時等
ハ、雪崩ノ危険ハナイトサレ。僕モソノヨウニ考エテイル。シカシ次ノヨウナ時ハドウカ。例エ
ハ湿雪ノ降ツタ後天気ハ好転シ晴レタ寒イ日ガ続イタトスル。コノ時モシ異常ナ寒冷ガ続イタト
シタラ、先ニアツタ湿雪ハ漸次乾シタ雪ニ変化スル事ガ考エラレソウナツタ雪ハ当然ニ雪崩ノ
危険ヲハランデクル。次ニ一度雪崩ガ出タソノ直後デハ同じ所デハ雪崩ハ起リニクイトサレテ
イルガ果シテソウデアロウカ。今冬馬場島取入小舎附近デ。（早月川右岸ニアル小ルンゼ）降雪中
同ジルンゼカラ二度雪崩ノ起ツタヲ見タ。始メノ雪崩ト次ノ雪崩ノ間ハ五分トナカッタ。コレ
ハドヲイウ事デアロウ。自分ハ分ラナイナリニ次ノ様ニ解釈シタ。ソノ日迄毎旦一尺ゾツ程（二
十日以上ニワタツテ）降雪ガアツタ。ソノ日迄風ノ余リナイ日ガ続イテイタ。温度ハ全般のニ低
ク、かなり乾燥シタ雪ガルンゼノ中ニフンワリト積ツテイタ、コレラノ事カラ、積雪状態ハ粉雪
ノ上ニ粉雪ノ積ツテイタ状態ト考エ、マズ上層ノ雪ガバランスノ崩壊ニヨリ雪崩レタ。ソノ
Shockデ下層ノ雪ハ非常ニ不安定ナ状態トナリ、ソレガ又何カノ Shock（スグ横ノルンゼニ
発生シタ雪崩ノ Shockト考エラレル）デ雪崩レタ。斯様ニ天氣ガ続イタトカ、一度雪崩ガ出タ
トイウ事ヲモツテ雪崩ノ危険ガ遠ノイタト考エルノハ間違ツテイイル。（イヅレノ時モ極メテ稀デ
ハアロウガ）タダ降雨ガ多量ニアリソノ後寒サデソレガ凍結シタ時ハ一応落着イタ状態トシテ信
用シテモイイト思ウ。タダコノ時注意シナケレバナラナイ事ハ低所デハ雨デアツテモ、高所デハ
雪カモシレストイウ事デアル。

（雪崩ノ危険アル場所ニ於ル、「ルート」選定ニツイテ）

甲南報告才2号 伊藤 愿 先輩ノ研究ヲ参照サレタイ。

以上雪崩ノ危険ヲ中心ニカキマシタガ、理論的ニハ全ク欠点ダラケデアリ、経験乏シク、浅学
ノ私故。雪崩発生ノ原因ガ全テ推察ノヨウナモノニナツテシマツタ事ヲオ許シ願イマス。タダ雪
崩ニ関スル具体的ナデータヲ集メル事ナラ、僕達ニデモ出来ル事デアリ、今西博士ノカカレタ「
雪崩報告カード」位ハ山ニ必携シテ、ソレニツノ時々ノ雪崩ニ自分ナリノ解釈ヲツケテ記入スル
位ハシナケレバイケナイト思ウ。最後ニ各山岳部デ、データヲ持寄ツテアルプスニ於ル雪崩地図
ヲ作ツタラ大キナ意義ガアルト思ウ。モツトモコレハ雪ノ山ノ状態ハ千差万別デアリ、ソコデ雪
崩ノ起ル場所モ全ク不定トイウ事ヲ認識ニオイタ上デノ話デアルガ。

積雪期（春ヲ中心トシテ）ノ劔西面

1930年代、立教、関学ニヨツテハナバナシイ登攀ガ展開サレタ劔西面ハ最近再ビ各大学山岳部ノ活躍ニヨリ注目ヲアビルニ至ツタ。ソレハコノ西面ガ本邦ニ於テモハヤ数少イ未登ルートヲ多ク有シテイルカラデアリ、西面ソノモノガ非常ナ変化ニ富ンデイルカラデアル。甲南山岳部モ西面ニ志同シテ2年目春山事故ノタメ、我々ハ劔西面トイウ主題カラ一步退カザルノ止ムナキニ至ツタガ、数年後ニハ再ビ部ガ西面ヲソノ主題トシテトリアゲル事ヲ信ジ、ソノ時現役ノ方々が西面ノ研究ヲ一カラ始メル事ノワズラワシサチサケル意味デコレヲカイタ。最初ニ断ツテオキタイ事ハ積雪期ノ記録トイウモノハ常ニソノ時一回ダケノモノデアリ、以下ニ述ベル事モアク迄参考程度ノ意味シカナイ事ヲ知ツテオイテイタダキタイ。

（馬場島エノ道）

雪ノアル時期ナラ、バスハヨクイツテ稜泉寺迄デアル。ココカラ馬場島迄二日ノ行程デアリ途中伊折ニ一泊スル事ニナロウ。伊折迄ハ道モ良クフンデアルガ、ソコカラ上ハスキーヲツケル事ニナロウ。伊折カラゾロメキ迄ハ早月川左岸ノ台地状ノ部分ヲイクノデアルガ、吹雪カレルト、原ツバノ部分デ迷ウ恐レガアル。コンナ時原ツバノ真中ニアル電柱ニソツテイケバ小又川ノ出合迄ハ間違イナシニケル、ソコカラ左折シテコンクリートノ橋ヲ渡レバ発電所ガ目ノ前ニ見エル。発電所カラハ川沿ニイクト馬場島ニ達スル。

（馬場島ノ小舎）

北電ノ取入社宅、飯場小舎、馬場島荘ノミツガアルガ、取入社宅ハ今度使用禁止トナツタ。残ルニツノ内デハ断然馬場島荘ノ方ガ良イ。タダコノ小舎ハ春ニハ完全ニ埋没スルカラ掘り出スノニ手間ガカカロウ。位置ハ取入小舎ヨリ200米丁度バンバ島ノ中間ニアリ、立山川右岸ニ沿ツテタテテイル。

馬場島荘使用問合せ先

富山県中新川郡上市町役場公民課内

土井氏

ゾロメキ発電所問合せ先

富山県中新川郡ゾロメキ

所長宅

富山県中新川郡上市町中村

堀田 政重治

（早月尾根）

西面ノ概略ヲ知ルタメニ、最初ニ登ラレルベキ尾根デアロウ。取付キハミツ考エラレルガバンバ島ニ張り出シテイル尾根ノ末端カラスノガ最モ良イ。最初ハ急ナ登リデアツテ輪カンデナイト無理デアル。急坂ヲ登リ切ルト平坦ナ松尾平ニ出ル。ココハ出来ルダケ左寄りニルートヲ求メ松尾平ヲ登リキレバ右折シテ早月ノ1200ノ部分ニ達スル。ココデスキーヲデポスルノガ普通デアル。ココカラ尾根ノ1900迄ノ登リハ一番苦シイ所デ、冬春共輪カンデ腰迄ノラツセルニ悩ヤマサレル所デアル。バンバ島カラ早月ノ1900迄一日デ達スル事ハ春ハトモカク冬ハ無理デ

アロウ。1900カラ上モズツト幅広イ尾根が続ク。2600辺りが森林限界デアルガ、アイゼンノ必要ナノハコノ辺リカラデアル。雪底ハ全テ池ノ谷側ニ張り出シテイルガ尾根ノ幅ガ広イタメニ問題ニナラナイ。2800ノ大隆起ヲスギルト目前ニ頂上ガドツシルト現レル。ココカラ春ナラバ尾根通シニ、冬ハ尾根ノ岩稜ガ至ル所ニ露出シテイルタメ尾根ヲ伝ワズ池ノ谷側ノ50°近イ急斜面ヲトラヴァースシテイク。イヅレニシロ技術的ニサシテ困難ヲ感ジル場所トテナク、下カラ上迄嫌ニナル位ラツセルヲ強イラレル尾根デアル。冬ナラバニツ、春ナラーツ。以上ノ前進テントガ必要デアロウ。コノ尾根ノ登攀ニ際シテハ常ニ西面独特ノ悪天候ヲ充分計算ニイレテ行動シナケレバナラス。ツマリ冬、春ノ半日天気ヲ確実ニツカンデ登頂シウル場所迄天幕ヲ上ゲテオク必要ガアル。最モ注意シタイノハ冬期。雪ノ状態ニ依ツテ2800カラ上池ノ谷側トラヴァースガ不可能ニナル事ガアルカモシレストイウ事デアル。コノ時ニハ早月ハ一変シテ岩登リヲ代エタカナリ悪イ状態ニナル。コノ時テントハ2600附近デナイト登頂ハ無理デアル。西面ニ於テ頂上ニ至ル最モ安全ナルルートココニ早月ノ大キナ意味ガアル。

(白萩川)

バンバ島カラ早月ノ末端ニ至ツテ左折シ、シバラクイクト関学ノ遭難碑ガアル。コノ先デ右岸ニワタリススムトブナクラ出合ニ達スル。S字峽迄ハココカラ約一軒位デアリココ迄雪崩ノ危険ハナイ。S字峽カラ小窓オ三ルンゼ迄ハ川幅ガ狭ク兩岸ガ切り立ツテイルタメ兩岸カラ絶間ナク雪崩ガ落ち日中ノ通行ハ危険デアル。オ三ルンゼカラ上ハ川幅モ大キク開ケ川ノ真中ヲ通レバ大体安全デアル。バンバ島カラ大窓、小窓出合迄スキーデイク。白萩川ノ詳細ニ関シテハ雪崩地図ヲ参照サレタイ。

(大窓谷、小窓谷)

出合カラ谷ヲツメレバ大窓、小窓ニ至ルノダガ極ク簡単ニイツテ大窓谷ノ方ガ雪崩ノ危険ハ少イ。ソレハ谷ノ形ガU状デアルタメデアリ、谷ノ側壁モ小窓ノソレニ較ベテカナリ傾斜ガユルイ。小窓谷ハ夏期行ツタ事ノアル人ナラ誰シモ驚嘆スル小窓尾根ノ一枚岩ノ物凄イ側壁カラ絶間ナク雪崩ガオチ上部デハ池ノ平山ヨリ来ル。ルンゼカラノ雪崩ガ大キク、加エテ谷巾ガ最初非常ニセマク入口附近デ雪崩ニ会ウト逃ゲル事ハ出来ナイ。シカシコノ谷ノ照射時間ガ短カク小窓側壁ガ北向キデアリ、更ニ小窓側壁ガSLab状ノ急岩壁デアルタメ、ワズカノ積雪モ直チニ雪崩トナツテ飛散スル事カラ大規模ナ雪崩ハ出ナイ・・・・・・トイウ希望の考エガ許サレルナラ雪ノ落着イタ夜間ニ限りコノ谷ノ通行ハ安全デアルトイイタイ。イヅレノ谷モ出合迄ハラツセルナシニイケテモ、一歩谷ニ入ルト不思議ナ程ニラツセルガアル。谷ヲツメル時スキーハジグザグ登リデ高度ガカセグズ、加エテ雪崩ノ危険ヲ考エル時、輪カンノ方ガ賢明デアロウ。

(ブナクラ谷)

白萩川トブナクラ谷ノ出合ハ一見シテソレト分リ難イノデハナイカ。ソレハ両者ノ間ニカナリノ高度差ガアリ、川原ニ立ツテイルトワズカエブナクラ谷ノ最上部ガ見エルニスギナイカラダ。ブナクラ谷ニ入ルニハ谷ノ左岸ニソツテ入ルヨウナ感じデ取付カネバナラナイ。少シイクト谷ハ大キク開ケヤガテ右折スル。ソコカラ上迄カナリノ巾デ谷が続ク。コノ谷ハ西面ニ於テホトンド雪崩ノ危険ノ感ゼラレヌ谷デアリ、又傾斜モ最モユルク相当上部迄スキーノ使用ガ可能デアル。

上部デ谷ハニツニ分レ真中ニ一本尾根が入ツテクルガ、強イテイウナラココガ雪崩ノ危険ノアル場所デアル。

(池ノ谷)

池ノ谷ニツイテハ後述スル。

(小窓尾根)

無雪期ニハホトンド登攀ノ対象トナリ得ヌコノ尾根モ、積雪期ニハブツシユモナクナリ、岩モ緊ツテ登リヤスクナル。白萩川ノS字峽ノ部分ヲスギルト左岸ニ池ノ谷ガ現レソノスグ横ガ小窓尾根ノ末端デアル。B・C・ハコノ辺ニ設ケルノガ普通デアルガ何セ雪崩ノ巣ノ様ナ所デアリ、小窓尾根オ三ルンゼ対岸ノ南向斜面ノ樹木ノ背後ニ、デリケートナテント場ガナイデモナイガ、安全トイウ点デハS字峽ノ部分ノ左岸、早月 1900ヨリクル支尾根ノ末端カ、小窓尾根上ニ出タ所アタリデアル。取付キハ、末端、オ一、二、三、ルンゼアルガ、末端ハ始メホトンド木登リデアリ感心出来ナイ。三ツノルンゼハドレヲツメテモ良イガ地形的ニ最短ノコースハオ三ルンゼデアリ、最モ雪崩ノ危険ガ少イノハオールンゼデアル。ソレハ他ノニツノルンゼノ上部ハイヅレモカール状ニ開ケテイルノニ対シテ、オールンゼ上部ハムシロ狭クナツテオリ、無雪期ノ偵察デモ、オ二、三ルンゼノ地貌ガ草ト岩交リデアルニ対シ、オールンゼノソレハ、カナリ木ノ生エタ地貌ヲ有スルカラデアル。ドノルンゼヲツメルニシロ日ノ当ラヌ内ニ尾根ニ出ナケレバナラナイ。尾根ハ下カラ見テルヨリハズツト幅ガアリ1800米附近迄ダラダラトイクツモノピークヲ乗越サネバナラナイ。1800辺カラ尾根ハ右折シ小窓谷ニソツテズツト続ク。ソレヨリユードルトカ、ドームトカヲ越シテイクノデアルガ、無雪期ハトモカク、積雪期ニハソンナモノハ分ラナイト思ウ。2200米辺リガ森林限界デアルガ、ココヨリ尾根ハ急ニヤセテクル。ヤガテM型ピークニ達スルガ、バンバ島カラ見タ時尾根型ニ見エルアノ岩モ、劔頂上カラ見タ時、先ノ偵察ノ時ノ判断カラ實際ハスノーリッヂノ連続デアロウト思ウ。コノ附近デハ右手ニ劔尾根、左前方ニ小窓コルヲ見オロスヨウニナツテクル。小窓ノ頭デ小窓尾根ハ終リデアルガココカラ小窓ニ達スルニハ、小窓頭ト小窓王ノ真中アタリカラコルニ続イテイル稜線ノ黒部側ヲ捲ク様ナ感ジデススメバヨイ。帰路ハ小窓谷カ、池ノ谷左股デアロウ。B・C・カラ1日デ小窓尾根ヲ登リ切り谷ヲ下ツテB・C・ニ帰ル事ハ非常ナルバイトデホトンド不可能ニ近ク、(コノ尾根ノ三月ノ登攀記録、立教、関学、早稲田ノパーティハイヅレモ一日デ完登シテルガ)1800ノ小鞍部ニA・Cヲ設ケルベキデアロウ。タダ取付キノルンゼカラ尾根ニ出ル迄ハ重荷デハムリデアル。小窓尾根ノ小窓谷側ニハ本ノルンゼガ降りテイルガイズレモ下ル事ハ出来ナイ。コノ尾根ニ於テ最モ注意スベキ事ハ一度取付タラ登リ切ルカ引返スカノ他ニ途中デノ逃場ノナイ事デアル。技術のニワ、早月ヨリ少シ上、ラツセルハ早月ト大差ナイト考エラレル。尚雪底ハ1800米カラ上デ見ラレ、小窓谷側ニ張り出シテイル。

(劔尾根)

コノ尾根ニ一指ダニ触レヌ私ガコノ尾根ニツイテ語ル事ハデキヌガ、早月、池ノ谷、三ノ窓ノ偵察カラ推察ヲ述ベル事ヲ許シテイタダクナラ、劔尾根ハ西面ニ於テ最後ニ登ラレルベキ尾根デアリ、最高ノ斗志ト技術ヲ必要トスル尾根ダト思ウ。記録トシテハ1936年ノ早稲田ノニパーティニ分ケテ完登ガアリ最近デハ京大学士山岳会ノ二名ノパーティガー泊ノヴィヴアークラ交

エテ完登シタトキクガ詳シクハ知ラナイ。B・Cハ劔尾根末端ノコブノ様ニフクレタ所シカナイ。他ハ全部雪崩ノ危険ガアル。一日デコノ尾根ヲ完登スル事ハ不可能デドーム附近デヴィヴァークセネバナラナイ。詳シク知ル由モナイガ下半ハ悪ク上半ハ割合楽カト考エラレル。

(東大谷)

積雪期コノ谷ニ入ッテツノ登攀ヲナシ終エタノハ恐ラク1930年頃ノ立教ダケデハナイカト思ワレル。立教ハ立山川ヲツメテ東大谷ニ入り右俣カラ早月尾根ニ出テイルガコノルートヲトレーススルニシテモ雪崩ノ危険ノ遠ノク積雪状態ニナル迄馬場島デー月位腰ヲスエル覚悟が必要デアロウ。立山川ヲツメテ劔御前ト大日ノ間ノ稜線ニ出ルコースハカナリトレースサレテイルガ、バンバ島カラ東大谷ノ出合迄ハ雪崩ノ危険ガカナリ大キイ。立山川ヲツメテ稜線ニ出ル場合ルートハ無数ニアルガ(立山川ノ奥ガカール状ニ開ケテイルタメ)ルンゼハサケタ方が賢明デアロウ。

(小又川)

小又川ヲ遡行シ、早乙女、大日ニ至ルコースハ芦畔ノガイドノ良ク通ルコースデアル。ゾロメキ発電所ノ少シ下橋ノアル所カラ小又川ニ入り進ムトヤガテ川ワ三ツニ分レテクル。コノ一番右手ノ谷ヲツメルト通称「コット」トイウ所ニ出ル。コノ附近ハ川幅モ大キク開ケズツト早乙女ノ稜線ニ続イテイル。早乙女カラ一路稜線タドツテ劔ニ至ルガ、ポーラノ展開ニクモツテコイノルートデアロウ。コノコースヲトレースシタ記録ハ見当ラナイ。

(東芦見谷)

五月カラ十一月ノ始メ頃ナラコノ谷ヲツメテ猫又方面ニヌケラレルガ、積雪期ハ雪崩ノ危険ガ大キクマダ誰モ通ツタ事ハナサソウデアル。

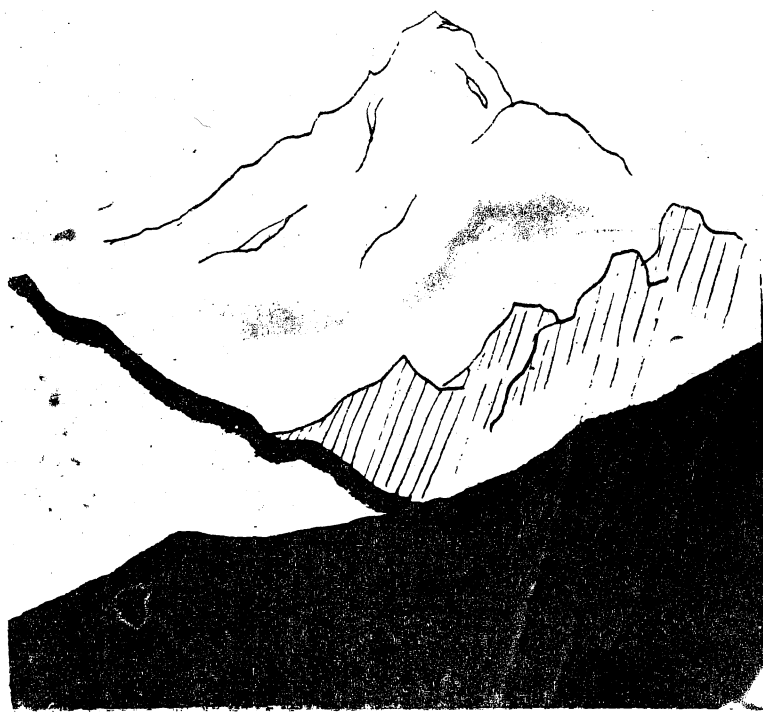
(池ノ谷)

池ノ谷カラ左俣ヲツメテ三ノ窓コルニ至ルコースハ劔西面中国境稜線ニ経ル最短コースデアリ、加エテチンネ、ハツ峯等ノ登攀ヲ画スルニ三ノ窓ハ絶好ノ拠点デアル。ニモカカワラズコノ谷通行ノ記録ガ非常ニ少イノハ雪崩ニ対スル恐怖ガコノ谷エ入ル事ヲコバンダカラデアル。私自身コノ谷ニワ大キナ魅力ヲ感じ、カナリ詳シク調べタノデアルガ、今迄20度位コノ谷ノ入口ニ達シナガラ、谷ノ中エ入ル機会ニ恵マレズ、五月初メニ一度入ッタキリデアル。入口カラ五滝ヲ超エル迄ハ累々タルデブリノタイセキノ上ヲ歩イタノデアルガコレカラ考エテモ春ノコノ附近ニ於ル雪崩ノ危険ハ絶対的ナモノデアロウ。白萩川ト池ノ谷出合附近デワ、谷ハ極単ニ狭ク兩岸切りタツタ典型的ナV字状型谷トナツテイル。二股附近デワ谷ワ大キク開ケ劔尾根ガ右俣ト左俣ニ谷ヲ二分シテイル。左俣ワ劔尾根ト小窓尾根ニヨツテハサマレタ素晴ラシク深く切レコンダ谷デアル。コノ辺リハ登リハ急デアルガ、雪モ緊ツテキテ雪崩ノ危険モホトンドナイト思ウ。結局入口カラ五ツノ滝ヲコエル迄ガ危険区域トイエル。右俣ニツイテハ、ホトンド何モ知ラナイガ、地形ガ褶鉢状デアル事カラ考エテ雪崩ノ危険ハ絶対的ナモノトイエヨウ。谷ヲツメル場合ニ我々が守ラナケレバナラヌセオリーハ、雪ノ状態ガ着着ク迄辛抱強ク待ツ心構エト、夜間デモ自信ヲモツテ、通行出来ル位ノ充分ナ偵察ガ先ニナサレテナケレバナラナイ事ダ。先ノ小窓谷ト同様、雪ノ充分着着イタ夜間ノ通行ハ左俣ニ限り安全トイイタイ。タダコノ場合、出合附近カラスキーデ谷ヲツメラレル様ナ積雪状態ノ時 ツマリ雪ガ軽く、カナリモグル時 ハ谷ノ通行ハ止メ

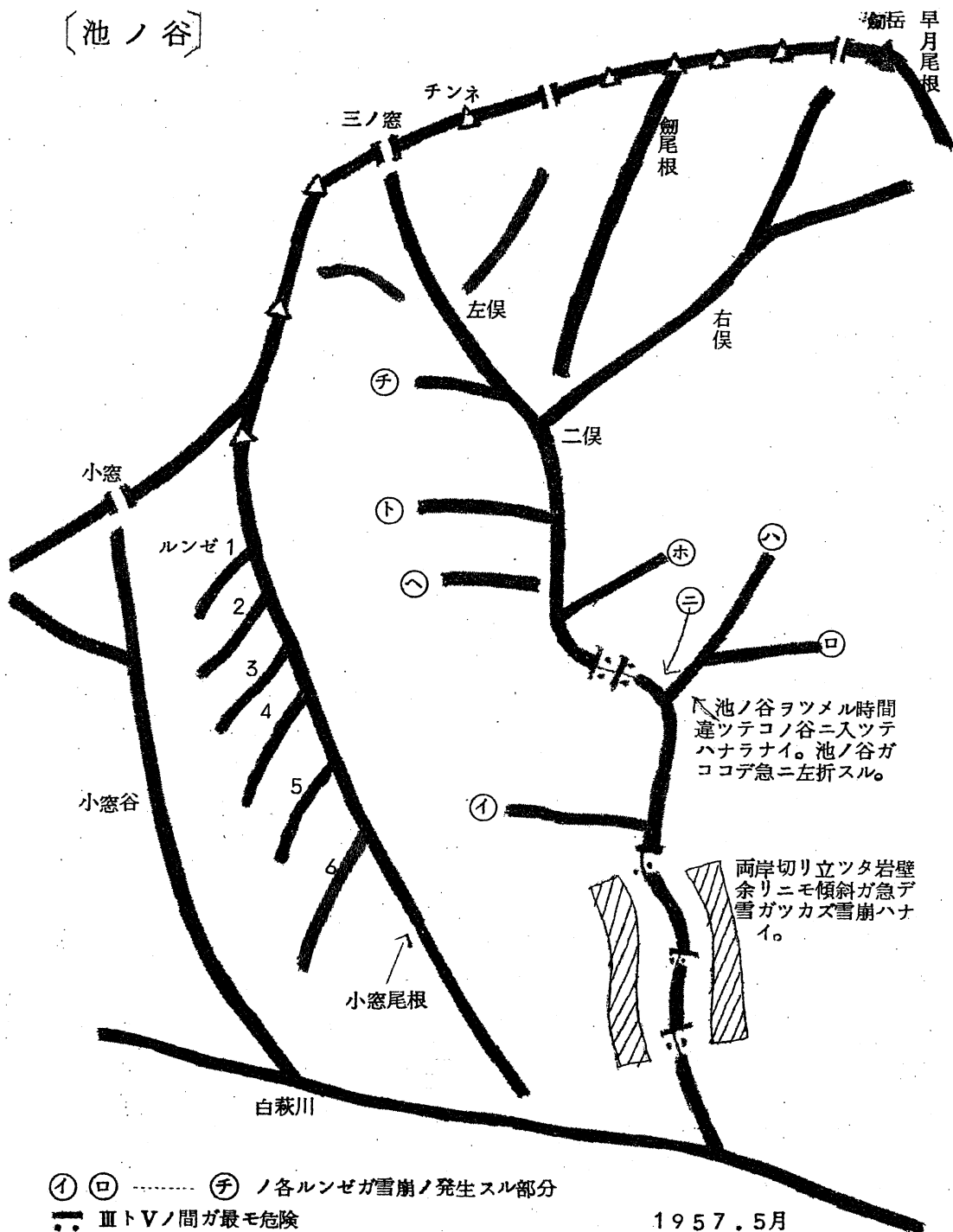
タ方ガイイ。ソレハソノ様ナ積雪状態デハ当然エ雪崩ノ危険モ大キクラツセルモ激シイカラデア
ル。ダカラ輪カンヲ歩ケルヨウナ積雪状態、ツマリ余リモグラス雪ガアル程度シマツテイル時ヲネ
ラツテ、一気ニ三ノ窓迄ツメルノガ得策デアロウ。勿論谷トイウモノハ、一度中エ入ツタ以上、
タイミング良ク引返スカ、トコトン上迄ツメ切ルノガ定石デアルガ、コレニシテモ三ノ窓ニハ少
ク共朝ノ八時頃ニ出タイ。

以上劔西面ノ研究トイウ題目ニハ、程遠イ全クオ粗末ナ内容ノモノシカ書ケマセンデシタガ、
ソレハ、筆者ガ不勉強ト経験不足ノ事由オ許シ下サイ。時間ニツイテハ一切記入シマセンデシタ
ガ、積雪期ノ所要時間ヲ記ス事ハホトンド無意味ニ近イト思ツタカラデス。勿論オ問合せガアレ
バ分ツテイル限リオシラセ致シマス。最後ニ後輩ノ諸君ガイツノ日カ再ビ西面デ活躍サレル事ヲ
固ク信ジテペンヲ置キマス。

10.18.記



〔池ノ谷〕



① ② ③ ノ各ルンゼガ雪崩ノ発生スル部分

㊴ ㊵ノ間ガ最モ危険

右俣カラ二股迄押出ス雪崩ハマズナイダロウ

1957. 5月

雨宮宏光記

寒 山 行

中 馬 宗 武

積上げられた苦悩を振り切つて
私自身の感情に耐えられなくなつて
だから私は
雪多き山へ向うのではない。
凍月に照らされて
雪原の、踏み締められた
村道をいくのではない。

でも
この月の白い雪道で
はつと立止まる時
過ぎた私の
悲しい想出ばかりが甦りあつて来る

何もかも偶然と云うことにしましょう
私達の生そのもの迄も、私達が完全的に生きて来た誇りを奪つられる様な際に
哀れな締念から立ち返らせて呉れる
この言葉を受して
悲しみの中には
十六の年の大切なこの手紙もあつた。

愛も尊敬もなく
唯、憧ればかりを持つて
あの三千米の高みを見つめる男が
こゝに立つて
何を考えているのか

剣は極寒に峻厳に
早乙女は、しおらしく
何時の時代からであつたか
与へられた名前を守つて
沈黙する時

私はなつかしい山々に囲まれて
何時迄この様な救われのない心
を持ち続けるのであろう。

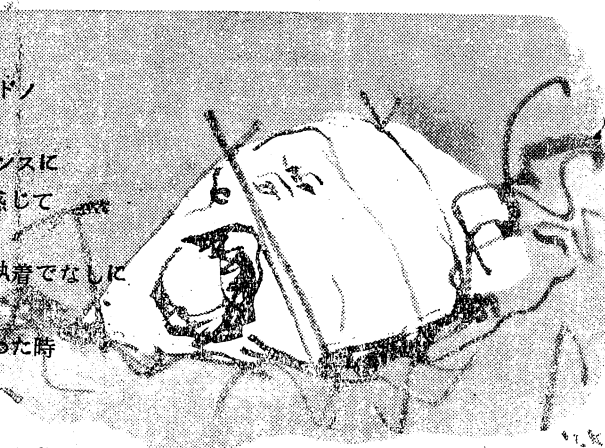


登

攀

雨宮宏光

果しないラッセルの繰返しの中に
 ふと僕は、これで頂上迄いけるのかと不安になった。
 やがて雪が固く緊つて
 アイゼンが緊張にキシンの時
 スリッパする不安を感じた。
 厚い手袋を通してつかむホールドソ
 薄い感触に
 アイゼンのかからぬ小さなスタンスに
 いいようのないジレツタさを感じて
 何もかも投げだしたくなつた時
 僕をとらえたものは、生えの執着でなしに
 登攀えの限りない欲望であつた。
 緊張の連続がさつて頂きにたつた時
 男は、しっかりと拳を固め、
 生命をたしかめる。
 強風が男をたたくのに、彼はじつと動かず
 緊張と興奮が足を伝つて
 雪の中に浸りこんでいくのを
 静かに味わうのだ。°



生

雨宮宏光

息づまる一瞬のさ中に
 友は僕の名を呼んだ。
 あの声を僕は、忘れる事が出来ない
 じりじりと天界えにじりよる
 たくましい生命力のおののきを
 友の背に感じて、いいようのない
 衝動に、大声で呼びたくなつた時
 悪魔の風がふきぬけて、友は宙に浮いた

 テラスでお互の無事を確かめ合つた時

火傷した手に重ねられた
友の手の冷たい感触を忘れる事ができない
僕は希うのだ。
地上に於て、再びあの様に
涙のにじむ程の嬉しさと感激に
僕をひたせぬものかと。



年

報

1956年夏

1957.11月



(お断わり)

春山事故で相当の記録を紛失しましたためその頃については時間を記入しませんでした。悪しからず御了承下さい。

尚六甲、道場等の岩場練習は割愛しました。

(1956年度夏山合宿報告)

大 学 の 部

1 奥又白合宿

参加 雨宮、鈴木、前田、田辺

2 岳川谷合宿

参加 阿部、柏、福井、竹中

3 酒沢合宿

参加 麻島 (C.L) 雨宮、鈴木、阿部、
柏、前田、福井、田辺、竹中、
福永、芦田、美田、伊丹

4 縦走 酒沢 白馬

参加 麻島、雨宮、田辺、竹中、伊丹、
福永、芦田、美田

(北尾根) 雨宮、前田

テント (6.20) — A沢コル (8.50)

頂上 (9.20~50) — 4.51コル (12.40
~50) — 前穂 (14.20) — 天幕 (15.10)

7月19日 晴

(オ一尾根) 雨宮、鈴木

天幕 (6.00) — 取付 (7.10) — 引返シ
(10.50) — 下又白谷ヲ下ツテ天幕
(15.10)

鈴木、田辺、盲腸ノ人ニツキソイ徳沢迄

7月20日 雨

徳沢 (9.50) 天幕 (11.40) 鈴木、
田辺

7月21日 曇後晴 撤集

天幕 (10.30) 松高ルンゼ末端 (11.50
横尾 (14.50)

7月22日 曇

横尾天幕 (5.10) — 上高地 (7.10)

本隊ト合流スルタメ上高地ニ下ル。本隊21
日ニ大阪ヲ出発シテ今日上高地着

麻島、雨宮、鈴木、前田、田辺、芦田、
伊丹、美田、福永

上高地 (9.00) — 徳沢 (11.20~12.20)
— 横尾 (13.40)。

[1 奥又合宿]

7月16日 晴後小雨

上高地 (7.20) 白樺荘 (9.00) 霧気
(11.15~12.00) 新村橋 (12.50)

松高ルンゼ下天幕 (14.30)

7月17日 雨時々晴

天幕 (9.20) — 松高ルンゼ末端 (10.00)
又白ノ池 (14.25)

7月18日 晴

(前穂東壁A、Bフェース) 鈴木、田辺

天幕 (6.20) — A沢 (6.50) — V状雪渓
(9.25) — Bフェース取付 (10.10~40)

Aフェース (10.50~13.00)

頂上 (14.00) — A沢 (14.2) — 天幕
(15.15)

〔2 岳川谷合宿〕

(7月18日) 晴時々雨 4名

テント——神峯——オニ峯頂上——コブノ頭
——ジャン——天狗ノコル——テント

前日雨ノ為増水シオア、二峯ノコルニ取付ケ
ズオア峯コルニ向ウ。オニ峯悪シ。

(7月19日) 晴時々曇、ガス

扇沢ヨリ南壁

天幕——滝下——滝上——奥穂——南重太
郎新道——天幕

(7月20日) 雨 沈澱

(7月21日) 曇後晴

岳沢——上高地——奥又押出天幕

(7月22日) 曇

天幕——涸沢天幕

(7月23日)

天幕——横尾(9.20~40)——涸沢(13.10)

〔涸沢合宿〕

期間 7月21日——7月28日

参加 13名

(7月24日) 曇時々晴

天幕(6.10)——北穂沢(7.40)

午前中グリセード練習

北穂東稜——穂高小屋——天幕

麻島、田辺、竹中、芦田、伊丹、美田、福永

(7月25日) 晴

天幕(6.00)——東稜——穂高小舎(10.20)

——天幕(11.50)——鈴木、前田

〔ジャンダルム〕 阿部、田辺、福永、美田
福井

天幕(6.00)——奥穂(9.00)——ジャン
(11.10)

〔北尾根〕 雨宮、竹中、伊丹

天幕(5.40)——5.61コル(6.50)——

前穂(9.20~50)——奥穂(12.10~40)

——天幕(13.50)

(7月26日) 晴

福井、前田、阿部、美田、福永〔北尾根〕

雨宮、伊丹、田辺、竹中〔三峯フェース〕

(7月27日) 晴

〔滝谷オニ尾根〕

阿部、竹中、田辺、伊丹、福永、福井

〔ジャンダルム〕

雨宮、麻島、前田

(7月28日) 晴

〔三峯フェース、2パーティ〕

阿部、美田、芦田、福井

(7月29日) 晴後雨

阿部、鈴木、前田、福井、下山

〔縦走〕 8名

天幕(6.40)——北穂(8.00~10)——

キレット(11.20~50)——南岳手前(15.10)

(7月30日) 晴

天幕(6.10)——双六(13.50)——三俣

(15.20)

(7月31日) 晴

天幕(5.40)——三ツ岳(15.40)——天幕

三ツ岳ト鳥帽子ノ間(17.10)

(8月1日) 晴

天幕(7.40)——鳥帽子小屋(8.40)

麻島、田辺、竹中、美田下山

雨宮、伊丹、芦田、福永

小舎 (9.10) — 鳥帽子岳 (11.40) — 天幕 (13.50)

芦田ノ足ノ傷悪化シテ泊ル。

(8月2日)

天幕 (8.10) — 鳥帽子小舎 (9.50) —
濁小舎 (14.10)

〔附記〕

酒沢ノ合宿ハ新人ヲ主トシタモノデ、岩登リ
ハ、全テ一年部員ニトツプラシテモラツタ。
縦走ハ、故障者続出デ鳥帽子ヨリ下山スル。

〔11月の初西面偵察行〕

期間 11月2日～6日

雨宮、田辺、芦田

(11月3日) 曇

上市～バンバ島

冬山用の装備を取入小舎に荷揚しておく。
テントは小舎の直ぐ上に張る。

(11月4日) 雨後高曇

テント (9時15分) — ブラックラ出合
(9.40) — 池ノ谷出合 (10.20) —
弁ケイ岩 (11.00) — (11.50) 雷岩屋
— オ三ルンゼラツメル (12.50) —
引返シ (13.40) — 15.00 (オール
ンゼラツメル) — (15.20) 尾根ニ出引返
ス (16.35) テント。

(11月5日) 晴後ミゾレ

出発 (5.00) — 松尾平末端 (6.10) —
2000米 (8.00) — 2800 (12.20) —
シガシラ手前ノ小ピーク (12.45) —
引返シ (13.10) — テント (19.10)。

今年は雪が少く2000米辺でやつと新雪に
出合った。雪が不安定であり、アイゼンをつ
けずにすすむ。頂上手前にて雨となつたので

急ぎ引返す。雪は2000米から上部で約2
尺位あつた。

〔冬山早月尾根合宿〕

参加 雨宮、(リーダー) 麻島 (S.I.) 柳沢
行友、田辺、竹中、芦田、福永

(12月20日) 大阪発

12月21日) 小雪

極楽寺 (9.20) — 折戸 (12.55) — ヨモ
ギ沢 (13.55) — 伊折 (16.00)

(12月22日) 曇時々雪

雨宮、田辺、芦田、伊折 (9.20) — ゴロメ
キ (16.40)
バンバ島ニ向ウモラソセル激シク引返ス
ゴロメキ泊 (19.00)

麻島他4名 伊折 — 極楽寺往復 記録粉失

(12月23日) 雪

麻島他4名バンバ島ニ入ル。 記録粉失
雨宮他2名バンバ島ニ入ル。
ゴロメキ (9.00) — 取入小舎 (12.40)

(12月24日) 小雪

雨宮他4名 取入 (8.10) — 伊折 (11.25)
— 取入 (17.25)
麻島他2名 取入 (8.00) — 早月1200米
デポ地点 (16.00) — 取入 (17.50)

(12月25日) 雪

取入 (10.00) — デポ地点 (14.30) —
天幕設営完了 (16.10) — 取入 (17.40)
田辺、芦田、福永天幕ニ残ル。

(12月26日) 吹雪後小雪

CI (9.50) — デポ1800米 (15.40)
— CI (17.20)

取入 (10.40) — 天幕 (15.00) — 取入
(16.20)

雨宮、竹中天幕ニ入ル。

(12月27日) 快晴

雨宮、田辺、竹中、芦田、福永

天幕 (9.00) — 1800米 (12.00) —

1900 (15.00) — 天幕設営着手 (15.45)

— 設営完了 (16.45) — 天幕 (17.15)

雨宮、田辺、竹中、天幕ニ残ル。他ハC Iヘ
下ル。

柳沢取入小舎ヨリC Iニ入ル。

麻島、行友、小舎からC I往復。

(12月28日) 晴後曇後吹雪

オ一回アタック、雨宮、田辺、竹中

天幕 (2.15) — 2600米 (5.45) —

2800米 (9.40) — 引返シ (9.45)

— 天幕 (12.10)

麻島、行友、小舎カラ天幕往復

(12月29日) 快晴 沈澱

(12月30日) 晴後曇

オ二回アタック 雨宮、田辺、竹中

天幕 (3.10) — 2650米 (5.30) —

頂上 (10.00) — 引返シ (11.00) —

天幕 (12.55)

芦田、福永 (I ~ II ~ I。

天幕 (9.10) — II (12.10) — (I

(14.40)

(12月31日)

天幕 (12.00) — 天幕 (13.00) —

撤牧作業完了 (15.00) — 取入小舎

(16.20)

C. I, CII, 共ニ撤集シテシマウ。

(春期小窓尾根合宿)

参加 雨宮宏光 (C. L) 麻島重彦 (S. L)

竹中 寛、福永隆一、伊丹弘忠。

コノ合宿ノ記録ノ大部分ハ、紛失シタ由分ツ

テイルモノノミ記ス。

(3月10日) 出発

(3月11日) 曇

泉寺 — 伊折

(3月12日) 曇

雨宮、麻島、伊丹 伊折 (8.10) — 取入小舎

(3.30)

竹中、福永

伊折 — 稗泉寺往復

(3月13日) 晴

雨宮、麻島、伊丹、小舎 (6.30) — 伊折

(9.30) — 出発 (10.40) — ゾロメキ

(3.00) — 小舎 (3.40)

竹中、福永 伊折 (9.30) — 小舎 (3.40)

(3月14日) 曇小雪

小舎 (9.30) — ブナクラ出合 (11.50)

— デボ地点。S字峽ノ左岸 (12.50 ~ 1.40)

— 小舎 (2.40)

ブナクラ谷出合デ徒渉ニ時間ヲクウ。

(3月15日) 吹雪 ノビ

(3月16日) 晴

小舎 (8.10) — オ一ノ橋 (9.40) —

デボ地 (11.20) — 天幕設営完了 (13.10)

— 天幕 (16.00) — 池ノ谷出合 (16.50)

— オニルンゼ出合 (17.10) — 天幕

(17.50)

(3月17日) 雪
午前3時出発セントスルモ雪ノタメ沈澱スル。

(3月18日) 晴
天幕(0.40)——コレ以後ハ、報告参照。
5名出発。

(1957年度夏山合宿)

参加 田辺(C.L) 竹中(S.L) 雨宮
鈴木、前田、芦田、伊丹、美田、鳥居
越田、中馬、牧野、藤安、田中、山下
先輩 河崎

{場所 劔岳二股}

7月17日 晴
追分(10.30)——天狗平テント(16.30)

(7月18日) 晴
河崎(O.B) 竹中、雨宮、伊丹、山下
天幕(7.20)——御前小舎(11.30~12.35)
——二股(16.20)

他ハ往復ボツカ
天幕(8.30)——追分(9.30~50)——
テント場(16.00)
強制立退キヲ命ゼラテンヲ タタンデ出発 18.00
地獄谷ニ天幕設営
芦田、美田、
白萩天幕(9.00)——小窓(13.30)——二股
(15.30)

(7月19日) 雨
{二股斑} キーパー 河崎、雨宮
天幕(7.00)——御前小舎(10.45)——
テント地(12.50)——御前小舎(15.25)——
テント地(17.55)
田辺隊ト、竹中隊ト行動ガ合致セズ、結局全
員地獄谷天幕デ寝ル。

(7月20日) 雨
天幕(8.00)——御前小舎(12.20)——
二股(15.00)

重荷ト雨ノタメ行動ガスムーズニイカズ、雨中
行軍デヨウヤク20日二股ニ集結出来タ。

(7月21日) 曇
雨宮、芦田、美田——白萩川天幕へ。

二股(8.50)——小窓鞍部(10.10)——
白萩天幕(12.10)
他ハ全員三ノ窓ニテグリセード練習

(7月22日) 晴時々曇後雨
天幕(6.30)——三ノ窓(9.10)——劔頂上
(10.45~11.00)——長次郎(12.45)
——天幕(13.40)
(キーパー) 竹中、伊藤、越田、中馬
白萩天幕ノ5名上市エ下ル。

(7月23日) 雨 沈澱
芦田、美田ノ2名ハ上市ヨリ彌々原ヲ経テ
劔御前小舎ニ入ル。

(7月24日) 晴時々小雨
(源次郎尾根)
天幕(6.00)——取付(7.45)——オニ峯頂
上(10.50)——ケンスイ下降(12.00)
——劔頂上(13.30)——長次郎コル(14.30)
——二股(16.00)
(キーパー) 竹中、鳥居、田中
芦田、美田二股ニ入ル。

(7月25日) 晴後雨
(ハツ峯下半)
天幕(6.30)——取付(8.05)——1.2ノコル
(9.50)——4峯(10.20)——5峯(11.15)
——長次郎右俣カラ池ノ谷乗越(13.30)——
三ノ窓(14.30)——天幕(15.00)

(キーパー) 竹中、藤安、中馬

(7月26日) 雨 沈澱

(7月27日) 雨
二股天幕(10.00)——御前小舎(13.40)
——天幕(16.10)
芦田、鳥居、牧野食糧補給のため劔御前往復。

(7月28日) 雨 沈澱
山下一人池ノ平ヨリ仙人谷ヲ経テ下山

天幕 (6.40) — 三ノ窓 (8.25) — 池ノ
谷乗越 (8.45) — ハツ峯 5.61コル (9.50)
— 頂上 (13.25) — 長次郎ヲ下ツテ天幕
(15.25)

〔附記〕

合宿前半雨ニタラレ予定ガ大部クルイ、縦
走計画ヲ変更シテ合宿ヲノバス事ニシタ。
合宿参加者中、三年部員二名ノ他ハ全テ、一、
二年部員デアリ、タメニアタツクパーティヲ
多ク編成スル事が出来ズ、新人ニ劔ノ地理的
概念ヲ知ツテモラウニ止マツタ。

〔縦走記録〕 田辺、竹中、伊丹、芦田、美田、
(7月30日) 雨 鳥居、越田、藤安、
伊藤、中馬、田中
二股 (7.30) — 室堂テント地 (15.15)

(7月31日) 晴後曇
テント (8.00) — 一ノ越 (9.15) — 五色
小舎 (13.45) — 五色テント地 (14.00)
中馬、田中、体ノ故障デ下山ス。

(8月1日) 沈澱 快晴
今日ハ休養ニシタ。

(8月2日) 晴
テント (6.00) — カリヤス峠 (7.10) —
平小舎 (8.05) — 南沢出合 (9.40) —
テント地 (12.20)

(8月3日) 晴
テント (6.40) — 針ノ木小舎 (8.30)
— 頂上 (9.20) — 小舎着 (9.50~10.00)

— 大沢小舎 (12.10) — 扇沢出合 (13.10)
全員松本ニ下山ス。

(8月4日) 晴

田辺、竹中、鳥居、美田、伊藤、瀬沢ニ向
ウ。

〔1957年秋ノ合宿〕

〔コース〕 四日市 — 御在所 — 愛知川 —
八日市

参加

田辺 (リーダー) 雨宮、伊丹、鳥居、阿河、
越田、中馬、藤安、伊藤、広瀬、田中

(10月12日) 曇後晴
学校出発 — 四日市 (12.55) — 湯ノ山
(13.50) — テント (15.25)

(10月13日) 晴 前尾根
全員テント出発 (8.40) — 取付キ (9.00)
— 尾根頂上 (12.00) — テント (14.40)
前尾根登はんの後3名岩登リに向ウ。
雨宮、中馬、藤安 藤内壁一ノ壁中央フェ
ース左方ルート。

取付 (14.30) — 頂上 (15.10) — テント
(15.30) 途中、2、3カ所オーバハングガ
アルガ、ピトンガベタ打ニ打ツテアリ楽ニ登レ
タ。

(10月14日) 晴
テント (8.00) — 口見山、御在所山分岐点
(9.00) — 頂上 (9.20) — 分岐点 (9.40)
— 愛知川キャンプ (11.50)

9 0月15日 晴
テント (8.35) — 発電所 (13.15) —
ユズリ葉尾 (14.35) — 八日市 (16.10)

以上ノ記録ノ他、道場ソノ他ノCAMP生活
ガアリマスガ割愛シマシタ。

【11月ノ山行】

参加 雨宮、伊丹、鳥居

(11月2日) 大阪発

(11月3日) 御殿場

富士山ハ、八合目位カラシカ雪ガナクバカ
ラシイノデヤメニシテ穂高ニイク事ニスル。
御殿場〜甲府〜松本

(11月4日) 晴

上高地 (9.40) — 横尾岩小舎 (14.20)

先輩福田サンノ北尾根ノ事故ヲ知り直チエ
福田サント共ニ上高地迄下山。
横尾 (16.10) — 上高地 (19.20)

(11月5日)

上高地 (5.10) — 徳沢 (6.40) —

上高地 (12.10)

徳沢迄リヤカーヲ返シニイク。帰り今迄ノ強
行軍ガ祟リ、川原デ火ヲ焚イテヘタル。
富士山ニイクツモリガ、雪ガホトンドナク、
穂高ノ方ハ、山所デハナクナリ、全クケツタ
イナ山行デアツタ。

【山岳部練習状況】

学校カラ岩場迄歩イテ一時間程ダイケルタメ
毎週土、日ハ岩登リヲ行イ、平日ハマラソン、
体操等一時間程ノトレーニングヲ毎日行フテ
イマス。

高校の部

1956年度

冬山スキー合宿

山岳部員全体のスキー技術が低いため、又一般募集についていつて部員を獲得するため、学校の一般募集と一緒に関で合宿を行った。

参加人員 大関和夫 (高3) リーダー
福永建治 (高3)
柏木宏文 (高3)
楠木正博 (高1)
乾卯太彦 (中3)
安井 正 (中3)
堀田美昭 (中3)

12月23日

大阪発(21.50)ー

大阪駅に8時半に集合する。学校の一般募集の者は皆んな派出な姿をしているので僕等は、すこし気が引けた。汽車は貸切りで皆んなすわれた。汽車の中は暑苦しくて、寝れず床の上に横になる。米原あたりで、雪が見えた。

12月24日 曇後雪

直江津(9.00)ー関山(13.30)ー
関温泉(17.00)

直江津で乗り換えたがここからは、座れず乗るのがヤットだった。関山の手前で屋メシを食べた。関山からは、部員は、ラストを命ぜられて1年生を引っぱって行くので、大変だった。

12月25日 曇后雪

スキー練習開始。各自のスキーレベルによって班別に分けて練習する。

12月26日 雪

部員のみでツアーを試みる。シールを始めて使用する者がいて、つけはずしに時間を食った。ひざ位までのラッセルであつた。

12月27日 晴

朝から天気が良いので神奈山までと云う事にしてツアーに出る。雪が深くてラッセルが、つらかったが、かわつてやつたので割合楽に行けた。神奈山まで行かないうちに時間が来たので、

途中から引きかえした。皆んなぶつとぼしては、ひつくり返つていた。無事帰りつき屋からは、皆んなでゲレンデの中で遊んだ。

12月28日 晴

今日は、最後の日なので昇級試験があつた。写真をとつたりして遊び屋前皆んな関山へおる。皆んな快調にとぼして下りる。関山で屋メシを食べたて汽車にのり直江津に向つた。

12月29日 曇

大阪で解散

(31年度春山乗鞍合宿)

高校山岳部

春山は、冬山に引き続き遠見尾根と決定していたのであるが、大学のアシデントの為、学校よりこの計画を禁止され、又日数も極くわずかに制限され、この様な短期間のスキー合宿となつた次第であります。

メンバー

藤岡・桑原両先生

広瀬(R.高二) 藤安(高二)

福永(高一) 竹原(高一) 堀田(中一)

3月30日 曇

大阪発(14.10)

3月31日

松本着(4.04)ー島々着(6.40)

一鈴蘭小屋着(11.00) 小屋発(12.30) 一位ヶ原山荘着(17.30)

番所迄バスが入る。ここ数日雨で山荘までは雪がコチコチに成つているので、スキーを担いで行く。

4月1日 (雪)

天気は少し吹雪気味。今日は合宿初日なので小屋の前のゲレンデで基本練習をやる。

4月2日 (雪)

前日と同じく小屋の前でスキー練習。

4月3日 (快晴)

すばらしい春山日和。頂上へ全員で向うことにするが、桑原先生と藤君は、ネンザと雪

目の為小屋にとどまる。例によつて頂上からの滑降はすばらしい。肩の小屋のすぐ手前で飛行機が墜落していた。めづらしいので、皆面白がつて写真をとる。何んでも中部日本新聞社の物らしく、南極観測隊の訓練風景を撮ろうとして落ちたものらしい。

4月4日 (快晴)

午前中富士見ヘッアーに行く。

午後、小屋前でスキー練習。米山さんが一人で夕方やつて来る。

4月5日 (快晴)

米山先輩に色々とコーチしてもらう。

4月6日 (快晴)

予定の日程を終り、山を下る。連日の好天気の為、雪がしまり下りはものすごくスピードが出るが、仲々早く下れない。

4月7日 (晴)

大阪着

記 録 1956年度

7月3日

夏山合宿計画準備会 (高校部室)

8月1日

マナスル講演会。隊員の徳永氏のお話と映画。

8月1日～8月10日

夏山合宿、立山温泉～槍岳縦走

9月28日

部員総会「リーダー問題について」(現役及び阿部、田辺、三木、先輩)

10月19日

甲南山岳会総会 学友会館

10月28日

国体協賛六甲山系全縦走(菊水山一六甲最高峰一船坂峠一宝塚)

国体山岳部門中止の為、国体協賛会なるものが開かれた。40Kmのコースを10時間程で歩いた。トレーニングによいコースだと思つた。

(竹原L、柏木、大関、萩田)

1956年度夏山縦走

高校山岳部

29年度の後立山縦走、30年度の剣岳立山針木と、我甲南高校山岳部は、夏山合宿に縦走登山形式をとつて来た。本年度の夏山合宿は、高2部員4名が参加して立山温泉より薬師槍岳までの縦走を行った。

PARTY

武田 国男	(高二)	リーダー
竹原 洋爾	(高二)	食糧係
柏木 宏文	(高二)	装備係
大関 和夫	(高二)	記録係
阿部 公義	(OB)	
米山 悦郎	(OB)	
石渡 均	(顧問教官)	
高田 昇	(顧問教官)	

8月1日 晴

高校部員と先生との6名、21.18大阪駅を、高3部員や福永君達に見送られ出発する。車中は、夏山シーズンの為か登山客が多かつた。

8月2日 晴

富山駅着(7.03)一同発(8.13)ーケーブル(9.03)ー美女平バス発(9.30)ー弘法発(11.20)ー追分(12.45)ー松尾峠(14.20)ー常願寺川キャンプサイド(16.20)寝られぬ汽車の旅、皆少しバテていた。富山駅に阿部、米山さんが、むかえに来てくださった。地鉄は、大変混んでいた。

立山ケーブルは、大変立派で驚いた。ケーブルで7分、美女平に着く。バスは我々が、荷物を荷台にのせているうちに満員となり、運転手とモメた。バスガールの声と共に弘法に到着する。大きな石のゴロゴロしている自動車道を登る。追分で昼食。立山は、まったく俗化された形である。松尾峠の下りは、転んだりして、足がガクガクした。キャンプサイドを常願寺川の岸に決める。浄土山が、夕日に輝いて美しかつた。

8月3日 晴

テント(6.00)ー湯川谷(11.40)

一ザラ峠(13.20)一五色源(14.20)
常願寺川中流で、ケルンがおかしな方向に積ま
れていた為、先発した高校部員は道に迷う。湯
川谷の雪溪は、大きなものだった。今日の暑さ
は、ひどい。やつと、先生や阿部さん達に追い
ついた。ザラ峠の登りは、ものすごい暑さであ
った。五色原の景色は、大変よかった。

8月4日 霧雨

テント(6.00)一スゴ乗越(12.15)
霧の五色原を出発、丸山の中腹で雷鳥の姿を見
かけた。雨が強く我々をずぶぬれにした。寒い
のでビッチをあげる。スゴ乗越の小屋は、営業
していた。柏木君と、テント場を捜しに行くと
雪溪の上をウサギが走って行つた。黄色な水の
夕飯は、うまかった。

8月5日 曇のち雨

テント(6.00)一2500米ピーク(7
30)一薬師岳頂上(10.40)一大郎兵衛
平(14.00)
ぬれた身体で出発。薬師の登りにかかる。27
00米のピークのあたりから先生方は、大分皆
よりおくれる。昼食の時、ラデウスでお茶をわ
かす。薬師岳頂上は逃げる！ピークを登ると又
も目前にピークが、せまり、皆まだかまだかと
歩み続けた。薬師の下りは、かけ足で急ぐ。谷
川のドロコ道で、米山さんが石につまずき足
を打つたので荷物を交換するが、メッポウ重い。
雨の中で水をくんでいると同じジョースをとつて
いた岡山大学の人がまだ、先へ進んで行つた。

8月6日 曇

テント(7.00)一上の岳(8.00)一
黒部五郎岳(11.40)一五郎カール(13.
30)

今朝もまだ雨が少しバラついていて。段々と天
気が回復して行きそうである。黒部五郎の下り
で昼食をとる。五郎岳頂上で、写真をとる。久
方ぶりに陽が照つて来た。

五郎を越えて、雪溪の水で顔を洗う。

五郎カールのテント場は、快適。今夜はぬれた
シラフで寝なくても良いだけでもありがたい。

夜食後、火をかこんで、ダベツテいたら、遭
難者の声らしいヤツホーきこえ、間もなく、
二、三人の人達が、こちらに急いで来た。
パーティの一人が、まだ帰つて来ないそうで、
岡山大の人や甲南から阿部、米山さんが捜し
に出かけた。リーダーの人は、まったくとり
みだしていた。山と云う自然の恐しさに、今
さらながら驚く。リーダー方に夕食を作つて
さし上げる。そうしているうちに、幸にして
発見されもどつて来た。皆、歓声を上げる。

8月7日 曇

テント(6.30)一三俣 華岳(10.
10)一横沢岳(12.00)

昨夜は、遅かつたが、いつもの通りに出発。
昨夜の方も一 横三俣蓮華岳まで登る。
ここでこの人達と別れた。霧が深い。
双六小屋の前で昼食をとる。双六池は、きれ
いだつた。この辺りのケルンは、みごとに積
まれている。硫黄岳の神秘的な姿が前に、右
手には、槍ヶ岳の見えるキャンプサイドにつ
く。

8月8日 曇

テント(6.00)一槍ヶ岳肩(8.15)
一一俣出合(14.00)

風が強く、外に置いていた鍋が、はい松のシ
ゲミにまで飛んでいた。悪戦苦闘して槍の肩
につく。槍ヶ岳は、大変な人であつた。槍沢
の下りはつらかつた。今日よりエツセンは、
いくらでも食べて良いとのことのお許しがあり、まっ
たくありがたい。梓川の水で顔を洗い、洗濯
にまで及ぶ。夜は、合宿最後の夕食で、キャン
プファイヤーを囲んで豪盛なものだった。

8月9日 晴

予定より一日早く合宿を終え、全コース無事
踏破することができた。バスに早く乗る武田、
竹原君は先を急ぐ。柏木君と小生は、ゆつと
りと、上高地へ向つた。上高地で、皆と別れ、
夕方バスの時間まで、ウェストンの碑を見
に行つたり、帝国ホテルの方へ散歩したりし
て過した。松本では映画で時間をつぶす。

8月10日

無事帰宅する。

夏山合宿反省

今年度夏山合宿は、初め岳合宿の予定であった。しかし高校では、岩登りなんかする前に、もつと山での生活になれ将来にそなえて体力をつけておく意味で部員の中で縦走をしようと云う者が出て来て薬師、穂高縦走を決めたが、穂高迄の縦走は、危険だと学校側の反対によつて槍岳までにする事に決定した。合宿直前に、チーフリーダーが、ホッケーの練習で怪我をして合宿に不参加となつた。リーダーが山岳部、ホッケー部の両方に入部しており、その為怪我したのであるからこれはかなり問題がある。いずれにしろリーダー不参加の為、加えてサブリーダーへの引継ぎがまずかつた為、縦走パーティのリーダーが全くの大学依存となつた事は、大いに反省しなければならぬ。O.B.参加のパーティでは、リーダーの立場は、全くむづかしいであろうが、僕達は、もう他力本願的な登山をやめて自分達の力だけで歩ける様な部の育成に努力せねばと思う。

食糧

食糧係の努力により、今年の食糧は、評判が良かった。食糧と云うものは、登山に於て最も大切であるが今迄それが、あまり考慮されなかつた。今夏のものが、最上のもので考ええず、もつと安く、うまく、量のあるものを考えたい。又バツキングであるが、もう少しカッチリとやるべきであつた。

装備

不足物品は、見られぬ様であつたが、雨でふくらんだ支柱は、ぬけないで困つた。これは長いま手に持つて歩いたが、ちやまになつて困つた。デュラルミンのが、ほしいものだ。グランドシート防水は、完全にしたい。

(大関記)

32年度国体予選

参加人員 柏木宏文 (高三) リーダー
竹原佑爾 (高三)
楠木正博 (高一)

9月13日 晴

澁川(13.30)ー有馬(15.00)
一座頭谷キャンプサイド(17.00)ーキャンプファイヤー(18.30)
澁川公園に集合して有馬まで神戸電鉄で行く。
有馬からは、歩いて座頭谷まで行く。座頭谷は、割合大きな谷で、夜食後、キャンプファイヤーがあり歌や話があつた。

9月14日 晴

起床(5.00)ー試験(6.30~7.30)
ーテント(8.00)ー座頭谷上部(8.30)
ー盤滝(10.30)ー奥池(12.45)ー面接試験(14.30)ー解散(17.00)

今日は、座頭谷を登りつめて縦走路に出て奥池まで下つた。座頭谷は、防砂堤が多くてその堤の乗り越しばかりでつらい。

谷の上部は、林の中の急な坂でビッチが落ちて来た。予定の棚越を通らず遠まきにした。ここから盤滝までは、下る一方だ。盤滝から奥池までは、最後の登りである。この登りでは皆んなバテた様だ。奥池で昼食後リーダーだけの面接試験があつた。甲南は、残念ながら代表には、なれなかつた。

春山記録 1957年3月

乗鞍山スキー合宿

高校山岳部

大関和夫

大学山岳部の剣道難事故により、計画を進めていた。「遠見尾根より五龍岳」の春山合宿は中止せざるを得ない状態となり、昨年度春山とまったく同様の乗鞍山スキー合宿に変更された。高校部員の救援隊参加と期日変更で参加部員は六名と云う少数となつた。

MEMBER

藤安賢一 (高三)

大関和夫 (高二) リーダー
 柏木宏文 (高二)
 楠木正博 (中三)
 堀田美昭 (中二)
 安井 正 (中二)

3月31日 (日曜日)

大阪 (14.10) - 名古屋 (19.14)

着 (22.40)
 発

出発直前に中学部員の乾君から参加出来ないとの電話があつたが彼の父は大阪駅まで、わざわざシールをとどけて下さった。牧野、越田両諸兄と竹原君が見送りに来てくれた。昏の大阪を出発、車中では食べたり話し合つたりで一路名古屋へ。中央線は座れたが、スチームが通つていなかったで寒かつた。

4月1日 (月) 晴

昨夜は寒くて寝れなかつた。バスが鈴蘭まで行つてくれるそうで安心した。あのさわがしい島々駅も我々の他は二三人の人しか見あたらなかつた。鈴蘭に到着。少し休んだ後、出発。曇つてはいたが暖かい日であつた、雪もかたまつていたのでスキーを背負つて登る。鈴蘭小屋の福島さんのお話では、位ヶ原は一パイだそうで二日冷泉小屋に泊る事にする。冷泉小屋に着いて間も無く米山さんが下つて来られた。今夜東京へ帰るそうで、色々話をした後、写真をとつて別れた。夜は早くから寝てしまった。

4月2日 (火) 快晴

朝六時に起き、朝食を取るとすぐスキーをする。藤安さんは風邪がひどく、コタツに入つたままである。小屋の前で全制動の練習、灘校山岳部もここで滑つていた。午後、位ヶ原の方にツアーに出かける。山荘には大阪の高体連山岳部のスキー講習会で多くの人がいた。帰りの下りはてんやわんやであつた。途中雪だるまになつたまま、テルモスのお茶を飲む。小屋では風呂をわかしてくれた。こんな山奥で風呂に入れるのは有難かつた。

4月3日 (水) 曇

9時頃まで冷泉小屋の前でスキーをしていた。全員冷泉小屋に別れをつけ吹雪の中を山荘へ行く、近づくにしたがつて猛烈に吹雪いたがそれは一時的なものであつた。さて小屋へ着いて我が室へ行こうとすると、小屋のおじいさんの話では甲南ルームをパンスキークラブが使っているとの事。冷泉小屋へついたのは我々の方が数時間早やかつた。

米山さんに合つた時今日中に山荘へ行つた方が良く云つて下さつたが、福島さんと二日は冷泉で泊つてくれる様にとたまれたので、正直に二日待つて位ヶ原へ行つたら、この始末であつた。パンの人にとのみに部屋へ行つたが一層皆を不愉快にただけであつた。又冷泉へ下る事にした。その帰路楠木君が冷泉小屋の急坂を直滑降して捻座する。

4月4日 (木) 快晴

雪洞訓練を行う。冷泉小屋の下の森林に横穴式を掘つた。昨日から皆、不景気な顔をしているので気分転換にもなるし、来るべき積雪期登山に必要な技術だと思つたからである。相当重労働ながら天気が良かつたので気持が良かつた。午後は、斜滑降、全制動等を練習。灘高の合宿が終り下山するのを見送る。作日から冷泉には我々だけしかいなかった。楠木の足は捻座だと小屋のおじさんはツブをしてくれた。中学二年の諸君のスキー上達にはちよつと驚いた。

4月5日 (金) 晴

午前中、木を立てて廻転をする。トニーザイラバリだとかつてな事を云つては皆滑つていた。屋食後、小屋の人々に見送られて下山発する。楠木君は藤安さんに背負つてもらふ。皆の荷物が多くなる。鳥居尾根は木の技業で作つたソリで、その下はスキーニ台でソリを作り楠木君を下ろした。

四時のバスで松本へ山小屋のコーヒーを皆で飲みに行く。0時45分名古屋行準急に乗る

4月6日 (土)

名古屋より普通で大阪へ

反 省

今回の合宿は大学に於ける突然の事故の爲に急に変更され、計画もリーダーが劔岳救援隊より帰宅して、二日間しか余裕がなく急いで出発したと云うのは休みが終りに近づいていた。そんなわけで色々と不備があつた。しっかりした計画なしの合宿の当然と云えるべき失敗であつた。又高校部員が今回の劔岳遭難によつて受けた精神的痛手は大きく、なんと

なく気持ちが消極的で重苦しい空気が全員をつつんでいた。しかし、下級部員のスキー技術の点ではかなりの進歩を見だし、又一部員の思わぬ傷にもかかわらず、下山する時、皆一致協力して、荷物の重さにもがんばつた事は良かったと思う。今回の合宿は山岳部合宿としては失敗であつても、参加部員に精神的試練を与え、チームワークの点でかなりの成果があつたと思う。

小窓尾根事故報告

甲 南山岳部

〔事故発生状況〕

1957年3月18日0時40分小窓尾根登頂の目的をもつて出発せる。麻島、竹中、福永の三名は、18時頃小窓谷のルンゼ誤つて下降、暗闇の中ヘッド、ランプを頼りに、竹中福永、麻島の順で、40mザイルをスライド式に利用して11ピッチ下り、そこで一旦立止り、ヴィヴアークを三人で協議せんとした時、スリップ（最初に誰が滑つたかは全く不明）数回バウンドして谷底迄落ちた。この墜落により、福永は死亡、麻島は頭部及び全身打撲、顔面過擦傷、竹中は左手首複雑骨折、右足首捻挫す。三名はそのままヴィヴアークする。事故発生時間は、19時30分頃と推定される。

〔現場での処置〕 事故現場

スリップした三名は小窓谷にたたきつけられたのであるが、ザイルは切断していなかつた。最初竹中がすぐ横にいた麻島のうめき声で彼の存在を知り、次に福永を探した所、竹中の下方5米位ノ場所に仰向＝横たわっている福永を見つけた。直ちにザイルを引張つて彼を竹中の側に引寄せたが、福永は呼べども応答なく、鼓動も完全に停止していて目に光なく、竹中は福永の死亡を確認した。時に19時40分頃と推定される。三人はその場でたまたま横にあつた麻島のサブよりツェルトを出してヴィヴアークした。

3月19日

午前3時～5時頃（推定）麻島は、天幕の雨宮、伊丹に救援を依頼すべく出発、約2時間遅れて竹中も出発、午前6時40分頃大窓、小窓出合附近で雪上に眠っている麻島を発見、そこが雪崩の危険なき場所である事を確認して、麻島をそのままに竹中のみ白萩川を下り、7時50分テント手前100米に達しここで、雨宮と出合つた。

以上竹中 寛報告ヨリ

〔現場での処置〕 天幕 雨宮 伊丹

3月18日前記三名と共に出発せる。雨宮、伊丹は、小窓尾根1700米地点にて、アタック隊と別れ（4、30分）往路を引返して、6、10分天幕に帰る。15時20分出発した雨宮、伊丹は、19時40分大窓、小窓出合に達し、三名の帰りを待ったが、下山の気配もないので、ヴィヴアークしたものと推定し20時10分出発22時天幕に帰る。

3月19日

7時40分天幕を出た雨宮は、前方100米附近にて疲労困憊せる竹中を発見、8時竹中を天幕に收容完了、報告を聞く。伊丹は直ちに麻島救出に出発し、15分遅れて雨宮も出発、10時小窓尾根第4ルンゼ附近にて、麻島を発見。12時40分麻島を天幕に收容した。白萩川はすでに絶間なく雪崩が発生し福永の遺体收容に向う事は危険があつたし、重傷の二名の生命が気づかれたので、遺体收容を断念し、13時30分雨宮はパンバ島にむけ出発、2時小舎到着、発電所に援助を依頼し、学校に電報を打つ。16時発電所より四名小舎着、直ちに出发する。他に大阪府大4名成城大4名、福井大生2名同行して下さる。18時天幕に到着。稲森（大府大）伊丹他4名は直ちに遺体收容に出发。小窓谷へ入り、11時頃迄搜索するも折からの降雪とガスのため発見出来ず。20時麻島、竹中は、ソリで下山開始。

3月20日 曇後小雨

1時15分麻島、竹中、ゾロメキに到着。2時20分出发、7時伊折着、8時ヨモギ沉着、10時20分救援隊と合いそこより自動車に乗り11時上市厚生病院に收容される。

以上 雨宮宏光 報告より

〔小窓尾根遭難状況報告〕

竹 中 寛

〔前 記〕

事故当時アタック隊の一員であつた私が、天幕を出てから、事故発生迄の行動を正確に詳述せねばならぬのは当然の事ではありますが、何分にも私の記憶が極めてあいまいであり、又記録を紛失してしまつたために、以下に述べる事柄は、私の記憶にある事実をただ順番に並べただけであり、内容は支離滅裂であると思いますが悪しからず御了承下さい。

（原文のまま）

我々甲南山岳部の春山は、出発前に人員の減数甚しかつたが一応初めの計画、西面の谷の研究小窓尾根登攀、長時間アルパイとそれに伴う計画的ヴィヴアークという事を目的として合宿に入つた。天候はあまり芳しくなく一週間近くかかつてCIをS字峯の左岸に建設した。この日直ぐ偵察に出发、これも昼間は雪崩の危険があるからと、午後3時すぎにC、Iを出发。なんとか明るい内に登り口たる第二ルンゼらしき所にたどりついた。ラッセルが深くたいしたこともしないで、あまりにも小窓尾根を登攀する事を甘く見すぎたようだ。その翌日すぐ出発せんといきごんで、天幕を出たとたん、雪が降つてきて断念。明るく18日午前0時40分出发。アタック隊麻島、竹中、福永の3名、雨宮リーダー、伊丹は後の池の谷左俣登攀のため、サポート隊となつた。先日のラッセルは昨夜来の降雪のため消えてしまつていたので、ラッセルに苦しむ。しかしここではサポート隊が良くがんばつてくれた。ルンゼに入り、意外な深雪のため、時間をくう。1700米附近の傾斜のきつい岩の上に雪がついた少し嫌な所でサポート隊と別れた。時刻は4時過ぎと思う。それよりしばらくは、樹木の茂つた大きな尾根筋で順にラッセルする。輪カンはずけたままである。6時頃平坦な凸地につく。ここが1800米あたりでありここで小休止。この附近では大きな樹もまばらになり、岳樺しか生えてない。ようやく空は晴れ池の谷をへだてて、早月尾根の樹々が尾根上に人間の如く見出せた。その後に早月尾根を登攀中のパーティを見た事がある我々の目的である小窓尾根は前の突起物にさえぎられて見通しがよくきかない。右手に劔の主峯劔尾根がスカイラインに映えていた。上は幅のある雪稜で木もまばらに生えている。時々ルンゼ

が池の谷側にきれおち、鞍部を慎重にわたる。行けども、行けども前方にピークが続出し、自分達がどこにいるのか見当がつかない。相変らず膝位のラッセルが続く。時々福永にトップをかわってもらふ。雪庇は白萩川にはり出し、しばしば大音響と共にくづれおちる。その度に池の谷側をまいていく。ようやく尾根もやせ尾根になりザイルをつけ慎重に進む。

オーダーは竹中、福永、麻島となる。ここ迄はずつとコンティニューアスで進んできた。やつと前方にピークらしきものがなくなり少しの間稜雪が続く。ここは白萩側はすぐく切れ落ち、池の谷側はせまい急なルンゼが落ちている。このルンゼは、岩板に雪がのつておりトラヴァースに時間をくう。ワンピッチいって丁度白萩川にある木で確保する。ここで尾根は直角に近く白萩側に曲つており、左手に白萩側にぐつとつきでた赤茶けた感じの岩峯が見えた。ワカンはこの30分程前に脱いだ。アタックの前リーダーに、ニードルもドームも雪がついて、たいした事はないと聞いていたし、我々も一応気にしていたが、突起をいくつもこえ、その中にニードルらしきものの迄あつたので、もうニードルはすぎてしまい、時間的に云つても、あの前方に見えるのがM型ピークと思い違ひした。この辺に小窓尾根に対する各人の地形の認識不足があり、又適確な判断力にかけていた面があつた。この岩峯が後で分つたのだがニードルの様だ。しかしこの岩峯にとりつくのに白萩側に雪庇がでており、下は急なルンゼとなつてゐる。そこで池ノ谷側に少し出て雪庇をまき、又白萩側に入りこんで尾根のすぐ下をまきぎみに岩峯の右下に出て、そこより中央にトラヴァースして岩峯を直登する。雪と岩のMIXで、アイゼンがきかず、浮石が多く、這松の根をもち強引に登る。上は三人が坐れる程度の所でここで大休止。大休する頃と思う。ここより少し稜雪となり、前方にピークがあつた。もう3人共さつき登つたのがM型ピークだと思いこんでいたので、前方ピークが小窓頭だと思つた。このピークも池の谷側は岩層になつた時々岳樺の生えた大きなものこれは白萩側をまく。ここはトラヴァース自体悪くはなかつたが、雪が深く腹迄もぐる。すんだ所が大きな鞍部になつてゐた。この鞍部より三ノ窓、チンネが夕陽に映えて赤銅色に輝いているのが眺められた。このコルについたのが4時半頃でここで大休止。食糧をたべ地図を眺めて三人で協議し、前方の岩峯が小窓王だとした。それでルートを見ると一旦池の谷側に出て、少々トラヴァース気味に雪の岩稜に登るのが至当だと思われたがその時は、各自あれが小窓王だと考えていたので、もう登らなくても良いと一時に気がゆるんでしまつた。それで三人で協議した結果ガイヴァーク（三人共未経験）するよりはむしろ下の方がよいと一致それにおあえつらえむきに池の谷側はきれおちており、白萩川は上部が開いた大きなルンゼとなつていたのでこれを小窓谷と思ひこみ、下る事にした。時間は6時少し前であつた。竹中、福永、麻島のオーダーで下り出した。上部は膝位迄もぐる程で、傾斜は割合ときつく、まづ竹中が下り、一応30米一ぱい下つて確保し、セカンド福永は、ゼルプストのカラビナにザイルを引つけてすべり下る方式をとつた。これは上と下で確保しているのでそう危険とは思はれず、時間がかせげると思つた。この様にして上下で確保しながら5、6ピッチも下ると、前方に岩稜がせまり、その頃より暗くなり、ライトの下に一步一步と慎重に下つた。途中所々永化した上に新雪がのつており、不安定な所があつた。この辺りは谷の中に入つたと感じられると同じように真暗で、前方10米あたりがおぼろげに見えるといった状態であつた。ここで麻島がトップとなりまず彼が下つた。この時はもうライトの動く状態を見るのみで、人物が行動しているか否かは判断しにくい状態だつた。麻島の下つた所は永化した上に新雪がのり、傾斜がきつく全く悪い所で後の二人が確保していた。下で麻島がこの下は、滝の様だととなつていたので、三人で協議する事に定め、麻島の所え行きつく事にした。福永が下る。彼は下の麻島の注意で少し左トラヴァース気味に下

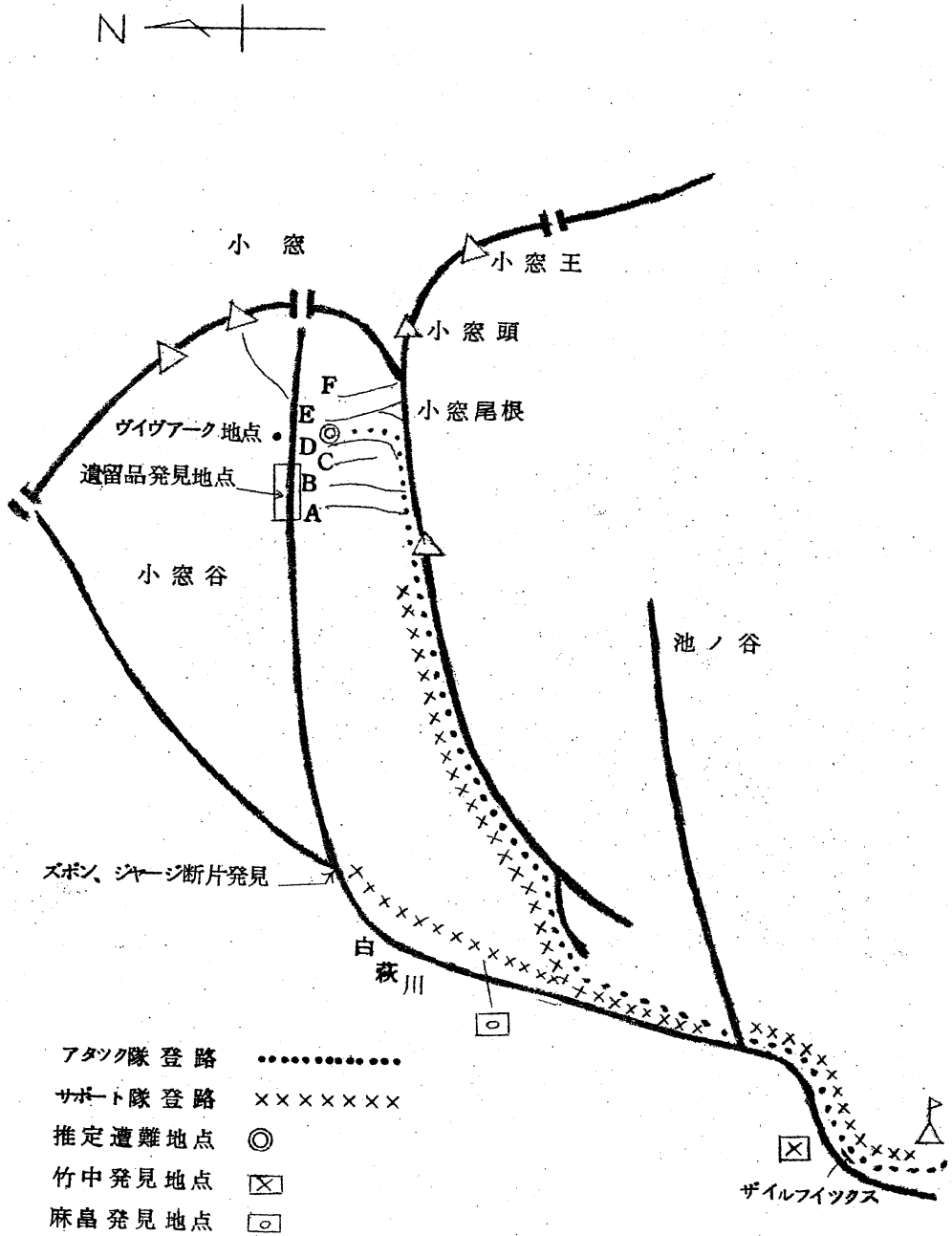
った。下でライトが二重になり、いいぞの聲に竹中も下る。下の二人が何かいつていたが聞えなかった。そのまま真直ぐに下る。途中で足もとが動き、雪煙につつまれて転倒。一旦滝の上部で停った様に思うが瞬間、空間にほり出され、上の二人の事は全然分らず、二、三回数秒毎にバウンドして転落。気がついた時は、深い雪の中にどすんとおちこんで、10米位下に麻島が落ちており、ザイルを張って上ってくる。福永はザイルを身体に巻きつけたまま仰向けに即死していた。二人はすぐザイルを身体よりはずす。麻島、竹中共にサブを背負っており、竹中のピッケルは柄が折れており、麻島のピッケルはいつていた。麻島のサブよりツェルトを出し、福永の遺体と共にかぶり、風でとばぬ様に竹中のピッケルと麻島、竹中のサブで重しをした。中でヤツケ、セータを出して二人共着る。麻島はショツクが大きかったか一言もしやべらず、何でも云った事はしてくれぬ。もう一度福永の口動を調べたが、遺体全体がむくんでしまい、もう冷たくなっており、何としてもだめだと分った。外傷は、はつきり分らなかつたが、なかつた様に思う。二人共暗くてどこが傷いたか分らず気だけ張りつめていた。ただその時は二人共えらい事をしてしまったとそればかり考えていた。ようやく当りが明るくなりかけて、もう一度福永の遺体を調べた。転落当時麻島を呼んだら上ってくるだけの元気があつた事をおもひ出し麻島に救援を頼む。彼はピッケルをたよりにしてよろよろと下つていった。竹中はツェルトの中で福永と共に待つていたが遂にツェルトに陽が当り出すも救援隊来ず、時々ツェルトをめくりあげて下方を見るがそれらしきものも見えない。そうこうしている内に上でドサンという音響と共に、雪崩に見舞われた。たいしたものではなかつたが必死にもがき、どうにか雪面よりはい出した時は、もうツェルトの影も見えず、一本小さな木がデブリの中につき出していたのみで、これは一刻も早く救援隊に逢う事だと単純に考え、その場の状況等頭に入らずすぐ救援隊に逢えば自分のラッセルの消えている所を捜索すれば良いと単純に考えて、弱つた休で下り出した。その時になつて右足のくるぶしが痛く、左手が全然動かないのに気がついた。どの位歩いれかはつきりしないが、雪上に麻島が身体をくの字に曲げて眠っているのをみつけ、こん 畜生 !!

人が折角待つているのにこんな所でサボツていやがらと思つた。が頼みの綱が切れた思いで一応麻島を起すがたよりない。日はカンカンと照り、まあ雪崩の心配もない所にいるので、そのままにしピッケルを借りうけて、再びよろよろと下る。途中何度も呼ぶが答えはない。S字峽の部分で曲つていたのでテントはその真正面の尾根の右下の方にあるらしいが、全然近くはならない。後をふり向くと麻島が豆粒の様に雪上をふらふらと歩いているらしいのが見えた。やつとS字峽の中程の固定ザイルの所で大声で名をよぶと、まずリーダーが出て来た。続いて伊丹、それを見た途端ぐつたりとなつた。二人に抱きかかえられてテントに入り、しばらくして麻島も救出されてきた。

〔後 記〕

小窓尾根登攀は各自の鋤西面に於ける地形の認識不足を主として、種々の適確な判断の不備、未知の地に於ける夜行軍、各自の気のゆるみ等がこの様な重大な結果を招いたと思う。終りにソロメキ発電所の方々、道筋の部落の方、大阪府大、成城大、福井大山岳部の方に紙上を借りてお礼申し上げます。

小窓尾根遭難状況報告



捜 索 報 告

(第一次捜索報告)

事故対策本部での処置 責任者 鈴木 頼 正

3月19日17時頃学校到着の電報により事故を知る。

電 文

「3月18日18時頃小窓下降針の3名 スリップして転落、福永は頭部を強打して、鼓動なく死亡を確認せり。麻島、竹中の二名は救出テントに安置せり。兩名は若干の外傷あるも至つて元気、意識も完全。福永の遺体は大窓、小窓出合附近に、ツェルトにくるんで安置せるも、雪崩の危険大きく日中は、近づけず、同行の雨宮、伊丹の二名は元気なるも疲労の色濃く、自力収容困難。残留部員は直ちに6名以上の救援隊を組織し、5日分の食糧と個人装備、相当の現金をもつて現地に急行せられたし。尚今日麻島、竹中の二名を下ろす予定。」

直ちに非常招集がかけられ、学生部に、阿部、柳沢、柏、行友、宮本、鈴木、砂川、前田、田辺、芦田、美田、の10名集合し、日本海にて第一次救援隊、阿部、柏、田辺、鈴木、砂川、芦田、それに福永父、弟健一君、竹中君両親、麻島君兄、伊丹君母、雨宮君母、学校側より、鈴木山本河先生、合計14名富山に向う、尚阪大の西川氏も同行して下さる。

(3月20日) 晴

中島荘に本部をおき、一般連絡、マネジメントに鈴木が当り、阿部、柏以下4名は直ちに出發する。10時20分稲村にて雨宮と合ひ、報告を聞く。救援隊は18時30分取入小舎に着き、伊丹より現場附近の状態をきく。

(3月21日) 晴後吹雪

1時40分、稲森(大阪府大)阿部、田辺、伊丹現場へ出發、6時20分大窓、小窓出合到着出合迄雨宮のシュプールあり、これより小窓谷を1時間登る。尚小窓谷には出合迄上より下つて来た竹中のシュプールがありこれにそつて登る。足跡は小窓谷の $\frac{2}{3}$ 地点で消えておりその附近で20分程搜索するも雪崩の危険と激しい吹雪のためそれ以上止まる事出来ず、やむなく下る。9時20分天幕到着田辺を残し他は取入小舎(13時35分)。

7時20分、西川(阪大)、柏、芦田の3名は、キャンプに食糧、装備をもつて出發する。

夕食後、砂川、阿部、で話合いの結果、今後の搜索は、夜間は困難であり、又非常に雪崩の危険のある場所由、天候が回復し雪が安定しなければ、搜索は困難なため、長期対策を考えようとする。尚今日は多量の降雪があつたため明日の行動を中止する事にする。又大阪府大、福井大とも各目の計画を持ちながら我々のため協力して下さり、計画が遅れている事もあるので明日から各校計画を進めていただく様にする。

(3月22日) 雪

柳沢、行友、美田、藤安、牧野、取入小舎に到着。

(3月23日) 曇

9時30分、阿部、柳沢、行友、伊丹、美田、藤安、牧野、白萩天幕へ、ボツカ、同時に、4人用ウインペラー設営する。

15時15分、雨宮、福永弟、取入小舎着。

14時10分 阿部、西川、田辺、出發、小窓谷に入り搜索せるも無為。

(3月24日) 吹雪

18時35分、前田、吉田、浜崎、広頼、大開、北方取入小舎に到着す。

捜索の方は吹雪のため中止する。

3月24日現在人員配置状況

天幕

西川、阿部、柳沢、柏、行友、田辺、芦田、伊丹。

取入小舎

砂川、雨宮、前田、北方、吉田、浜崎、美田、藤安、広頼、牧野、大開、福永弟、

中島莊

鈴木、山本、鈴木両先生。

(3月25日) 晴後曇時々小雪。

柳沢、柏、上市え下る。

前日の積雪が多く捜索は中止する。

(3月26日) 吹雪

本部より指令来る。

17時30分、山本先生、柳沢取入小舎到着。

3月26日午前9時上市より入電

25日晚次の通り決定シタカラ指示通り行動サレタシ。

- A 第一期捜索を打切る。四年生は遅く共28日朝迄にCAMPを出てその日の内に上市に到着せよ。
- B 三、二、一年の者は、四年を送り出して後、CAMPの撤収作業を開始し、今後の捜索にそなえて、装備、食糧を小舎に整理し、遅くとも三月中に下山する事。
- C 高校部員は、遅くとも28日四年部員と下山、なるべくは、今日26日、か27日に下山されたし。
- D 27日以後の捜索作業は、小窓谷の写真、概念図を作成し、遭難したと思われる附近の岩のカケラを一つ、ハンマーで取り福永弟にわたしておく事。

(3月29日) 晴

午前0時、田辺、芦田、北方、テントを出発8時まで捜索せるも、墜落点附近は積雪2米に及び、雪崩、デブリ等もあり、捜索は不可能と断定し、谷内部より、遭難点附近を偵察、写真撮影、スケッチをして第一回捜索を打切る。

3月30日

CAMP撤収完了。

雨宮、前田、田辺、吉田、芦田、美田、浜崎バンバ島出発、上市到着後夜行にて帰阪。

甲南山岳会 山岳部合同臨時総会

日 時	4月14日
場 所	学友会館
出 席	山 岳 会 香月以下14名

山 岳 部 雨宮以下20名
学 校 側 村上、鈴木教授

前述の山岳部よりの報告、竹中君の説明、地図、写真をもとに検討した結果次の結論を得た。
アタック隊は、小窓の頭には達せず、それより 下のピークを誤認し、小窓尾根から小窓谷に落ちていたD、E、Fのいずれか、多分Eと思われるルンゼを誤つて下つた。従つて遺体は小窓谷とルンゼEの出合付近にあるものと推定される。以上の結論により当面の対策を次の様に決めた。

- 1 五月初旬に山岳部より偵察隊を出す。
- 2 搜索可能になれば直ちに第二回搜索を行う。
- 3 搜索には山岳部も参加し、物心とも出来るだけの援助協力をする。
- 4 五月偵察により不可能なれば七月にもう一度偵察搜索を行う。
- 5 搜索費用は相当な額に上る見込であるから山岳部、山岳部より学校当局、学友会父母の会に協力を要請する。
- 6 搜索対策山岳部側担当者は、小川、河崎、伊藤（治）とする。

（オ二次搜索報告）

人員 福田（OB）中村（OB）雨宮、鈴木、芦田、伊丹

期間 4月27日～5月5日

この間二度小窓谷に至り搜索するも無為に終る。谷の状況をつぶさに視察し、小窓コルより小窓尾根を偵察する事に依つて次の如き結論を得た。

- 1 小窓谷の積雪量は三月と大差なく、墜落点附近は積雪量30米以上に及び、遺体は未だ雪の下にあるものと推定される。
- 2 誤つて下降せるルンゼはDと想定される。
- 3 パンパ島から小窓谷迄の谷筋は今後減雪に従い徒渉の困難が余想される。

（オ三次搜索報告）

人員 雨宮、田辺、鳥居

期間 5月20日～24日

一度現地に至り次の如き結論を得た。

- 1 小窓谷の積雪量は先の搜索時と大差ない。
- 2 梅雨期に入つて積雪量は加速的に減少する。
- 3 E、Dルンゼと小窓谷の接点にかなりのベルグシュルンドが出来ているが、墜落者は数回のバウンドで谷のかなり真中よりの附近迄飛ばされているはずであり、ベルグシュルンドに陥込む心配は先ずない。
- 4 白萩川は梅雨期の増水に従つて進行が困難となるであろう。尚減雪量を知るため小窓、大窓出合付近に棒杭を打込んでみた。

（オ四次搜索報告）

人員 中村（OB）田辺、福永弟（高校部員）

期間 6月22日～26日

この間二度小窓谷に至り、Dルンゼ出合付近にて約50米四方に散在せる下記の物品を発見したが遺体は発見できなかった。

品 名	数 量	備 考
オーバー手袋	1	麻島所有
毛糸靴下	1	竹中
ヘットランプ	1	不明 破損セリ
サブリュック	1	福永 中味アリ

第四次搜索の後、北電山岳部山岳部、ガイド佐伯利夫等に依り五次、六次と搜索は続けられたが、多少の物品を発見したに止まり、遺体は発見出来なかつた。

〔オ七次搜索報告〕

人員 雨宮、伊丹、鳥居、福永貞治氏

期間 7月5日～15日

この間現地に二度至るも電池、ヘットランプを発見したに止まる。ベルグシュルンドはますます大きくなり遺体がある疑が濃厚になつた。白萩川の状態は、記録的な増水で徒渉は非常に困難となり、小窓谷にも四カ所にわたつてクレヴァスが生じ入口の大クレヴァスは、谷の通行を拒む事が予想された。

〔オ八次搜索報告〕

人員 鈴木、前田、芦田、美田、福永貞治氏途中より雨宮参加

期間 7月17日～23日

この間二度現地に至るも無為に終る。

〔オ九次搜索報告〕

人員 細見 (阪大OB) 近藤 大OB) 雨宮 (甲南) 福永弟 (高校部員)

期間 8月5日～10日

この間小窓谷へ一度入つたが無為に終つた。小窓谷は入口の大クレヴァスが行手を阻んで大窓谷側より池ノ平山尾根を高捲きして谷へ入つた。

9月中旬北電山岳部により第十次搜索がなされ、ツェルト、ザイルの断片が発見された。

〔オ十一次搜索報告〕

阿部、(OB) 雨宮、田辺、麻島、竹中、福永貞治氏。北電山岳部五名

期間 9月20日～24日

9月23日小窓谷出合附近にて福永隆一君の着用していた部員用ジャージ、ズボンの断片を発見、遺体が七月から八月頃の増水時に流されたと断定した。

〔12月1日山岳会、山岳部合同総会〕

出席 先輩香月以下7名

現役田辺以下16名

9月の搜索の報告に基き次の通り決定しました。

- (1) 遺留品の発見部分が非常に広範囲にわたっている事、更に福永君着用のズボン、ジャージ、の断片を発見したという事から、遺体は、6、7月頃の増水期に流されたと考えられる。
- (2) 現場附近が、新雪におおわれている現在、今年度搜索は打ち切りとする。
- (3) 来年度の搜索に関しては、又その時、会合をもつて、相談する。

後 記

今度の春の遭難に依り、多数の方に御迷惑と御心配をおかけいたしました事を深くお詫び申し上げます。負傷の麻島、竹中の両名はおかげをもちまして全快し、元気に登校しております申御

安心下さい。福永君の遺体に関しましては、十幾度にわたる搜索も空しく遂に収容する事が出来ませんでした。その間福永貞治氏には十五度にわたって来富され私達の搜索に物心両面での御援助をたまわりました事を厚く御礼申し上げます。

お世話になりました下記の方々に感謝致す次第であります。

北力電力ゾロメ発電所々長石田 恤様他所員一同様。所長堀田政重治様。

上市警察署々員一同様

大府大山岳部、成城大学山岳部、福井大学山岳部、北力電力山岳部。阪大OB、徳永、細見、近西川様。

学校側、山本、鈴木、川村、木下各教授

甲南山岳会。

甲南学園山岳部。

小窓尾根事故反省報告

山 岳 部

今春遂に犠牲者をだすに至った我々は、事故の原因を徹底的に究明して、福永健一君の死を無駄にしてはならないと考えた。以下の報告は二度の部員総会と、先輩、現役合同反省会の議事録を編集したものである。

「直接的原因」

1 「偵察の不完全」

積雪期は勿論、無雪期のこの尾根上部の状態を全く知らぬ我々が、行つたら行けるであろう式の簡単な考え方で、この尾根を登った事に大きな問題がある。特に小窓のコルから小窓尾根迄の登路の研究が発前前から全く不足していたのはどういう訳か、山に対する甘い考え方が、当然しなければならぬ事をなござりにしてしまった。これは総てリーダーの責任である。

「アタック隊の行動」

ここにも多くの問題がある。小窓谷と誤認して下った谷を下る際に、これが間違いなく小窓谷であるという完全な観察がなされたか。一層いけないのは、完全なヴィヴアークの用意をしながら夜の7時頃迄行動した事である。詳しく地形を知らぬ場所で夜歩くという事は全く山の定石を無視した事といはねばならない。ルートの誤認、ヴィヴアークのタイミングの時を失った事、総て不注意の他の何物でもない。

「間接的原因」

リーダー① 誤った考え方。

合宿出発前時のリーダー雨宮は、10人程度の参加を目論んでなした計画を、人数の減った五人の合宿にそのまま当てはめようとし、人員減によるギャツプを飛躍という言葉でうめようとした。この事に非常な問題がある。何故5人のレベルに相応した計画に変更しなかつたのか。登山にあつては、常に勇氣ある決断を下さねばならない。そう考えれば当然計画は小窓尾根一本に変更されるべきであつた。又いくら計画が二つあつたにしろ、先ず目前の目標に全力をつくさねば

ならぬとしたら、当然リーダーが小窓尾根アタックに参加すべきであつた。後の池の谷の谷左保から岩場登攀を主計画であると考え、体力温存の理由をもつて小窓尾根アタックに参加しなかつた、リーダーの考え方は、間違いである。今一度云う登山にあつては、常に目の目標に全力をつくさねばならない。

〔記録の誤った利用〕

小窓尾根の登攀記録のいずれもが、一日で尾根を完登した事を、そのまま考え、一日で、もしくはヴィヴアークを交えれば登攀可能と考えた事は間違っている。記録というものは、それが作られた時の気象状況、その背景にあつた人達のレベルというものにまで及んで考えなければならない。小窓尾根の登はんをなした人達が、技術、経験、体力共に我々より卓越していた事を考えず、表面のみの観察で記録をうのみにした事に問題がある。彼我の實力の差を無視して、記録を盲信した。これでは折角の立派な記録もその意味を失つてしまう。今一度云う。積雪期の記録について考える時、その記録が作られた全ゆる背景について考えなければならぬ。

こう考えれば、当時の5名で小窓尾根に登るとすれば、当然前進天幕の設営が必要であつた。

〔前進天幕設営に関する問題〕

春山合宿中、麻島、竹中、はリーダーに前進天幕設営の必要を進言した。雨宮はいう。「竹中の進言は強い主張のように思えなかつた。」竹中は云う。「リーダーの一度定めた事に抗うのは悪い様な気がして強く主張出来なかつた。」このような雰囲気を作つたものは誰か、そこに非常な問題がある。リーダーの独断か、リーダーの云う事が絶対であると誤信した、部員の態度か、又はその両方である。責任の大半はリーダーにある。しかしそれをいう前に春山参加部員の小窓方面に対する不勉強がリーダーの独断を許した事も考えねばならぬ。リーダーは絶対ではない。平部員であつても主張は確固たる態度でなされねばならぬ。だがその前にそのような主張を出来るだけしやすくするような雰囲気を作る事もリーダーはすすんでなされなければならない。つまり部員相互間の人間関係についてリーダーは特に配慮しなければならない。今一度云う。良い登山は部員相互の信頼から生れると。

〔進歩という事に対する誤った考え方〕

我々は、常に部の進歩という事を唱えた。しかし我々の謂う進歩は余りにも技術偏重にすぎ、部本来の使命である良き登山者の養成を忘れていた。こんな考え方がえてして飛躍というような誤った考え方を展開さす。部は登山者を養成する場なのだ、目先の功にとらわれて焦る事はないこの点が全く欠けていた。これはずつとさかのぼつていえる事である今迄良き登山者を養成するという考えに基いて行動した事があつたか。この点今後充分留意したい。今一度云う。部は、クライマーを養成するに非ず。登山者を養成する場である。

〔部員各々の自覚〕

春山合宿前の部の練習出席状態は極めて悪く合宿準備も参加者のみでやつたような状態であるお互に部を盛上げていこうという自覚が全く足りない。これも事故の遠因である。部を盛上げようという自覚を部活動の内に、各個人、個人が昇華させていくなれば事故はなくなるに違いない。

後記

福永君の貴い犠牲を無駄にせぬよう、我々は春山事故を通じてしつた以上の事柄をしつかりと胸に抱き、部と自分を完成するように努力する積りです。

編 集 後 記

春山事故の後直ちに報告書を先輩各位に発送すべきはずでしたが私自身その後の搜索活動で忙しくかくも発行が遅れた次第であります。

編集の方針としましてはいろいろ考えたのですが、事故前の部の方針その後の考え方を中心にきとめてみました。ただ先輩にお願いしておきました部に対する批判が思わさる事情により記載できなくなつたのは残念です。

先輩伊藤 憲さんに関しては、もつといろんな事を集めたかつたのですが、資料不足と時間不足のためわずかなものしか集りませんでした。

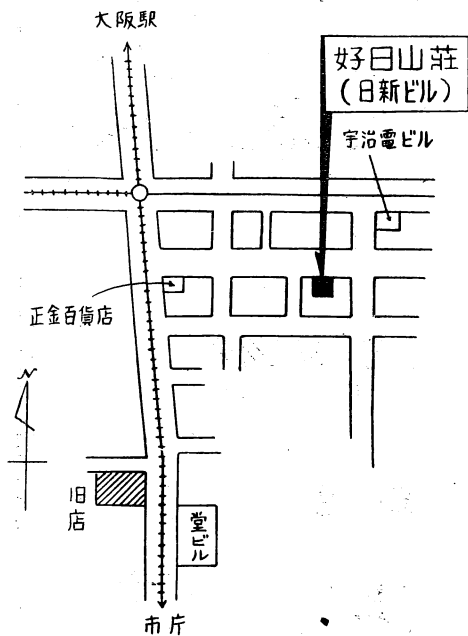
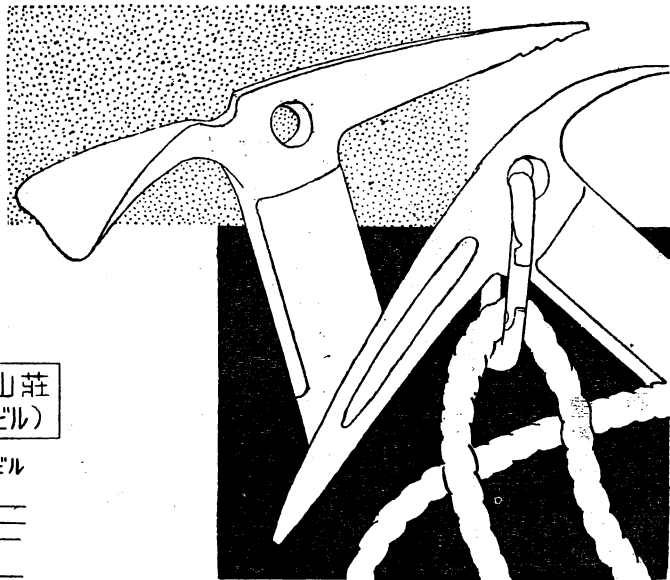
御多忙中にもかかわらず原稿をお送り下さいました先輩各位に厚くお礼申し上げます。

昭和 52、11、30

雨 宮 宏 光 記

店舗を移轉致しました

20数年間住みなれた協銀ビル3階の砦を出て新築完成した日新ビル1階の正面に山荘を移しました



エドワール・フレンド 日本代理店
シモン・シャルレ ビツケル

ヘツド・スキー (アメリカ) 特約店

札幌・門田作 ビツケルアイゼン 総代理店

営業時間 AM 9.30 ~ P.M 9.00

日曜日 祭日も営業致します

大阪市北区老松町3-12・日新ビル1階

TEL (34) 7745

振替口座大阪68763

福岡店

福岡市困幡町27 福ビル2階

電話 ④ 1344

東京店

東京都中央区銀座西2-5

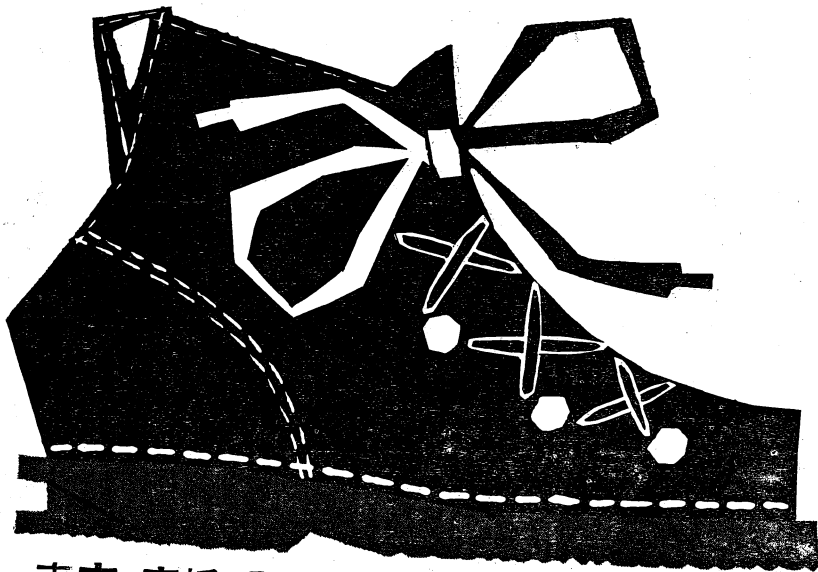
電話 (56) 3600

神戸店

神戸市生田区三宮町1-32-1

電話 ③ 5251

好日山荘



東京 高橋 登山靴 スキー靴 神戸特約店

1 山とスキーの服装は

2 キスリング、ルックザツクは

3 芳賀スキー、小賀坂スキー、金田スキー

他店の追随を許さぬBEST3

山とスキーの店

イカワスポーツ

神戸、三ノ宮町2丁目35

井川

保

TEL ③ 3390

寫眞の事なら

親切な

芦屋寫眞室

国鉄芦屋駅前

KOSID

事務用品・学用品なら
皆様の

コーシ堂文具店

甲南大学下

TEL ⑧ 5404

登山、キャンプの食糧なら

酒・味噌・瓶罐詰・佃煮その他一切

佐野食料品店

稲荷市場内
御影市場内
電話⑧六九二三番
岡本市場内
電話⑧一二八一番



万人
その名を知り
万人
その味を賞す

サントリーバー

フ ミ ノ

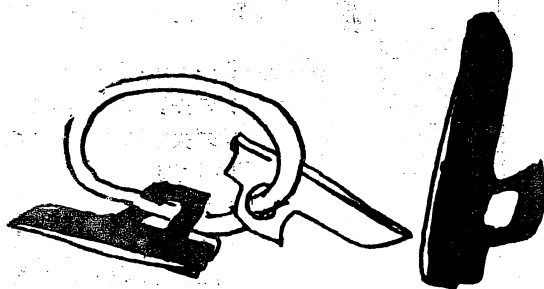
大 阪 市 北 区 太 融 寺 1 0 4

TEL (34) 1 1 2 3



登山とスキー用具 専門 店

甲 南 学 園
御 指 定

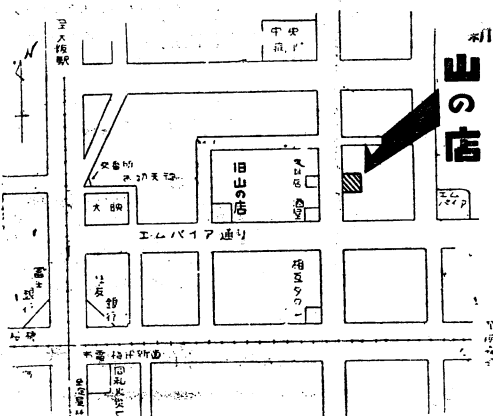


山の店

岡 希 世 史

大阪市北区曾根崎21ノ24

電話 (34) 4 1 9 2



ウロコ印



武田薬品

体力をつくる

『強力』パンビタンは、疲れを防ぐ、胃腸を丈夫にする、抵抗力をつけるなどシンから丈夫な身体をつくる各種のビタミンを含んでいます。

また肝臓の働きをよくして、ビタミンの作用を更に有効化するため、強肝薬メチオニンが配合されているので、効果がいっそう強力です。毎日欠かさずおのみください。

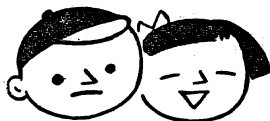
★強力…総合ビタミン剤

強力パンビタン

●ミネラルを配合した『強力』パンビタンMもあります

価格 『強力』パンビタン 30錠(350円) 100錠(950円)
『強力』パンビタンM 30錠(450円) 100錠(1,200円)

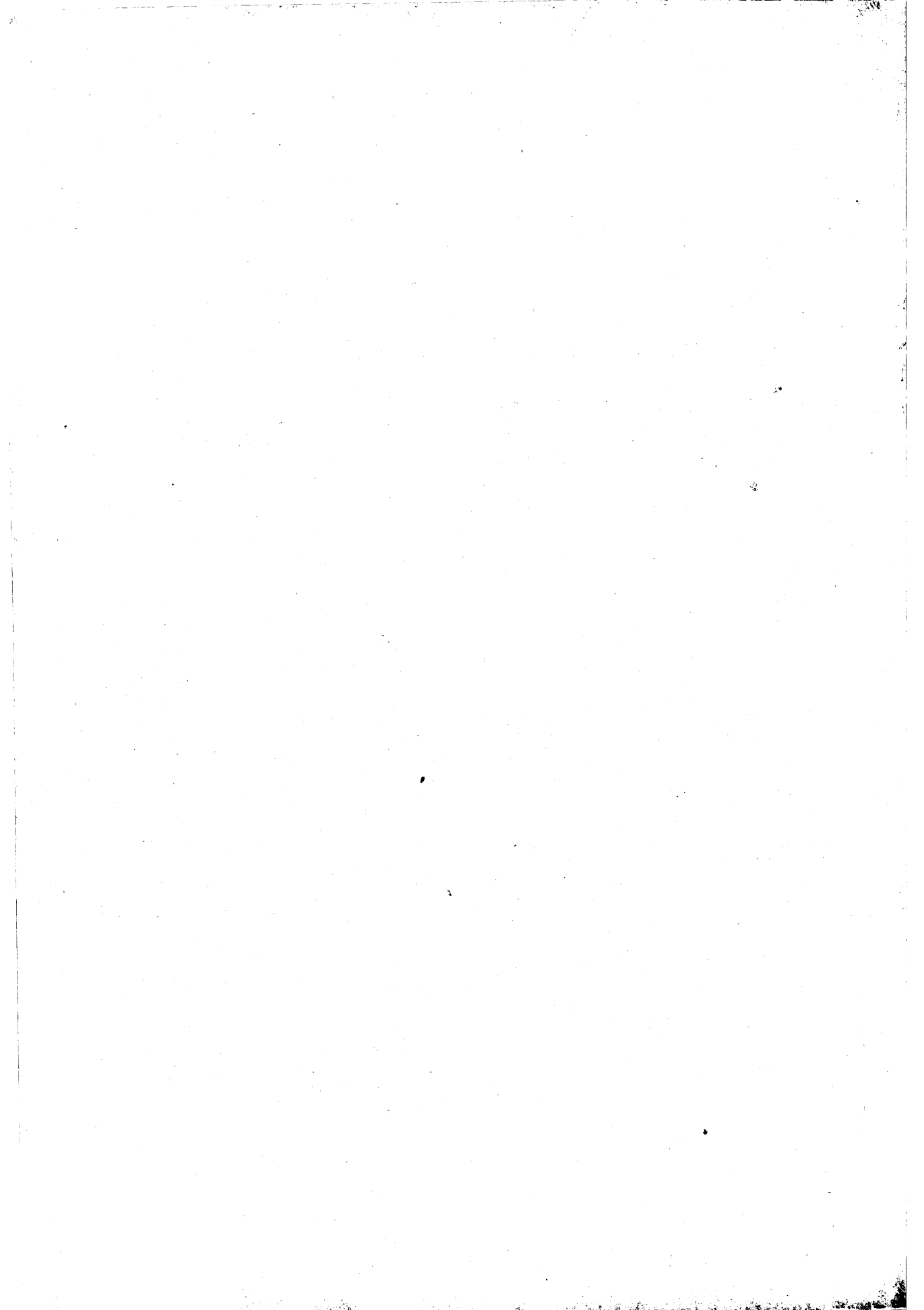
お子様には…おいしい **パンビタン** 液・末



乳幼児に吸収されやすいようにビタミンAやDも水溶性にしています。またお菓子のようにおいしいので、喜んでのみます。お子様の発育と保健にぜひお与えください。

大阪市東区道修町 武田薬品工業株式会社 (東京・札幌・福岡)

(パ15)



昭和32年12月15日 印刷
昭和32年12月20日 発行

編 纂 雨 宮 宏 光

印刷所 山 一 印刷
神戸市生田区下山手通七丁目
電話 元 町 ④ 1 9 6 1

発 行
甲南学園山岳部 甲南山岳会
神戸市東灘区本山

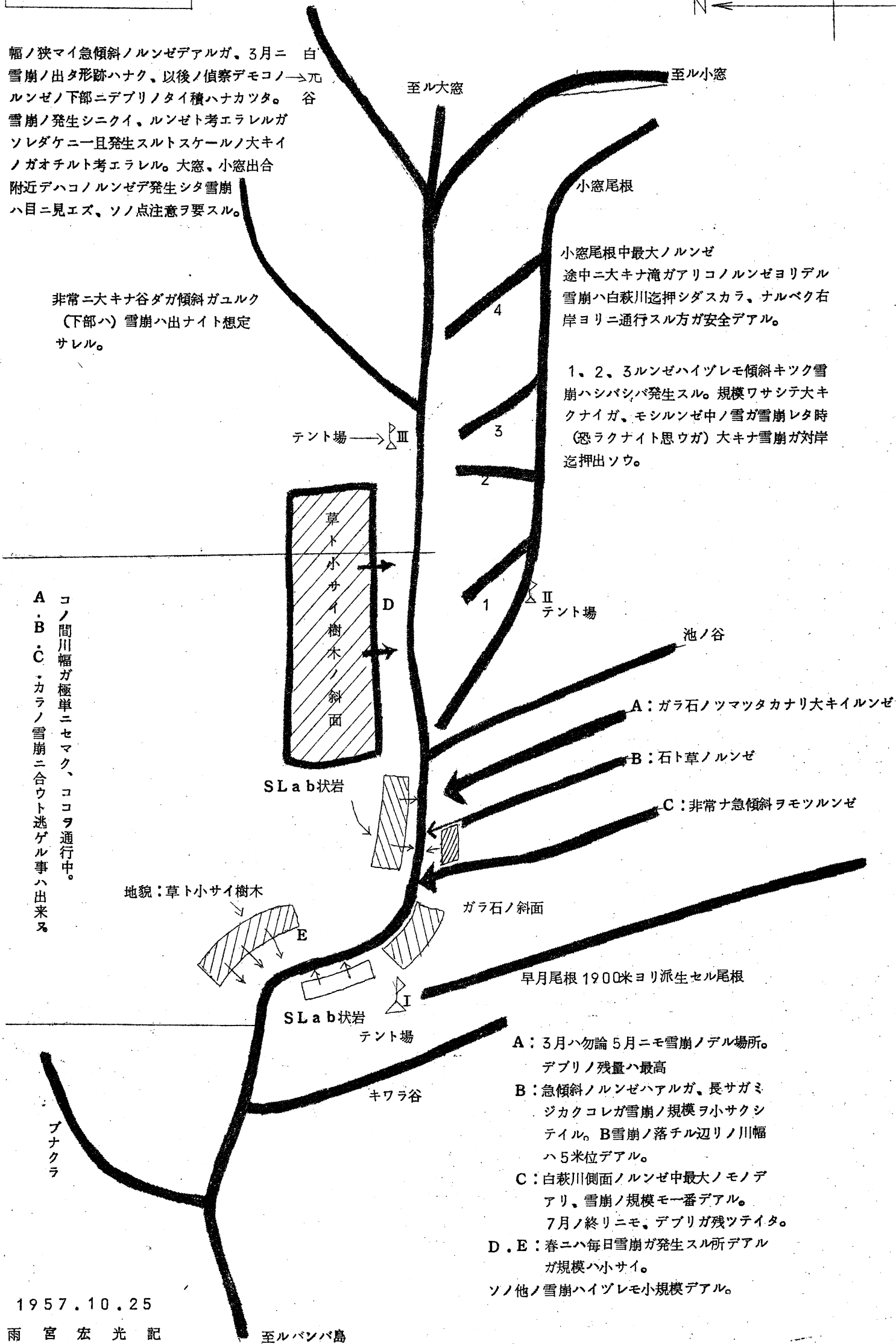
白萩川雪崩地図

(1956.11月、1957.3.4.5.6.7.8.10月ノ偵察ヨリ)

幅ノ狭マイ急傾斜ノルンゼデアルガ、3月ニ 白
雪崩ノ出タ形跡ハナク、以後ノ偵察デモコノ→元
ルンゼノ下部ニデブリノタイ積ハナカツタ。 谷
雪崩ノ発生シニクイ、ルンゼト考エラレルガ
ソレダケニ一旦発生スルトスケールノ大キイ
ノガオチルト考エラレル。大窓、小窓出合
附近デハコノルンゼデ発生シタ雪崩
ハ目ニ見エズ、ソノ点注意ヲ要スル。

非常ニ大キナ谷ダガ傾斜ガユルク
(下部ハ) 雪崩ハ出ナイト想定
サレル。

A・B・C・カラノ雪崩ニ合ウト逃ゲル事ハ出来ヌ
コノ間川幅ガ極単ニセマク、ココヲ通行中。



小窓尾根中最大ノルンゼ
途中ニ大キナ滝ガアリコノルンゼヨリデル
雪崩ハ白萩川迄押シダスカラ、ナルベク右
岸ヨリニ通行スル方ガ安全デアル。

1、2、3ルンゼハイツレモ傾斜キツク雪
崩ハシバシバ発生スル。規模ワサシテ大キ
クナイガ、モシルンゼ中ノ雪ガ雪崩レタ時
(恐ラクナイト思ウガ) 大キナ雪崩ガ対岸
迄押出ソウ。

A: ガラ石ノツマツタカナリ大キイルンゼ

B: 石ト草ノルンゼ

C: 非常ナ急傾斜ヲモツルンゼ

A: 3月ハ勿論 5月ニモ雪崩ノデル場所。
デブリノ残量ハ最高

B: 急傾斜ノルンゼハアルガ、長サガミ
ジカクコレガ雪崩ノ規模ヲ小サクシ
テイル。B雪崩ノ落チル辺リノ川幅
ハ5米位デアル。

C: 白萩川側面ノルンゼ中最大ノモノデ
アリ、雪崩ノ規模モ一番デアル。
7月ノ終リニモ、デブリガ残ツテイタ。

D、E: 春ニハ毎日雪崩ガ発生スル所デアル
ガ規模ハ小サイ。
ソノ他ノ雪崩ハイツレモ小規模デアル。

1957.10.25

雨宮宏光 記